であるから土佐日記と名を付けられたのである

男もすといふ日記といふものを、女もしてみんとてするなりそれの年十二月の二十日あまり一日の日の、戌のときにかどです、そのよしいさゝかものにかきつく

〔摘解〕男は男子の通稱○「すといふ」は爲すの義、故に男もするとは夫の漢文もて、書き記す日記を指すことである○日記とは日々の出來事を記せるものゝ稱○女もしてみんとてするなり」は女ながらも旅路の日記を、試みに編んで見ようとの意である

〔通解〕以上此日記の書き樣をいうたのであるが元來この日記は貫之のぬしのみづからかゝれたるものであるが假名文なるを以てわざと女のしるせるさまにいひなして書き綴られたのである

それのとしは某年にて年號のさだかならざる場合に用ふるを常とす然れども爰にては實に朱雀天皇の承平四年即ち紀氏が土佐守の任はてゝ京へ歸へらるゝ時の年であるけれど、この日記を女のものしたる趣にせられて記者の名をだに記されぬこと故にしつかりと指さないで、ぼんやりと某年とは記れさたるのである、十二月の廿日あまり一日は十二月二十有一日である、日のとは其日の、となりいぬのときは今の午後八時頃に當る、かどです、とは門出とかき即ち家の門を出で旅途につくをいふなり、そのよし、とは土佐の國より京へ歸る旅路の有樣を云ふ、いさゝかものにかきつく、些少の義にて、すこしそのありさまを書き、試むると云ふ意である

〔文法〕以上は本書の作意をことはりたのである此日記は貫之のぬし、みづからかゝれたるを、他の女の書けるさまにせられたるは、一の文の作匠である

あるひと、あがたの四とせ五とせはてゝ、れいのことども、みなしおへて、げゆなどとりて、すむたちよりいでゝ、舟にのるべき所へわたる、かれこれ、しる、しらずおくりす、年ごろよくぐしつる人々なん、わかれがたくおもひて、その日しきりにとかくしつゝのゝしるうちに、夜ふけぬ

〔摘解〕あるひと○貫之ぬしみづからのことなれども、女のかけるさまにせられば、かくおぼめかして言はれたのである○あがたの四とせ五とせはてゝ、はあがたは、縣なり、國司の其任國をさしてあがたと云ふ○四とせ五とせは、四年五

年なり、はてゝは、終ること、

〔進解〕紀氏が延長八年土佐の國司としてその國に下り、今年承平四年其任がはてゝ京へ歸るのであるからかように云ふたのである

れいのとゝゞも、前任の人後任の國司へ國務をゆづり、一切の記錄をわたす事どもを云ふ○みなしおへては皆な爲し畢る義○げゆは、解由とかく即ち、とくるよしといふ意でありて、こゝにては、正税公廳など御倉の公物を改め渡して後任の司より算勘とゞこほりなしとの受取書を貫之ぬしが受取るを云ふ○すむたちは土佐國長岡郡なる國司の住む館をいふ○船にのるべき所へわたる、牛老川の船にのるべき場所へ行くことである○しるしらぬおくりすは知已も不知已も多くの人が見送たといふことである○としごろよくぐしつる人々、としごろは年來なり、こゝにては其任期の間をいふ○よくぐしつる人々は、格段に召仕はれて貫之の許へ親しく出入せし人々を云ふ○わかれがたくおもひて、再ひ逢ふまじとてなごりを惜むの義○とかくしつゝ、荷物を船に運び且つ離別の宴をはるなど、とやかくするをいふ○のゝしるうちに、がや〳〵騒ぎ立つほどにといふ意である

二十二日いづみの國まで、たひらかにとねがいたつ、藤原言實ふなぢなれと、うまのはなむけす、かみなかしもふひすきて、いとあやしく、しほうみのほとりにてあざれあへり

〔解通〕いづみの國、畿内の和泉國である○たひらかにとねがひたつ、京まで歸る人であるから都まで無難にと願ひて出立せられたのである○藤原言實」…此人を橘守部氏は後任の司の屬官なりと記されたるが、いかにや○ふなじなれどうまのはなむけす馬のはなむけは餞別といふ義なり、むかしは、旅する人の乘りたる馬の鼻を彼方へ向けて悲なくとよ、など云ひしが、後には酒を、のませ、物をおくるを馬のはなむけすと云ふのである、これは船路といふ辭に對して殊に馬といひて之も諧謔にせられたのである○かみなかしも、上中下の身分の人々をいふ○ふひすぎて、酔過ては、いたく酔ひたることである○いとあやしく、はあやしは不可思議といふ意○しほうみのほとりにてあざれあへり○しほうみのほとりとは、紀氏の船出する場所をいふ○あざれあへりは、酒に酔ひ過ぎて狂ひ戯れる

さまを云ふ○あされは、もと魚肉のあざれたることよりの來たれる語である、さてこれを人の上に云ふは亂れたるさまをさして云ふのである、こゝにては潮海の邊にと殊更にかひて其鹽のある海邊にても、人はあざれあへりと、これも戯れにいふことばである

二十三日、八木の康敎といふ人あり、この人、くにゝかならずしもいでつかはるゝ人にもあらざりき、これぞたゝしきやうにて、うまのはなむけしたるかみがらにやあらん、國びとのこゝろのつねとして、今はとみえざなるを、こゝろあるものは、はぢずになんきける、これは物によりてほむるにしもあらす

〔通解〕 八木の康敎の傳記は詳かならざれども土佐の國の人であらう○この人くにゝかならずしもいでつかはるゝ人にもあらざりき、この人もと身分貴き人であるから國司の廳などに召し使はるゝ人ではないと云ふ意○これぞたゝしきやうにてうまのはなむけしたる、身分貴き人であるから禮義たゝしく餞別をもて送別に來られた○これぞたゝしきやうにては、昨日船出場に醉過てあざれたる人の樣にない實に清白の餞別をしてくれたとの意である○かみがらにやあらん、即ち國司の治め方のあしき故によるのであろうとの意○國びとのこゝろのつねとして、凡て國人の人情は○今はとみえざなるを、今ま別るゝと云ふ時には送り來るもの見えざるもので、あるまことに薄情なものだのに、こゝろあるものは、有志者は○はぢずになんきける大かたの風俗にそむきて他人より誹謗せらるゝを恥ずして見送りに來てくれたよと云ふ意なり○「なんきける」は來ると云ふ意を強く言ひあらはす場合に用ゆ○これは物によりてほむるにしもあらず、かく八木の康敎を賞贊するは其餞別の贈物のよきによりて譽るのではない、全く其人の厚情を謝すると云ふ意である

二十四日、講師うまのはなむけしにいでませり、ありとある、かみ、しもわらはまで、ゑひしれて、一もしをだもしらぬものしがあしは十もしにふみてぞあそぶ

〔通解〕 講師とは住古は國毎に國分寺といふものがありて、其住職を講師といひて國内の僧尼の司宰とし、兼ねて敎育の任をおはしてあつたが、この講師とは土佐の國の國分寺の講師である、いてませり、は參られたりといふこと、今の俗語の暇請に御出なされたりと云ふと同じことである、○ありとあるかみしもわら

はまでは、總体身分の貴き人も卑き人も童兒まで○ゑひしれて、其席にある人は送別の酒に辭ひくづれて、正体もなくなりての意なり○しれては痴者といふ意にて夫のゑひておろかしうなるといふこと、

○一もじをだにしらぬものしがあしは十もしにふみてぞあそぶ○此の例の戯諧の文匠にて書かれたのである、夫の諸方より贈られたる贐物の酒杯を飲み且食ひて酔ひしれたりしかば、足もとがさだまらずしどろなるをいふ意である、岸本氏の考證に曰く、ものしがの「し」文字は「ら」の誤りにてものらがであると加納眞淵翁は、すでにものらがとして註を下されたけれど是は助字であらうやはり「し」としてよよむがよからうと思ふ

二十五日、かみのたちより、よびにふみもてきたれり、よばれていきて、日ひとよ、夜ひとよ、とかくあそぶやうにてあけにけり

〔通解〕 かみのたちよりは國司の館をいふ○即ち紀氏に替はられたる新任の土佐守の居所より○よびにふみもてきたれり、新任の土佐の守の許より書狀をもて紀氏を呼びに來れることとてある○よばれていきて、呼ばるゝまゝに行きたりといふこと○日ひとよ夜ひとよ、終日終夜なり○とかくあそぶやうにてあけにけり、年ごろ住みておりた館であるからとかく心やすく、且つさま〴〵の待遇にて、深く興に入り、遂に夜の明くるまで、遊びたるといふことである、この廿五日はちようど節分に當りてあるから、されば世の習慣として當日は寢ぬべき夜ならねば、さる方に取そへて互に心うちとけ、遊びつゝ夜を明したのであろう

二十六日、なほかみのたちにあるにあるじしのゝしりて、をのこらまでにものかつけたり、からうたこゑあげていひけり、やまとうたあるじもまらうども、こと人もいひあへり

〔解義〕 なほかみのたちにあるに、昨日の如くに今日も猶ほ新任の土佐の守の居所にあるにといふこと○あるじし、は饗應なり、主人の賓客に對して馳走するしわざなどをいふ辭よりこれが轉訛し來たれるのであろう○のゝしりて、聲だかに、呼びさわぐをいふ○をのこらまでにものかつげたり、をのこは從者共である品物を與へとらすことをいふのであるさて昔は他より物を貰へば必ずうちかつぎて禮をする故に、人にあたへるものはなにしなでもかつぐものといふて

むりたのであるこれよりうつり來りて、總て物を與ふることをば、かつげものといふたのである○からうたこゑあげていひけり、からうたは唐詩であるそこで詩を高聲にて吟じたといふのである○やまとうた、和歌のことである○あるじこゝのあるじは主人にて今の土佐守のことをいふ○まらうど、稀人の義にて客人のことである即ち紀氏自身のことである○こと人もいひあへり、こと人は、他人のことにて、主客の外その席に列せる客をいふ、主人客人、は元より其離別の宴に臨みたる他人まで和歌を讀みたと云ふ意である

からうたとれにはかゝず、やまとうたあるじのかみのよめりける

「みやこいでゝ君にあはんとこしものを、こしかひもなくわかれぬるかな」となんありければ、かへるさきのかみのよめる

「しろたへの波路をとほくゆきかひて、われにはたれならなくに」とかくいひて、さきのかみも、今のもともにおりて、さきのもいまのも手とりかはしてゐひごとに心よげなることとしていてにけり

〔講義〕此日記は女の書きたる体にしたのであるから、詩などは、かゝぬとゆはれたのである○やまとうたあるじのよめりけるは、新任の土佐の守の作りて讀まれたるは「みやこでゝ云々の歌である、此歌の大意は京を出てゝより、貫之の君に逢ふとそれを樂みに思ひて來たのに、かく遙々と此土佐の地まで來た甲斐もなく速かに別るゝことよ、さてもく〳〵との意である、○かへるさきのかみ、紀氏自身のことである「しろたへの云々さて此歌の意は遠く且おそろしく海路を越へ來りて苦しき目を見たる我身に似たる人は誰ならぬ外の人ではない即ち新任の土佐の守であるさてもく〳〵公務の多忙にして心配なるが思ひやらるゝとの意○しろたへ云々……は波の枕詞なり○ゆきかひ……は往交といふ辭にて我と他人と交替するを云ふ○「ならなく」はならぬの延詞である、強く云ふときに云ふのである○さかしきも、なかるべし、こと人のよみた歌もあるけれど秀作のものはない○とかくいひ、主客打とけて、とやかくと種々のことをいひてといふ意○さきのも、前の土佐守即ち紀氏なり○いまのも、新任の土佐の守をいふ○もろともにおりては、紀氏かこの館を出てゝ歸るとき新任の主人も階上より下りておくることである○手をとりかはして、手を握ることを云ふ○ゐひごとに心

よけなることとしていでにけり、この一句は首途の祝言であるその意は主客もろともに酒興に入りてとり〳〵に芽出度首途の祝言などいひかはし連れたち出でたといふこと○ゑひごと、は酔言なり○心よけ、は機嫌よきといふことである

二十七日大港より浦戸をさしてこぎいづ、かくあるうちに、京にてうまれしおんな子こゝにしてにはかにうせにしかば、このごろのいでたち、いそぎをみれど、なにごともえいはず、京へかへるに女子のなきのみぞかなしみこふる、ある人々もえたへずこのあひだに、ある人のかきていだせるうた、みやこへと思ふものゝかなしさはかへらぬ人のあれはなりけり

〔解義〕○大港より浦戸をさしてこぎいづ、これは土佐の國の地名大津は長岡郡浦戸は吾川郡にあるこれらの處を舟に乘りて出でたと云ふこと○かくあるうちには、かく旅立たんと支度する間○こゝにして、にはかにうせしかは、此處にての意ではない土佐の國にてうせたると云ふ意であろう

見開抄に云く、こゝにしては此國にてうせたるにて京へのぼりぎはではあるまい何故なれば京へのぼるとき京より同道して來た女子のことを思ひいで懷舊

の心尤もあはれと思はれたのである即ち上洛ぎはになりて連れ歸ることを俄かに思ひ出だされたのであると」此說尤も信せらるゝと思ふ○いてたちいそぎ旅立の用意支度をいふ○なにごともゐいはず、何事もいはないと云ふ意である

「え」と云ふ字を上に添ゆるは古文に多く見る所でありてあへて云ふことをようせない即ち言ふにも及はないとの義である

〔通解〕さて、こゝの總体の意味は、旅立の用意支度を見れど、京へ歸るを嬉しと勇むこゝろもなく、たゞ年ころ育てし女子のうせたることを悲み思ふのみにて、何事も手につかずといふことである、京へかへるに女子のなきのみぞかなしみ戀る、京へ歸るはうれしきことであるけれど、みやこに歸ろうと思ふにつけても、反て悲み戀ふるは歸へらぬ女子のことのみかなしく思ひ出されるとの意、ある人々もゐたへず、貫之のみでない他人までもかなしみに堪へずといふことなり○このあいだに、あいだは中間に事を起す語であり て其義「に因て」と同じく、即ちこのなげきの程にといふ意である○みやこへと思ふものゝかなしさは……、この歌の大意は京へ歸らんと出で立は、嬉しく樂しき極まりであるけれど常にかわり

でものゝかなしきことは、唯だ死して共に歸らぬ女があるからであるといふ意である

またあるときには、

あるものとわすれつゝなほなき人を、いつちとぞかなしかりける」といひけるあひだに、かこの崎といふ所にいたるに、かみのはらから、又こと人これかれ、さけなどもておひきて、いそにおりゐて、わかれかたきことをいふ○かみのたちの人々の中に、このきたる人々ぞ、心あるやうにはいはれほのめく、かくわかれかたくいひてかの人々のくちあみもろもちにて、このうみべにて、になひいだせるうた

をしと思ふ人やとまるとあしがもの、うちむれてこそわれはきにけれ」といひてありければ、いといたくめでゝゆく人のよめりける

「さをさせどそこひもしらぬわたつうみの、ふかき心を君に見るかな」

といふあひだに、かちとりものゝあはれもしらで、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなんとてしほみちぬ、風もなぎぬべしとさわげば船にのりなんとす

〔解義〕「あるものとわすれつゝなほなき人を云々」○「いつち」といふ辭は何處にといふことで俗語で「ドコドコ」にといふ辭と同じことである

さて此歌のこゝろは彼の死して今は此世になき女の子をまた此世の中に居るものじやと思ふて死したをわすれて、あの子はどこに居るかとたづねることがあるがまことに思ひ出すたびごとに悲しきものであるといふことである、○かこのさきといふ所にいたるには鹿兒の崎は大津の西にあるこのところまで來たことである、○かみのはらからは、かみの國守のことで即ち新任の土佐守のはらからとは兄弟といふことある○又こと人これかれ、ほかのこれかれの人をいふ○いそにおりゐて、は潮海の邊にて船より上りて磯邊に降りることである○かみのたちの人々の中に、は新任の土佐守の屬官中に於ての意である○このきたる人々ぞ心あるようにはいはれほのめく、は心ざしかあるからにて即ちあつきまごころがあるからそのけしきが顏色にうす〳〵見へる漢字では勞氣といふことにあたる○さて此大意は土佐守の屬官の中にて此跡を追ひて來てくれた兩三輩のみは、厚き信切心があるようにて船中の人々もウス〳〵さゝやき合ふたとの意である

眞淵氏曰く心ある樣にとは歌よむ心あるをいふ、ほのめくは、そのけしき見ゐてほこりがなるをいふなりと

春海翁云く歌よむ心あるをいふにはあらず心ざしあるやうにいひなすなりと

余は春海翁の說に左袒す　何故なれば上文より引つゞけたる詞の意味に通するからである○「かの人々のくちあみもろもちて云々」

かの鹿兒の崎まで追ひ來たりし人々がといふ意○口あみは大網のこと○もろもちは、諸持といふことで、いと大きなる引網を諸人かゝりてになひもちて引あぐる事であるが　さて此文の意は海邊にて目にふれる網を取りて譬へにひき戲れたのである即ち歌よむ口のおもく諸人互にたすけあふて辛ふじて歌をよみ出せること、宛かも大なる引網を諸人して引き寄す如くに力をつくしたことを例の諧謔文にてかいたのである。○「おしと思ふ人やとまるとあしかもの云々」おしは惜しきの義であるけれども爰にて此鴛の意をもたせてあるその下の句に葦鴨といふことを讀みて照應せんがためである、又あしかものは打むれてといふ辭の枕詞であるさて此一首の意は別れ惜しいと思ふ人がもしや留まるか

と我々は葦鴨のように、この崎まで群らがり飛びて慕ひ來たるといふたのである、○いといたくめでゝは、甚だ感賞してといふこと、○ゆく人は紀貫之である○「さゝなさせどそこひもしらぬ云々」そこひもしらぬとは際涯も知れぬと云ふ意

○わたつみは海を守り給ふ神であるが轉して唯、海のことをいふのであるさてこの歌のこゝろは掉させど底の限りは知られない海のように人々の深切の心は用ちてゝ送り賜はる君方によりて見ることだわい、さても〳〵深き志の人々であるよといふ意○といふたびだに、とはそのようによみかわすあひだにと云ふ意である、○ものゝあはれもしらでは、かく我々は互に再び逢はれぬ別を悲みておるけれど、船子共は更に其情を酌み知らず自身さへ酒をのめば早く船をこぎ出ださう潮が滿ちた、ほどなく風も吹くからはやく船に乘り給へよと騷ぐから心ならずも船に乘ろうとするといふ意である

このおりに、ある人々おりふしにつけて、からうたども、ときに、につかはしきをいふまたある人、にしの國なれど、かひうたなどうたふかくうたふにふなやかたのちりならり、そらゆく雲もたゝいよひは、とぞいふなることよひ湊戸にとまる藤原のときさ

ね、たちばなのすゑひら、てと人々おひきたり

（解義）ある人々は、貫之ぬしを送りに來たる人々のことゝおりふしにつけては、送別の折にかなひたることゝきにつかはしきをいふは、唐人餞別の時に陽關などいふ詩を吟ずるが如くに唐詩の送別に適したるものを吟せしといふ意なり○かひうたなどうたふは、甲斐歌とは元來甲州は東國である此處は西國であるに東國の歌を歌ふたと例の紀氏の文匠である○ふなやかたのちりもちりは、こは劉向列傳に虞公發聲清哀盡動梁塵とある句を引かれたるなり○うらゆく雲もたゝよひぬは、こは列子に秦青が聲振林木響遏行雲とあるより來れる句である、たちばなのすゑひらは、橘の季衡にて土佐の國人であろう

二十八日、うらどよりこぎいでゝ、大湊をおふ、このあひだに、はやくの、かみの子、やまぐちのちみね、さけよきものどもてきて、ふねにいれたり、ゆく〳〵のみくふ

（解義）うらどは、浦戸のことにて吾川郡の海に出てたる處にあり○大湊は、長岡郡と香美郡との間に在る、大湊の泊りを追ふて舟を漕ぎ出せしとの意、○はやくのかみは、前の土佐の守のこと○よきものは美物にて珍美の肴などを云ふ○ゆく〳〵

のみくふ、舟の進行する間に飲食せしとなり

二十九日、おほみなとに泊れり、くすし、ふりはへて、とそ、白散さけくはへてもてきたりてゝろざしあるに似たり

（解義）くすしは、醫師なり、てゝに云ふ「くすし」は朝廷より一國に一人〳〵置きたる醫官なり、○ふりはへては、明日は元日であるから態々來りてとなり○とそは、屠蘇のこと○白散は屠蘇と同じく正月元日に用る藥種用品である○てゝろざしあるに似たりは、醫師の藥酒を持ち來るは珍らしくもあらねど明日の元日を忘れずしてかく用意を致したるはさてもよく氣が付きたることゝなり

元日、なほ同し泊なり、白散を或者夜の間とて舟館にさしはさめりければ、風に吹きながさせて、海にいれて、え飯まずなりぬ。

（句解）白散屠蘇と同じく正月元日に用ゐる藥酒、病氣邪氣を消すというて、除夜袋に容れて井戸の底にかけ、元日、酒に浸して今も、元日に飲む、○夜の間とて夜の間のことなれば、○舟館舟の屋根、○さしはさめりければ、差し挿んで置いたから○風に吹き流させて、風に吹きやられてといふこと、併し、或本には、吹き鳴らさせ

て、といふやうに書いて、紙や何かに包んだ白散の藥が、風にパラ〳〵吹き鳴らされるのだと、解釋をしたものもあれど、唯吹きやられたといふ丈けで澤山だ、白散の包を風に吹き流させたのだ

（解義）元日は、永平五年の元日だ、昨夜即ち大晦日の夜は、同じ土佐の國、香美郡の大湊に碇泊したが、醫者がわざ〳〵尋ねて來て、屠蘇白散にお酒までも持て來られたけふは元日だから舟も出さずに、同じ大湊に碇泊して目出度新年を迎へやうと、思つて居つたのに、かの屠蘇白散を惜い事に、誰かゝ井戸の底にかける代りに、西落て、舟の屋根の軒の端に、さし挿んで置いたものだから、風に吹きやられて、海の中に吹き込まれ、あのお醫者の志も無益となり、トウ〳〵飲む事が出來なかつた。

芋も滑海藻も齒固もなし。かやうのものも無き國なり。もとめしもおかず。

（句解）齒固、餅のこと年が始めに少し齒にてたふるものを食うて、わが齡を固むる祝ひごとにするのだ。

（解義）前に云ッたやうに、白散の藥を、海に吹き込まれたからせめては、例のお祝ひに用ふる芋か海藻かまた齒固でもあッたなら慰みもするのに、こんな物でもない國だのに、心附きもしなくて、取り寄せても置かなかッたのは、甚だ殘念だ。

唯押年魚のくちをのみぞ吸ふ。此吸ふ人々の口を、押年魚若し思ふやうあらむや。

（句解）押年魚一杯、鹽年魚一杯など云ッて、やはり元日にたへるもので干し固めた年魚のことである。

（解義）無くてはならないものは、一つもなくて、たゞ、鹽をして押し固めた年魚を仕方なしに食うとしたがなか〳〵齒も立たず、其上、年魚の數も少くて、人に分けるほどもなく、やう〳〵お頭を頂戴したから固くて〳〵たまらないで、たゞ、嘗めて吸るばかりだ。かやうに、船中の者が隔てなく、打ち解けて、吸ひ合ふてる人々の口を、此押年魚がもしか、知る事が出來たなら、否だよとか、良よとか、伺とか言うであらうかどうだらう。

今日は、京のみぞ思ひやらるゝ。九重の門の尻久米繩の、鰯の頭、柊が、如何にとぞ言ひあへる。

（句解）○九重の門、天子の御宮の御門、○尻久米繩、注連繩。○なよしばらの子。

（解義）ほんとに、今日は、元日だから、京都の事ばかりが思ひやらるゝ。其中にも、宮城の御門のシメナハの飾の、ボラのアタマや、終なんどのやうに、皆物毎新しうなッて居るだらうかと、船中の人々が話し合ッた。

二日、なほ、大湊にとまれり。講師、物、酒、おこせたり。

（句解）講師は、十二月廿四日に、餞別して呉れた國分寺の住職の事。此時分は、朝廷より國々の僧尼の監督をするものを擇んで、任命したもので、即ち是を講師といふのである。○もの、食物などのこと。

（解義）矢張り大湊に泊ッて居た。ところが、以前の講師が、また種々の食いものや酒などを持たせて、贈ッて呉れた。

三日、おなじところなり。若し風浪のなほ暫しと惜む心やあらむ。こゝろもとなし。

（句解）こゝろもとなし。覺束なく、あやふやな。他の注釋には、あやにくな、とか、待遠な、とかいふやうな風に解すれど、余は少し考ふる處があるから、右のやうに解する。

（解義）くる日も〳〵、舟を出すことが出來なくて、また同じ港に泊らねばならぬ

とは、情ない事である。何故だらう、ヒョット此私が船にのると見て風や波が別れを惜んで、荒るのではないだらうか、しかし、どうだか分らない、それほど惜まれるほどの者でもないから、そうでも無いだらう、あぶないものだ。

四日、風吹けば、え出で立たず。昌運酒よきもの奉れり。かうやうの物持て來る人に、なほしもえあらで、聊かわざせさすものもなし。賬はしきやうなれど、負くる心地す。

（句解）なほしもえあらで、猶そのまゝでは、よう過ごされ悪う。かうやう、かやう

（解義）又今日も舟が出で悪うで、泊ッて居る退屈を、思ひやッて、昌運といふ人が、酒などを船中に入れて呉れた。すべて、かやうに物を贈ッて呉れる人へ、其儘でも捨て置き難いと、心には思ふけれど、舟の中のことだから、いさゝかなる返禮をも命ける物もなうて、止むを得ず、受くるばかりである、せめてと思ッて、酒など出して、一時は脈やかなやうにもあつたが、それでも、何人だか、何處かにひけめがあるやうである。

五日、風なみ止まねば、猶同じところにあり。人々絶えず訪ぶらひに來。

（解義）けふも、風が吹き止まぬから、やはり同じ所に居るのである。訪問の人々は

絶間なく來る。

六日、きのふの如し、

七日になりぬ、同じ湊にあり。けふは、青馬を思へど、かひなし、たゞ、波の白きのみぞ見ゆる。

（句解）○青馬、正月七日に青馬を見れば、年中の邪氣を除くといふことを、昔は言ッたのである。

（解義）もう七日になッたが、まだ同じ所に居るのである。けふは、京都では、白馬の節會と言ッて、青馬を見るのが例であるのに、思ふばかりで、致し方がない。青いどころか海の上は、波が眞白である。

かゝる間に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、鮒より川のも海のも、ことものをも長櫃に荷ひつゞけて、おこせり。

句解、○ことものの、外のもの、

（解義）青馬どころか、波の上は眞白だなどゝ、駄沙汰れて居るところへ、池所の名）から、鯉ではない、鮒を始として川の魚といふ魚を澤山また海の魚を澤山、其上また、外の物をも、長持に入れて、どん〳〵荷ッてやッて來た。

若菜籠に入れて、雑など花につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌なり、其うた、

淺茅生の野邊にしあれば水ぞなき　池に摘つる若菜なりけり。

（句解）○淺茅生ッバナといふ草の生へて居るといふ意味である。○若菜、七種のわかな。正月七日羹にして食へば、萬病が無くなるといひ傳へて居る。

（解義）右の魚の外に、また七種を籠に入れて、雑子などを梅の花につけてあッた。けふは、青馬も見ることが出來ないから、七日の樣子も無かッたのに、若菜が有ッて呉れて始めて、七日である事を知らせて呉れたといふものである。而して、是に添へた歌がある、その歌は私はつばなの生へて居る野に住んで居りますれば、今日のお祝のしるしに、是は水も無い、私の居る所の名の池で摘みました若菜で御座ります。聊かながら進上仕ります。

いと、をかしかし、この池といふは、所の名なり。よき人の男につきて下り住みけるなりけり。

（句解）○をかしかし、うまいと褒めた詞かし、よといふ意味と同じ心がある。

（解義）非常に面白く咏んだ歌だよ、抑、この池といふのは、土地の名で、もと歴々の身分の人の女が、京都から或男に連れられて、下って住んで居るのである、だから其贈物が、このやうに全く風雅である譯だ。

此長櫃のものは、皆人わらはまでにくれたれば、飽き満ちて、船子供は、腹鼓をうちて海をさへ驚かして、浪をも立てつべし。

（句解）○わらは、小供のこと、

（解義）そうして、此長持の中に入って居る種々の贈物は、皆家來や船子までに、殘りなく遣ったら、皆大に食って、船頭どもは、嬉がって腹鼓を叩いて、舟の中を騒がすばかりでなく、海までをも驚かせて、以上に、また浪を立たせるほどである。

かくて此間に、事多かる、今日わりご持たせて來たる人、其名などや、今思ひ出ては此人歌よまむと思ふ心ありてなりけり、とかく云ひくて、浪の立つなるてとゝ、驚

おくれて泣かんわれやまさらむ。

とよめる、いと大聲なるべし、持て來たるものよりは、歌はいかゞあらむ

（句解）わりご、辨當。

（解義）かうして居る内に、多くの人々が訪うて來て、いろ〳〵世話しかった。その中、けふ辨當を持たせて來た人は、名は何とか言ったっけ。能く考へて、今に思ひ出さう。此人は、他の人と違って別を惜んで來たといふよりは、歌を咏まうといふ心で、來たのであったのだ、今合點がいた。何んのかんのと、來た時から喋舌りつゞけて居て、まだどうして、かう浪の立つことだらうと、氣の毒さうに喞やきながら、咏んだ歌は、

君が船路の行先に立つ白波の音よりも、この地に殘って居って泣いて居る私どもの聲の方が高いだらう。

と咏んだ。ぽんとに此歌に言ってるやうなら、さぞ、非常な大聲であるだらう。どころが、持て來てくれた辨當よりは、此歌はどうだらう。餘程まづくはないか、しかし平生は餘り咏まぬ人の歌だから、舟中の人々が、面白い〳〵と挨拶ばかりは言っ

たが、一人として返歌をするものはない。

しつべき人も交れ〳〵ど、是をのみいたがり、物をのみ食ひて夜更けぬ。此うたぬし又まからずといひて、立ちぬ。

（句解）いたがり、ほめそやす。○まからず、來ましやう、といふこと。

（解義）返歌をよみそうな人も居ッたけれど、唯よい〳〵と褒めて、辨當を食ふばかり、どう〳〵夜が深けた。かうなれば此人も、手持無沙汰になッて來て、不興さうに、又參りましやうと言ッて、起ち歸ッた。

或人の子の蛍なる、ひそかにいふ、まろ此歌のかへしせむといふ。驚きて、いとをかしきことかな、咏みてんや、咏みつべくば、早く言へかしといふ。

（句解）まろ、私といふと同じ。○或人、貫之をさしたるなり。

（解義）或人の子で、まだ、極幼なき人が、ッと小聲で私に、此歌の返歌をしましやうと申します。まだ幼ないものがと、皆驚いて、非常に喜んで、それは面白い事だ、しかしお前がほんとに咏むことが出來やうかい。それとも、若し、咏んだなら、早く言ッて聞かせて呉れいといふ。

まからずとて、起ちぬる人を待ちて、よまむとて、もとめけるを、夜更けぬとにや、やがていにけりそも〳〵如何よみたると、いぶかしがりて問ふ、この蛍さすがに耻ちて言はず、強て問へは言へる歌。

ゆく人もとまるも袖の涙川
みきはのみこそぬれまさりけれ。

となんよめる。かくはいふものかうつくしければにやあらむ、いと思はずあり。わらはことにては何かはせむ。こはおんなおきあにをしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらんとて、おかれぬめり。

（解義）小供のいふには、又參りましやうというて、立ッていた人を待ッて、其人の目の前でよみましやうといふから、其人をたづねまはして見たが、夜が更けたと思ふてのことか供舟にも何處にも早や居なかッた。サテそれでは何んと咏んだか、言ッて見よと、不思議そうに尋ねた、ところが、其小供は、さうはいふものゝ耻しがッて言はない、是非と言ッたれば、

行く人も留まる人も、別れの悲しいのは、同じことである、唯袖を流るゝ涙が川

のやうになッて居て、其渚の袖が、益々ビショ〳〵に濡れて行くのが、何とも仕様のないことである。

とよんだ。年に似やはず、ようかう咏んだとだ、大變かわゆく思ふからの事でもあらうが、非常に案外によんだ。かほどの歌を小供の歌としては、反て何の甲斐もないむしろ是は其母や父の歌とするが宜さゝうな。どもかくも、此歌が悪くても、どうあつてもよい、何とか便が有ッたら、かの歌を咏んだ人に、遣りたいものだと言うて書きつけて置いた様子である。

八日、さはる事ありて、猶同じ所なり。こよひの月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の山の端にげて、入れずもあらなむ、といふ歌なんおぼゆる。

（解義）　○さはる事。春の丁巳、己丑の日には、船に乗らぬものだと、昔は言ッたものと見えて、丁度此八日が丑の日だから、いけないとて忌んだのてある。○業平の君云々。これは、伊勢物語といふ書にある故事である。其歌は、

あかなくにまたきも月のかくるゝか
山のはにげて入れずもあらなむ。

といふのて、其意味は、月も山にかくれ、人も飯らうとするが、まだ話も仕たい、まだゆッくりとして居たいのに、月は全く隠れやうとするのであるか、情ない、どうか山でもどいて仕まッて、あの月を隠れさせないやうにしたいものである。といふの意味の歌。

（通解）　八日は、日が悪いといッて障があるので、やはり、大湊に居るのである。月は今までは、山にばかし入るのを見て居たのに、此處に來て、初めて海に入るのを見た。この月が、だん〳〵と隠るゝのを見ても、かの在原業平の歌の、山がにげて、月を入れぬやうにしてほしい、といふ有名の歌が面影に立つやうである。

もし、海邊にて詠まゝしかば、浪立ちさへて入れずもあらなむ、とも咏みましや。

（句解）　まし。未來を思ふ意にて、詠んだらといふのと同じ。○立ちさへて。立ち進るといふこと

（通解）　若し業平が、その時海邊で咏んだのなら、下の句を、浪が立ちさゝへて、月を入れぬやうにしたい事だとか、咏まるゝであらうか。

今此歌を思ひ出でゝ、或人のよめりける。

照る月の流るゝ見れば天の河
出づるみなとは海にざりける。

とや。

（句解）海にざりける。海にぞありける、といふのを、略して言ッたのである。

（通解）いままた此業平の歌を思ひだして、別にそのやうな歌の心に、もぢりて、或人（暗に作者の貫之自分の事である）が咏んだのは、

照る月が、西の方の海に、流るゝやうに、入るさまを見れば、殆んど天と海とは、一つやうに見える、それはあの天にある天の川の流れ出づる港は、即ちこの見ゆる海であッたのだ。

とか言ッて或人が咏まれました、

九日、つとめて、大湊より那波の泊を追はむとて、漕ぎ出でたり、これかれの互に、國の境のうちはとて、見送りに來る人、あまたが中に、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政等なん、御館より出でたまひしより、此處彼處に追ひ來る、此人々ぞ、志ある人なりける、この人の深き志は、此海にも劣らざるべし。

（句解）つとめて。早朝のこと。○那波は土佐國安藝郡奈半利村のこと。○これかれ。その見送り來る人々のこと。○御館は、土佐守の役所のこと。即ち今の縣廳と同じこと。

（通解）九日、朝早く大湊から、那波の港に向つて、追風に追はせやうとて、舟を漕ぎ出した、あれこれの人々が、互にこの土佐境までの間は送らうと言て、見送りに來る人が澤山ある内に、藤原言實、橘秀衡、長谷部行政などは、縣廳から、門立した日よりこゝかしこへ跡を追ひ慕ひて來てくれた此人々は、殊に志深く情ある人達である。實に此人達の深い志は、此海の深さに、劣らぬやうに思はれる。

これより、今は漕ぎ放れてゆく。これを見送らむとてぞ、この人共は、追ひ來ける。かくて漕ぎゆくまに〳〵海のほとりに留まる人も、遠くなりぬ。船の人も見わずなりぬ岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし。

（句解）まに〳〵まゝにといふこと。

（通解）これから土佐の國を漕ぎはなれて行くのである。かの人どもはこゝまで此國境まで見送らうとて、追ひ慕ふて來たのであるが、さて、だん〳〵と、我舟を漕ぐにつれて、海際の邊で立ちとゞまりて、見て居る人も、おひ〳〵遠くなり、また、かな

たよりは、此船の中の人も見えぬやうになッた。岸にも定めて、まだ言ひたいこと があるだらうし、また、こなたの舟にも、思ひ殘すことが、まだあるけれど、今は仕方 がない。

かゝれど、此歌を獨言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども
　　ふみしなければ知らずやあるらむ。

（通解）今は仕方もなく、仕樣もないから、この歌を、唯船中で獨言を言てこらへて 居た。

舟の中からあの陸の方へ通はす心は幾度も海を渡りて行くけれど、しやうが ない、文でないから、踏で行くことが出來ないから、向ふの方は、何とも知らずに 居るであらう。

かくて宇多の松原を往き過ぐ。其松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず、本毎に 浪打ちよせ、技ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる 歌。

見わたせば、松のうれごとに接む鶴は
　　千代のどちとぞ思ふべらなる。

とや。

（句解）いくそばく、ドレホド。本毎に、根の根毎。とひかふ、飛びまはり、 ゆきちがふ。松のうれ、末のこと、うらのことで、梢といふことは、後世の語 上古はこぬれと言たのであるが、このこぬれといふのは、即ちこのうれとの語の變 化したものである。是は餘言であるが、一寸序だから言ておく。千代のどち、千年 の齡を取る目出たい同志、友達であるといふことで、どちは今のどうしとか、友達 のだちと同じ語である。思ふべらなる、思ふべきなりといふ意、即ち思ひさ うな樣子であると言てよろしい。

（通解）もう一言いひたい、もう一度顏が見たいと、別れを惜んでる内に、もはや香 美郡にさしかゝりて、宇多の松原を往き過ぐるのであるが、松が澤山で、どれほど あるか分らないほどあッて、またその松は、非常に古くて、何千年のものかも分か らない、而して、其松の根ごとには、白浪がドウ〳〵と打ちかけ、其上には、群鶴が、枝

から枝に、飛び移て遊で居る景色、面白くて、何んとも言ふことが出來ないほどである。また船頭さんが詠んだ。（船頭と言ふけれど、實は貫之自身のことであるが唯酒落たのである。）

打ちつゝく松原を、見渡して見れば、枝の上にはどこでも、こゝでも、馴れて睦まじさうに接んで居る鶴――千年の鶴といはれる鶴――を見れば、その鶴も、めでたい常磐の松をば、互に千年の齢をのぶる友達同志のやうに、思ひさうな樣子である。

とか申しました。

此歌は所を見るに、えまさらず。

（通解）しかし、此歌は、餘り善くもない、この所の景色は、とても寫し得ない、風景にはとても及び得ない。（これは自分の歌だから、謙下ッたのである）

かくあるを見つゝ漕きゆくまに〳〵、山も海も皆暮れ、夜ふけて、西東も見えずして天氣のこと、楫取の心に委せつ、男子も習らはねば、いとも心細し。まして女は船底に頭をつきあてゝ、音をのみぞ泣く。

（句解）まに〳〵は前に解いた。○てけ　天氣のこと。○ねをのみぞなく　聲を立てゝ泣くばかりといふの意である。

（通解）かやうに宜い景色を、見ながら漕ぎゆくに從て、いつしか、山も海も、殘らず見えないやうに、暮れてしまつたのも淒しいのに、殊にまた夕月も入りてしまつて、東西も分らない深夜の海上に、唯船頭を命に、翌の天氣も何も、その心委せにせねばならない心細さ。男でさえ、このやうな船路に出逢たことのない人は、心細いのに別して、女は、舟の底に、あたまをつきあて、打ち伏して、あゝ恐ろしい、と聲を上げて泣くばかりである。

かく思へば、舟子、楫取は、船歌うたひて何とも思へらず。そのうたふ歌は、

春の野にてぞ、音をば鳴く、若菜摘にて手をきる〳〵、摘だる菜を、親やまほるらむ
姑や食ふらむ、かへらや、よんべのうなゐもがな、錢乞はむ、虛言をして、おぎのり
わざをして、錢も持て來ず、たのれだに來ず。

（句解）かへらや、唯歌の拍子に添へた調子で、別に釋はない、今のヤンレナ、ホイと いふやうなものである。○まほらむ、貪るといふ意味。一說には、まゐほるといふの

で、好み食ふこと、嗜の字に充てるあぢと言ッて居て、上品なやうに、解釋するけれど、元來、昔でも今でも、俗歌といふものは、隨分亂暴なものがあつて、道學先生の目から見れば、眉をしかめるものも有るけれど、之れ反て人情の自然の露はれたものので、面白いのである。見處があるのである。そこで、余は、こゝに貪るといふ釋をつけたのである。○おぎのりわざ、俗にいふ掛賣りのこと。賒の字を用ひて書く。

（通解）　このやうに、苦しう思ふて居るのに、舟子や梶取ともは、何とも思はぬいで荒るゝ夜風に聲はりあげて歌ふのである。そのうたを聞けば、

春の野邊に出て、嘆いて居る、その嘆いて居るのを聞けば、若薄で、このやうに手を傷めながら、難儀して、子供に遣らうと摘んだ若菜を、男や姑が食てしまうだらう、惡いことである。しかし、それはどうでもよいが、昨晩の子供が來ればよいが、この錢を取りかへしてやらう、今直だと言て置きながら、知らぬ顏をして、けふも持て來ない、失敬な、あの錢をくれねば、買ひに來たッて、斷て遣らしないのに、當人さへ來りやしない。

これならず多かれど書かず、これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれど、心はすこし

あぎぬ

（句解）　すこしなぎぬ、少々慰めて、心中が快くなッた。

（通解）　これぱかりでなく、外に澤山歌もうたッたけれど、皆聞き流して書きとめないが今まで聞き馴れぬものであるから、可笑しくッて、打ち笑ふ、女子供の聲を聞いて、海の波は、腹を立てゝ立ちさわぐけれども、畏ち恐るゝ心は、聊か和いだ。かく往きくらして、泊にいたりて、老人ひとり、老女ひとり、あるが中に、こゝち惡しみして、ものもものし給はで、ひそまりぬ。

（句解）　たきなびと、　貫之のこと、　たうめ　年老いたる女のこと、後のところを見れば、このたうめは、淡路の島のたほい子である。○あしみして、惡しくして、といふこと、氣分をわるくしてといふこと。

（通解）　かやうに、終日、げふは潯き暮らして、那波の港に泊て居るのであるが、そのうちに、年寄の人と、女とが、船酔をして、氣分が惡るいと言て、食ふものもおたべなさらずに、御息になッた。

十日、げふは、このなはの泊に泊りぬ

（通解）今日は、風も吹かず、天氣も宜いけれど、昨日、大變船に酔ッたので、まだ心持が皆惡いから、今日一日休まうと言ッて、那半の港に碇泊することにした。

十一日、あかつきより船を出して、室津を追ふ。人皆まだ寢たれば、海のありさまも見えず、たゞ月を見てぞ、西東をぞ知りける。かゝる間に、皆夜あけて、手洗ひ、例のことどもして、悲になりぬ。今し羽根といふ所に來ぬ。若き童は、此所の名を聞きて、羽根といふ所は、鳥の羽根のやうにやあるといふ、まだ幼き童の事なれば、人々笑ふに、在りける女童なん此歌をよめる。

（句解）例の事ともして、誰でも朝起くれば、必ず顏洗ひ、着物を着換え、部屋などを掃除するものであるが、此處では、唯手洗ふといふこと計を書いて、餘の事は、例の事と言つて、略したのである。○今し、今も同じ。

（通解）十一日、もう今日となれば、皆心持も直り、元氣も附いたが、實は已に昨日より船を出さねばならなかッたのだから、まだ曉深く、早過ぎるけれど、船を出して、安藝郡の室津を的に漕ぎ行くのであるが、召し遣ひの者共も皆殘らず寢て居て、船の屋形の戸も、蔽けてある筈などは開けないから、海上の有樣も見えない、唯

僅に上間の戸か、筈の隙間から、漏れて來る月の光を見て、西か東かが知らるゝばかりである。さう見て居る內に、がらりと夜が明けて、海も山も皆明るくなつて來たから、顏を洗ひ、口を嗽きなど、例の通りの務をして、程もなくお發になッた。丁度今は、奈半の港から三里ばかり南の、羽根といふ所まで、さしかゝッたのである。幼い子供は、此羽根といふ名を聞いて、羽根といふからほんとに、鳥の羽根の形のやうな所だと言つた、まだ極く幼い子供の事だから、傍の人々は、面白い事をば言ると言ッて笑ッたが、そこに坐つて居た少さな娘は、かういふ歌を詠んだ。

まことにて名に聞く所羽根ならば
飛ふが如くに都へもがな。

とぞ言へる。

（句解）まことにて、ほんとに。

（通解）貴方の言ふやうに、此所の名が、ほんとに、ほんとの鳥の羽根で有つたならどうか、其羽根で以て飛んで行くやうに、疾く、都へ行き着きたいと詠んだ。

男も女も、いかでとく都へもがなと思ふ心あれば、此の歌善しとにはあらねど實に

と思ひて、人々忘れず。此羽根といふ所問ふ、童の序にも、又昔の人を思ひ出でゝ、いづれの時にか忘るゝ、けふは、まして母の悲むことは、下りし時の人の數足りねば、ふるき歌に、數は足らでぞ飯るべらなる、といふことを思ひ出でゝ、人の詠める、

世の中に思ひはあれど子を思ふ
　思ひにまさる思ひなきかな

といひつゝなん。

（通解）船中の男も女も、皆、どうぞ早く都へ飯りたい、飯りたいとばかり、心に思うて居るものだから、餘り宜い歌といふではないけれど、丁度誰も同じやうに思うて居る時であッたので成程と感じて、人々はいつまでも、折々此歌を言ひ出して忘れないのである。さて、此羽根といふ名について歌を詠んだ子供の事に依ッて又昔の人となッた死んだ我娘の事を思ひ出して、ああ、このやうに、無事で皆飯ッて來るのに、遠い處に一人が殘ッて飯られないやうになッた事は、どうして、一生涯忘れられうぞ、とても忘れは、せられないぞ。けふは、別じて母の悲むことは甚しい。六年以前に、下ッた時は、あの子も居ッたのだが、今度は、人數が一人減ッて居るから

かの古今集にある、數は足らでぞ飯るべらなるといふ、古歌を思ひ出して、或る人が詠んだ。（しかし何貫之の詠んだのである）

世の中には、種々樣々の物思ひの數は澤山だけれど、其中にも子を慕ふ、親の思ひに勝るほど、切な思ひは無いものだよ。

と言ッて歎きました。

（句解）數は足らでぞ飯るべうなる。古今集の旅の部にあるところの、作者の知れない歌であッて、かういふ歌である。

北へゆく雁ぞ鳴くなる連れて來し
　數は足らでぞ飯るべうある。

此歌は、或男が女と一緒に、他國へ旅して居たが、其内連れ合ひの男が死んだので女が都へ飯らうとした途中に、鳴いて行く雁の聲を聞いて、詠んだ歌である。而して歌の意味は、北の方へ鳴いて飯ッて行く雁の聲が聞えるが、來る時一緒に來たほどの數ではない、少くなッて居るのであるが、其れでも飯らねばならぬから、今飯ッて行くのであらう、妾も其通りである、といふ歌である。へらなる、といふは、古

今集時代即ち平安朝となッて出來た語で、べきなり、といふと同じのである。○けふはまして、貫之が土佐に居る時に死んだ娘は、丁度六年以前、即ち延長八年十一月の今日、十一日に伴ひて下ッたのである。

十二日、雨降らず。文時、維茂が船の後れたりし、奈良志津より室津につきぬ

（句解）文時は、貫之の子、時文の事なりと言ふ人もあるが、そうでなくて、他人で、屬官の人だらう。○後れたりし、後れたりきと言はないで、じなどゝ下に續かねばならぬ助詞を用ゐたのは、舟といふ字を略したので、かやうな例は始終あるから、氣を注け置くがよい。

（通解）十二日、朝より降りさうであつたが、とう〳〵降らなかッた。屬官の文時、維茂が船は、昨日の港から、今朝出帆の時に後くれて居たが、奈良志津から、今居る室津に漕ぎ寄せて來た。

十三日、曉にいさゝか降る、しばしありて止みぬ。男女これかれ、沐浴せんとて、あたりのよろしき所に、下りて行く。海を見やれば、

雲もみな浪とぞ見ゆる海士もがな

いづれか海と問ひて知るべく。

となん歌よめる。

（句解）湯あみせん、陸に上り人家などにゆきて、湯に入るといふではない、明十四日は、齋日だから、皆舟から下りて、磯邊の岩陰などで、汐あびをするといふ事なり。○あたりのよろしき所、恰好のよい、所あたり、近所の工合のよいところ。

（通解）十三日の夜の引き明け頃になッて少々雨が降ッたけれど、一時して降り止んだ。空も晴れて來たし、聖は齋日だから、男も女も大勢誰も彼も、一つ汐でも浴びやうと言ッて、工合のよい場所を見定めて、船から下りて、さぶ〳〵と磯邊の方に行くのであるが、貫之自身は、早うから少し病氣があるので、汐あびも見合せて獨、船の中に殘ッて居る。今までは、大勢で實に騒がしかッたが、皆下りたので、靜かにゆるりとなッて、心ものび〳〵するやうである、海上遙かに見渡せば、雨あがりの空は、また特別である、そこで、

見渡せば、廣い〳〵青空の中に、まだ處々には、ちぎれ〳〵の白雲が見ゆるが、ほんとに浪と同じやうで、どちらがどちらとも見分けが附かない、かういふ時に

は、平生海で育て居る漁夫でも來ればよい、どちらが海で、どちらが雲であるか
と、尋ねて見定めを附たいほどである。
といふ歌を詠んだ。

さて、十日あまりなれば、月面白し、船に乘り初めし日より、船には紅濃く、よき衣着ず
それは、海の神に恐ぢてといひて、何のあしかげにことつけて、ほやのつまのいやし
館あはびとぞ心にもあらぬ脛にあけッて見せける。

（句解）十日あまりは十三日の日であるから即ち十日に三日だけあまりの日で
ある○月たもしろしは既に滿月であるとすれば其景えも言はれぬ程に面白い
○紅濃くよき衣着すは紅の濃き色の美服を身に着けまとはずとのこと○恐ぢ
ては海神は物めでするよしなれば其海神が見入れて祭りをしてはならんと畏
れること

（通解）けふは十三日であるから稍や滿月に近かいから月の景色が面白い船に
初めて乘りた日からいつもわざとそまつなきものばかり着てすこしもよき衣
服を着たことはない何故なれば海の神様は美服を着たものは見とれせられる

そうだからもしやのことがありてはならぬと恐れて着ないのであるとの意に
てこれは紀氏の例の諧けである其實何事も道中は不自由にてあたりまへの衣
服も着ることが出來ぬと言ふことを言ふたのである
何しあしかげにことつけてより見せけるまでの句は先哲の契沖、眞淵氏及び其
他の有名なる人々も之れを解釋せられずそは教育上少し、いまわしき事からで
あるからである故に余も本講義に於て遺憾なから此句を解かないから讀者は
此句の意は
男女とも湯浴して圖らずも陰部をあらはしたといふことを、打興して書いたの
であると知れば足りぬことである
十四日　あかつきより雨ふれば同じ所にとまれり、ふな君せちみす、さうじ物なれ
ば、うすのときよりのちに、かぢとりのきのふつりたりしたひに、せになければ、よね
をとりかけて、おちられぬ、かゝることおほくありぬ、かじとり又たたひ、もてきたり
よね、さけ、などくるかぢとりけしきあしからず

（句解）さうじ物は精進物の意○せちみすは節忌のことにて即ち十四日は六齊

日に當りて精進すべき日である、おちられぬは精進おちをせられたとのこと

（通解）夜明の頃より雨が降りたから同し所ろにて一夜泊まりた其日は折角十四日にて六齋日にあたるから船主即ち紀氏は節忌せられて凡て肉食をやめ精進物を用ひておられたが午の刻より後はもはや十五日の部であるから船子共が昨日つりた鯛を持ちて來たけれと船中にて錢がないから米と取かへて精進落ちをせられたこのようなことがたび〳〵ありました船子等は又〻鯛を持ちて來たから又米や酒などを遣りたが船子等もうれしそうな顔をしておりた

十五日　けふあづきがゆにす、くちをしし、なほ日のあしければ、ねざるほどにぞ、けふ、はつかあまりへぬる、いたづらに日をふれば、人々海をながめつゝぞある、

（句解）あづきがゆにすは正月十五日小豆粥を煮ることは、延喜式及ひ拾芥沙なとにも見えてたるこれは一年中疫病にかゝらぬと古昔よりの傳へである○ねざるほどにぞは膝行の狀にて即ち天氣が惡しく風波の起りて船が進まぬをいふ

（通解）今日は正月の十五日であるのに殘念なことには海上にて物事不自由で

であるから小豆粥も煮ることが出來ないその上風が吹き出して波が立ちさはぐから船は少しも進まぬやうで、いざりの歩行の如くである、もはや廿日あまりも過ぎ經て今日まで幾日間も海の上にて難義してたるにすこしも船が進まずしてむだに月日ばかり進むから誰も彼もうらめしそうに海上ばかりながめておる

めのわらはのいへる

たてばたち、ゐればまたゐる、ふく風と、なみとはおもふ、どちにやあるらん

いふかひなきものゝいへるにはいとにつかはし

（句解）めのわらはとは女の童といふこと○思ふどちは氣の會ふものといふ事で、此處では童女を指したのである○いとは頗る、餘程、○につかはしは相應なといふこと

（通解）そこで女の童の讀みた歌に風か立ては波も立つ風か吹きやめは、また直くに波も靜まるほんとうに可笑して見れば、風と波とは氣の會つたお友達であるのだろうと思はれるにやあるらんはにやはにてやとの疑問詞であるあるら

んはあるならんにて即ちあるであろうと云ふ辭の反語であるこれに常にはの疑問詞あるときに用ゐる推量反語である詳しきことは文典にて說く

十六日、風止まねば、なほ同じところに泊れり。たゞ海に波なくして、いつしか御崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風波ともに、止むべくもあらぬ、或人の此波立つを見て、詠める歌。

霜だにも置かぬ方ぞといふなれど
波の中には雪ぞふりける。

さて船に乘りし日より、今日までに、二十日あまり五日になりにけり。

（句解）いつしか、何時かといふと同じ心、何時か〳〵と急ぐ意。○御崎、室津より一里で、室戸崎ともいふ處。○二十日あまり五日、十二月二十一日より正月十六日までをいふ

（通解）十六日、風が止まないから、やはり同じ所に舟を泊めた。明けても暮れてもひたすら、海上平穩に波が靜まッて、どうぞ早く御崎といふ所を、無事に渡らうと計り念じて居るのに、風も波も、どちらも、止みさうでない。ところが、或人がまた、此

波が白く立ち騷いで居るのを見て、詠んだのだ。

土佐などは南の方の國であるから、霜でも降らないと言ッては居るけれど、霜どころでない、波の中には、雪が降ッて居るワイ。

扨て、乘船の日から、今日まで、數へて見れば、二十五日にもなッて居るのだ。

十七日、くもれる雲なくなりて、曉月夜いと面白ければ、船を出して、漕ぎ行く。この間に、雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔の男の子は、棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中の空を、とは言ひけむ、聞きさしに聞けるなり。

（句解）くもれる雲なくなり、雲ッて居た雲がなくなつて。○曉月夜、十七日は、八時頃月が出るから、曉にもまだ空高く月が殘つて居る。そのあけがたの月を言ふ。○この間、舟を漕いで行くあひだ。○うべ、げに、最、といふこと。○昔のをのこ、唐の賈島を指したのである。詩人玉屑といふ書に、朝鮮の公使が海を渡る時に、水鳥浮還沒、山雲斷復連、といふ詩を作ッて得意になッて居る處に、此賈島といふ有名な詩人が賤い人夫の眞似をして、居て、其下の句にかう附けた、棹穿波底月、船壓水中天、是を聞いて朝鮮公使は、吃驚して二度と詩の事を言はなかッた、と書いてある。此詩

は有名であるから、貫之が引いたのである。然るに、賈島のもとの詩とは違ッて、沈底を波上、水中を海中、壓を襲ふとしある、成程是は賈島の通りにいふのが、實情であるけれども、女子の筆にて書けるやうにせねばならぬから、或はわざとかうしたのでもあらうか、また或はひよッとすれば、思ひ違ッたのかも知れない。○棹は穿つ。云々、波の上に月が、ありありと映ッて居る處を、棹でざぶ〳〵と突き崩してゆき海の底に、冴え〴〵とした青い空が映ッて居る處をどし〳〵と船が突き進んで居るといふ意である。○聞きさしに聞く、一寸聞き囓りに聞く。

（通解）十七日、曇ッて居た雲が無くなッて、明けがたの月影が、まことに佳いから船を立させて、四方を眺めながら漕いで行く、そのうちに、空は波に映り、波は空を浮かばせて、波の上も、海の底も同じやうに見渡される。ほんとに、昔の賈島とか言ッた人が、このやうな景色を見て、棹は波の上の月を破り、船は海の中の空を押し破ると言ッたのであるだらう。しかし私は、此詩はよく知らぬ、たゝ人の言ッて居る事を、少しばかり聞きッかけに聞いたのである。

また或人の詠めるは、

水底の月の上より漕ぐ舟の
　　棹にさはるは桂なるらむ。

これを聞きて、或人のまた詠める

　　影見れば波の底なる久方の
　　空漕ぎ渡るわれぞわびしき。

（句解）○かつら、月の中には桂といふ樹があると昔から言つたものである。○久方の、空といふ詞の枕詞、○わびしき心細き。

（通解）また何とか言ふ人（即ち自分が詠んだのを、洒落てかういふので、前にも度々出て居る）が詠んだのに、

水の底に映つて居る月の上を、漕ぐ舟の棹に、障るやうに思はれるのは、月の中にあるといふ桂の木の枝でもあるだらうか。

かう詠んだので、また或人は

　　我影を見れば、波の底に映つて居る空の上を漕いで行くので、誠に心細う思はれる。さうでなくても、遠い海の中で十分心細いのに。

かくいふ間に、夜やうやく明けゆくに、揖取等、黒き雲俄に出でぬ、風吹きぬべし、御船返してむと云ひて船返る。此間雨降りぬ、いとわびし。

(句解) 揖取等、船頭共。○風吹きぬべし、必定風が吹き出すだらう。○舟かへる、もとの室津を指して舟の引きかへす。

(通解) こんなことを歌ふ間に、夜もだん〳〵明けゆかうとする時、水夫共が言ふには、黒雲が急に出て來た、風が吹き出すだらう、行先が心元ないから、速に御船を引き返しませうと云ひて、以前の港へ皈る。その間に、いよ〳〵雨が降つて來た、何とも云へない難義である。

十八日、あほおなじ所にあり。海荒ければ、船出さず、此泊より遠く見れども、近く見れども、いとにもしろし。かゝれども、苦しければ、何事も覺えず。男達は、心遣りにやあらむ唐歌などいふべし。船も出さで、徒なれば或人の詠める、

磯ぶりの寄する磯には年月を
いつとも分ぬ雪のみぞ降る。

この歌は、つねに爲ぬ人のことあり。

(句解) かゝれども、かくあれども、といふ事で、さうであるけれどもといふ意。○心遣り、氣晴し。○から歌、詩のこと。○磯ぶり、磯に當つて碎くる荒波のこと。○つねにせぬ人、平生は歌など詠まぬ人。

(通解) 十八日、やはり同じ港に居る。海が荒いから船は出さず、此港から、己に二十二日以來、遠く見ても、近く見ても、ほんとに面白いようではあるが、草臥れて苦しいから、佳い景色とも思はれない。女達は皆なやんで物言ふ力もなくなつて居るが、男子は氣晴らしであらう、吟詩などして居るやうだ。船も出さないで、手を空しう日を暮して居るから。

荒波が汹々と打ちつける磯邊には、年月の時節に限らず、いつと定めず、いつでも雪ばかり降つて居る。

この歌は平生歌ひもせぬ人の歌であるが、それとしては頗るの出來だ。

又或る人の詠める。

風による波の磯には鶯も
春をえ知らぬ花のみぞ咲く。

この歌どもを、少しよろしと聞きて、船の長しける霜月ごろの苦しきに、心やりに詠める。

立つ波を雪か花かと吹く風ぞ
よせつゝ人を欺るべらなり。

(句解) 風による波の磯風に波のよる磯といふべきところを、歌だからこのやうに言ッたのである。即ち風の吹く爲に波が打ちよする處の磯邊。少しよろしと聞きて、此歌少しは面白い、退屈の心も少しは引き立ッた。一寸面白い歌であると御覽せられて、心遣り、慰み。はかるべらなる。欺しさうな樣子である。

(通解) また或る人が讀んだのに、風の爲に波が碎けて打ち寄するところの磯邊には、爲も知らねば、また春にも知ることの出來ぬ花が、常に咲いて居る。(前の歌は、時節撰はず、いふて雪が降ッて居ると言ッたのを、今度は春も知らねば、爲も知ッて居ない處の花が咲いて居ると言ッたのであるだから、前の歌と考は同じ處から出たのである。)

しれば、是等の歌を、船主のお爺さん即貫之が見て、是は一寸面白い、われなら、私

も一つ近來の不愉快晴しに詠みませうとて。

はんとに、騒いで居るあの白浪を、雪か花かと見擬はせるやうに、吹くところの風は、波をゞし〳〵寄せ〳〵して、人を欺さうとする樣子であるさて〳〵面白い。

この歌どもを、人の何にかといふを、或人聞き耻りてよめる。その歌詠める文字、三十字あまり七文字。人皆えわらで笑ふやうなり。歌主いと氣色惡しくてえます。眞似べども、えまねばず、書けりとも、えよみあへ難かるべし。けふだに斯く言ひ難し、まして後には如何ならむ。

(句解) 三十文字あまり七文字。歌は三十一文字であるべきのに、三十七文字であつたといふこと。○えわらで笑ふ。皆堪へきらずに笑ふ。○歌主。此三十七字の歌を詠んだ人。○えず。怨ずといふ音のまゝに書いたので、執念深く怨むる事。

(通解) このやうにだん〳〵色々の人々が詠んで、それを何のかのと善し惡しを評しあつて居るのを、また或人が傍に其等の詞を聞いて居て、己も一つと、少し自慢氣が出て詠んだ。ところがその詠んだ歌は、三十七字もあつたので皆が吹き出し

て笑つたやうである。詠んだ人は、其さまを見て、頗る顔色を惡うして、怨んだ、しかし、其顔と言つたら、とても眞似をしやうとしても、せられなく筆で書いても、とても、讀みとる事は出來ないと思はれる。今聞いた今日でさへ、かやうに言ひにくいのだから、別して後で聞く人には、歌とも何とも分るまい。

十九日、日あしければ、舟出さず。

（通解）海が荒れて居るから、舟は出さない。

二十日、昨日のやうなれば、舟出さず、皆人々憂へ歎く苦しく心もとなければ、唯日の經ぬる數を、今日幾日、二十日、三十日と數ふれば、指も傷はれぬべし。

（句解）苦しく心もとなければ、まことに苦うて、心が苛々するから。○今日幾日、今日にて幾日だと數へる。○およびゆびといふのが本當なので、およびは當時の俗語である。おといふけれど、小指でも親指でもなく、五本の指の總稱である。

（通解）二十日、けふも昨日と同じやうに海が荒れて居るから、舟は出さない。船中の人共は、皆心を痛めて困つて居るまことに〳〵いつ出ることかと、心が急かれて苛々する。唯日の經つのを、今日で幾日だ、今日で幾日だと言つて、二十日、三十日

と指折り數ふれば、指がだゆくて、節々が傷うはせである。

夜はいも寢ず、いとわびし、二十日の夜の月出でにけり、山の端もなくて、海の中よりぞ出でくる。

（句解）いもねず、寢も寢ずといふことゝ同じ、寢もしないといふこと。○いとわびし、大變思ひ煩ふ。

（通解）夜は夜通し、寢ないで、いろ〳〵と思ひ煩つて居る。その内、夜の十時過ぎ頃にもなつたれば、雲も晴れて、二十日の月が出た。土佐の東南は、大洋であるから、月は、此廣々とある海の中から出たのである。普通月は山から出るものゝやうに見て居たが。

かやうなるを見てや、むかし安倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、歸り來ける時に、舟に乘るべき處にて、かの國の人、馬の餞し、別惜みて、彼所の唐歌作りなどしける。

（句解）見てや、此句のやは、下の唐歌作りなどしけるのけるにかゝつて居る。○安倍仲麻呂、中務大輔船守の子、十六歲の時、遣唐留學生となつて、支那に行つたが、遂

に支那の朝廷に仕へて、秘書監兼衛府卿に任せられた、そうして名をも朝衡と更へて歸化した。勝寶中藤原清河といふ人が唐に到つて、還るとき、仲麻呂も一緒に歸らうとした、此時、その國の文學者王維、包佶、趙驊、また、かの有名な李太白といふ人も、送別の詩を作つて贈つたが、難風に遇つて、安南といふ國に流れ着いた、遂に日本に歸ることが出來なくて、また唐に引き還し、肅宗といふ天子に仕へて、左散騎常侍安南都護といふ位になつた、死んだのは、丁度光仁天皇の元年で、年は七十八といふことである。○馬の餞、人の別に贈るお餞別。

（通解）　二十日の月が、大海の波の上に、照り渡ッて來た、このやうな月を見て、昔かの安倍の仲麻呂は、支那に行て、歸らうとして、港に來た時、かの國の友人達が、餞別として、大變別れを惜んで、支那の歌即ち詩を作ッたりなどした。

飽ずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。之れを見て、仲麻呂のぬし、我國は斯かる歌なん、神代より神も詠みたび、今は、上、中、下の人も、斯樣に別れ惜み、喜びもあり、悲みもある時には、詠むとて詠めりける歌。

蒼海原、振りさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。

（句解）　飽かずやありけむ、いつまで經ッても、お別れの名殘が盡きざッたであらう。○仲麻呂のぬし、仲麻呂氏といふことぬしは、のうしといふ語が約ッたのであるから、のぬしと言ッては、重複する、いづれ寫し誤りであらう。○斯る歌なん、このやうなる歌をぞといふこと、なんはぞと同じ。○詠みたび、たびは給ひといふこと、それを音便に言ひ習ッたのである。○蒼海原、古今集にも、百人一首にもあまのはらとある、これでは調子が惡いから、改めたのであろう。○振りさけみれば、後向いて遠くを見かへれば、○春日なる、奈良の都の春日といふところにあるといふこと。○かも、これは少し疑の意味がある、いつも三笠の山に出る月であるだらうか、どうであらうかといふ意がある。

（通解）　いつまで經つても、別れの悲しさが盡きなかッただらう、遲く出る二十の月の登るまで、人々は散らなかッた、その時その月は、港の外の海の方から上ッたのである、仲麻呂は、此月影を眺めて、私の國は、このやうな歌といふものを、神樣の

時代から、神樣も御詠なさッて、今は上等社會の人も、中等の人も、下等社會の人も、このやうなお別れの時や、喜び悲みのあッた時には、皆詠んで居ますと言ッて詠んだ歌は、

青々とした海上を遙かに振りむいて見れば、月が大空に高く照ッて居る。あゝ此月も我故郷日本の國の奈良の都の春日にある三笠山に、むかし出て居た月であらう。

と詠んだ。

かの國の人、聞き知るまじと覺えたれど、言の意を男文字にさまを書き出して、此處の詞傳へたる人に、いひ知らせければ、意をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になん愛でける。唐土と此の國とは、詞異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

（句解）聞き知りまじく、日本語だから唐人には解し得られまじくといふこと。○ことの心、詞の意味。○男文字、漢文にてといふこと。○さまを書き出す、和歌の意味の有樣を書き直す。○こゝの詞傳へたる人に、通譯する人にといふこと。

（通解）唐土の人は、此歌をば知るまいと思ひたれど、歌の譯を漢文に書いて、面白の出來る人に、見せて話して貰ッたれば意味が分ッたのであらう、大變存外喜いく と褒めた。唐土と我國とは、言語が違ッては居るけれど、天上の月影は、何處も同じことであらうから、人の心もまた同じことであらう。

さて今、そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌。

都にて山の端に見し月なれど
波より出でゝ波にこそ入れ。

（句解）そのかみ、そのむかし。○山の端に見し、山の端。

（通解）仲麿の歌に、支那の人も感心したといふが、さて今、その當時のことを思ひやッて、或人がまた詠んだ歌は、

むかし都では、山から出て、山にばかり入ッた月を見たのであるが、今は波から出て、波にこそ入る月を見るのである。

廿一日、卯の時ばかりに船出す。皆人々の船出づ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。

(句解) 卯の時ばかり、卯の時は、今の午前六時ばかりは頃、○人々の船、家來等の船○春の海に秋の木葉しも、春の海と言ッて少し陽氣に言ッたのは、久しぶりに、天氣となッて、嬉し勇ましく思ッたからであらう。秋の葉と言ッたのは、海に船の浮ぶのを、木の葉が浮ぶやうだと言ひ習ッてあるからである。しもはのとかがとかいふのと同じ。

(通解) 午前六時頃、船が出た、屬官等の船も出た、是を見れば、恰も、廣々たる春の海に秋の落葉が散るやうであッた。

たぼろげの願によりてにやあらむ、風も吹かず、よき日出で來て漕ぎ行く。この間に使はれんとて、附きて來る童あり。それが歌ふ歌。

なほこそ國のかたは見やられ、わが父母ありとし思へば、かへらや。

と歌ふぞ憫なる。

(句解) おぼろげの願、勝れたることもなき拙い豫ての願、即ち天氣になッて呉れよと、心に祈ッて居たこと。○風も吹かず、もといふ文字があるから、勿論、雨も、波もないことが分る。○此間に、天氣もよく、舟が進む間にといふ意味であッて、下の

句の歌ふ歌といふに續くのである。使はれんとて附きて來る童ありといふ句は唯中に挿んだものである。○使はれむと、召し使ッて貰いたいと言ッていふこと。○なほこそ國の力は見やられ、思ひ切ッて、國は出たが、矢張故郷の空は、なつかしく、心殘りがして、後向いて見る。○父母ありとし思へば、しは意味なし、なくてもよいのである。○かへらや、飯りたい。

(通解) 天氣になッて呉れよと、拙い心ながらも祈ッて居たが、其願でもあらうか風もなくて、非常に宜い日となッて、船を出した、船が進行する内に、先達から使ッて呉れと頼まれて居た小兒が居て、船歌を歌ッた。

思ひ切ッて、海路を遠く、漕いでは出たが、故郷の方は後向きがちだ、なつかしい父母が居ると思へば、ああ飯りたいナア。

と歌ッて居る。可愛想である。

かく歌ふを聞きつゝ、漕き來るに、黑島といふ島、巖の上に集まり居り、其巖の下に、波白く打ち寄す。揖取の言ふやう、黑き島の下に、白き波を寄すとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物言ふやうにぞ聞えたる、人のほどに合はねば咎むるなり。

（句解）何とにはなけれど、何んであいこぶなれど、即ちわざ〳〵歌はうといふ考で言ッたのではないけれど。○物言ふやう、物のありけに即ち心のありげに言ふやうである。○人のほどに合はねば、掛取の今際にも似合はぬ面白い詞。○答ぴるなり、一寸面白い言ひやうであるから、聞き耳を立てゝ、注意したのである。

（通解）船子が歌ふ歌を聞きながら、船を進ませて行く内に、黒鳥といふ鳥が、岩の上に集ッて居るが、其下に白波が打ち寄せて居るのを、掛取が、やれ黒鳥の下に白波が寄せて居ると言ッて居る。わざ〳〵考へて言ッた詞ではないのであるが、何んたる、面白い詞である、黒い鳥に白波、歌のやうに洒落れて居るやうである。掛取如き無學なものには、不似合の詞であるから、耳立ちたのである。

斯く言ひつゝ行くに、舟君なる人、波を見て、國より始めて、海賊報いせむといふなることを思ふが上に、海の又恐しければ、頭も皆白けぬ。七十、八十は、海にあるものなりけり。

わが髪の雪と磯邊の白波と
孰れ勝れり沖つ島守。

と掛取いへり。

（句解）舟君、貫之のこと。○波を見て、盗賊のことを、むかしから白波とも言ッて居るから、今此白い波を見て、盗賊の事を心に思へたのである。即ち聯想したのである。○國より始めて、土佐に居た時、即ち始めから聞いて居たといふこと。○海賊報いせむ、この頃、内海及び南海には海賊が居て、處々を荒らしたものである。報いせむといふは、貫之が土佐守で居る時、この海賊を征伐しやうとした事があるのでそれを海賊共が怨んで、報いやうとするのである。○七十、八十は云々、當時貫之は五十歳あまりであるのに、船に乘てから、色々と心配ばかりをして、今まだ、白波を見て急に年を取ッて、白髪となッたやうだから、ほんとに、七十八十のやうに年を取るのは、海のためである、して見れば、老といふものは、海にあるものである。○孰れ勝れり、髪の白さと波の白さはどちらが白いかといふ意、沖つ島守、島守より問ひかけたのである。沖つ島守とは、沖の島に住んで居る人といふだけのことである

（通解）かやうに、色々なことを言ッて來るうちに、船君たる人は、白波の立つのを見て始めから即ち國に居る時分から聞いて居た、白波（盗賊といふこと）が返報を

するといふ話を思ひ出し、またその上、海がまた荒れねばよいがと、恐ろしいから、頭の髪がその爲め眞白になッてしまッた。七十の、八十のといふ年は、海にあるものと見える、即ち年が一度にふけてくるやうになるのは、海である。

私の髪が、白くて雪のやうなのと、あの立つて居る白波とは、どちらが白いか、判じて見よ、沖に居る島人よ。

と楫取が詠んだ。

廿二日、時夜の泊より、他泊を追ひて行く。遙に山見ゆ。年九つばかりなる男の童、年よりは幼くぞある。この童、舟を漕くまに〳〵、山も行くと見ゆるを見て、怪しき歌をぞ詠める。そのうた。

漕ぎて行く舟にて見れば足引の
山さへ行くを松は知らずや。

幼き童の言にては、似つかはし。今日海荒らげ、磯に雪降り、浪の花咲けり。戚人の歌める。

浪とのみ偏に聞けど色見れば

雪と花とに紛ひけるかな。

（句解）他泊、昨夜の港から、先の港へゆくといふ事。○舟を漕くまに〳〵、舟を漕ぐにつれてといふこと。○怪しき歌、變な歌。○足引の山といふ詞の枕詞である。枕詞といふことは、下にある或る詞の形容のやうな意味のものである。即ちこゝでは据を長く引きのばしたやうな山といふのである。○似つかはし、似合ッて居る、相應して居る。○荒らけ、波が荒げる。

（通解）よんべの港から、つぎの港をさして行くうちに、遙か向ふに山が見える。此山を見て、九つばかりになッて居る男の兒が、まだ年よりは餘程小兒に見えるのが、舟が進むにつれて舟が動かなくて、山が行くやうに見えるのを見て、變なかういふ歌を詠んだ、その歌は、

漕いで行く舟から見れば、動かぬことは、山のやうなと、動かぬ例にもなッて居る、山さへゆら〳〵動いて居るのをその下に生えて居る松の木は、何とも知らないのであるか。

と詠んだ、幼き小兒の歌としては、尤な似合ッたやうな、まづい歌である。ところが

けふは、海が荒れて、磯ばたは、雪の降るやうに、また花の咲いて居るやうに眞白くなッて居たから、或人が詠んだ。

海に白く散ッて居るものは、唯浪とばかりに思ッて居たのに、よく〳〵色を見れば、そうではなくて、全く冬降る雪と、春咲く花に紛うやうである。

廿三日、日照りて、曇りぬ。此の邊、海賊恐れありといへば、神佛を祈る。

（句解）海賊恐れありといへば、人家も泊ッて居る船も少ないから、海賊が人を劫かす恐れあると、從者か舟子等がいッたのである。

（通解）照ッて居た空が曇ッて來た、此の邊は寂い處であッて、海賊が押しかけて來るといふことであるから、神や佛に、どうか、そんなことが無いやうにと、安全を祈る。

廿四日、昨日の同じ處なり。

（通解）きのふと同じ天氣であると見えて、矢張り同じ所に碇泊するのである。

廿五日、掛取等の北風惡しといへば、舟出さず。海賊追ひ來といふこと、絶えず聞ゆ。

（通解）海が凪いだやうであるから、舟を出してはどうだかと尋ねたところが、船頭共が、まだ北風が惡う御座いますといふから、出さない。此のやうに幾日も滯泊して舟を出すことも出來ないところに、絶えず海賊が押し寄するといふ風聞が聞ゆる、まことに心寒いことである。

廿六日、まことにやあらむ、海賊追ふといへば、夜半ばかりより船を出して漕ぎ來る掛取して幣奉らするに幣の東へ散れば、掛取の申して奉る言は、この幣の散るかたに、御船速に漕がしめ給へと申して奉る。これを聞きて、或童の詠める、

海の道飼の神に手向する
幣の追風止まず吹かなむ

とぞ詠める。

（句解）眞にやあらむ、本當であらうか。㊀夜半ばかり、夜中頃。○手向けする處あり。手向とは、旅行をしやうとする時、道中の無事を祈るために、神に幣を奉ること。○處ありといふは、全体手向は、陸上の旅にて、境の山を越ゆる時、其山にて神に祈をするものである、船旅でも後には必ず手向をするやうになッたのであるから今

此處でも丁度首途をする船があッたと見えて、幣を神樣に捧げて居る即ちわが船を出して漕いで來るうちに、向ふに手向をして居るところの船がある。○幣、神に祈事をする時、用ゐるもので、麻、木綿、帛などで織ッたものも、織らないまゝのものをも用ゐるし、また紙を代りにも用ゐる。あの招魂社のお祭りなどで、神官が榊の枝に白紙を切ッたものをつけて、神樣の前に上るのは、これである。○揖取し、揖取を以てとか、揖取にさせてといふ意味○揖取の中して奉る言は、揖取が神に祈る詞はといふ意、○或童これも貫之自分のこと○わだつみ、もとは海の神樣の名であッたが、のちには、海のことゝなッたのである。○道觸の神、此神は隱岐の國知夫里郡知夫里崎にあるわだつみの宮といふ神樣の事で、船出の時には、幣を上げて、海上安全といふのであるが、のちには、海陸共に道中の安全を祈る神をばちぶりの神と名づけたといふことである

(通解) 海賊が來るといふのは、本當でもあるのか、十二時頃になッて、船を出した(其實は風向きが少し善くなッたので)ところが、道で、首途の手向をして居る船を見た、だから船頭に、幣をお前も序であるから、といッて、奉らせたのに、幣が東へ散

ッたれば船頭の祈ッていふのには、どうか神樣、この幣が散る方に、この船を速に漕ぐやうに、お助けをお願ひ申しますと祈ッて居る。これを聞いて、或子供が詠んだ歌は、

海の神樣の道觸の神に、さしあげる此幣を、吹き散らす風の方向の通り、吹いたなら船には追風であるから、止まず吹かして下さい、さうすれば、早く都に皈られまする。

といふ歌である。

此程に、風の好ければ、揖取いたく誘りて、舟に帆かけよなぞ喜ぶ。その音を聞きて、わらはも女も、いつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に、淡路の老婦といふ人の詠める歌。

追風の吹きぬる時は行く船の
帆手打ちてこそ嬉しかりけれ

とゝ、天氣のことにつけつゝ祈る。

(句解) いたく誘りて、非常に自慢して、○いつしかとし思へばにやあらむ、こゝに

し。といふ字が二つあれど、ないのと同じにて、唯調の調子に入れた丈である。いつか遠く立たない内に、都に仮られる見込みがついたと思ッたからでもあらう。○この中に、船の内の人の中にといふ意味。○淡路のたうめ、淡路生れの老女、貫之が召し使ひの老女。○行く舟の帆手打ちて、進行する船の帆がばた〳〵と音をするのが、人の手を拍つやうに見立てたのである。

（通解）かうする内に、風向が好いものだから、船頭は、大層自慢の躰で、こう見よ、おれの御願が利いたのだ、早く帆をかけて出立せよなど、言ッて喜んで居る。船の内に淡路の老婦といふ人があッて、この人が歌を詠んだ。

追手の風が吹いた時は、皆一同が、船が駛る時に、帆がばた〳〵と拍手喝采をする音のやうに手を拍いて嬉しうあります。

と、天氣のことにつけて、また神に祈りの心に、歌を詠んだ。

廿七日、風吹き波荒ければ、船いださず。此れ彼れ長く歎く。男達の詩に、日を望めば都遠しなどいふなる言のさまを聞きて、ある女のよめる歌、

日をだにも天雲近く見るものを

都へと思ふ道の遠けき。

（句解）長く歎く。きのふは道觸の神の惠によりて、天氣であつたが、けふは、このやうな天氣であるものだから、恐しき思をして、神樒のた怒りにでも觸つたのではないか、唯事ではあるまいなど、空恐しう思はれて、皆歎き悲しむ。○日を望めば都遠し。晉書帝記といふ書に、目を舉ぐれば、則ち日を見れども、長安を見ず、といふ文句がある。○言のさま。日を望めば道遠し、といふ文句の心の有樣。○或女、これも貫之の歌であるのに、わざと女が詠んだと言つたのである。○天雲、唯そらといふと同じこと。

（通解）風が吹いて、波が荒いから、船を出さない。きのふまでは、好い天氣であつたのに、けふはこんなことである、神の罰ではあるまいかと、空恐しい思をして悲みなげく。男の方が吟ずる詩に、日は反つて近いやうに見ゆるが、都は見ねないから遠いやうに思はれる、といふやうな歌の樣子を聞いて、或女が詠んだ歌に、

あの空にある太陽でさへ空近く見ゆるのに、都へ行かうとすれば、なか〳〵

遠くて容易なことではない。

又ある人のよめる。

吹く風の絶えぬ限し立ちくれば
波路はいとゞはるけかりけり。

日ひと日風やまず、つまはじきをして寢ぬ。

（句解）限りし、しは唯意味もない字である。○いとゞいとゞといふことを約めたる語一層、一倍といふ意と同じ。○つまはじきをして寢ぬ、爪を彈くのである。忌々しく思ふ樣にすること。忌々しく思ひながら寢る。

廿八日、よもすがら雨やまず。今朝も、

廿九日、船出して行く。うら〳〵と照りて澄ぎゆく、爪のいと長くなりにたるを見て日を數ふれば、今日は、子の日になりければ、切らず。

（句解）よもすがら、夜一夜、夜通し。○子の日なれば切らず、子の日には、手の指の爪を切らぬものと、むかしは言ッたのである。世の中に思ひしとの叶はぬは、卯亥巳未に爪を切る故といふ俗には歌もあるほどである。

（通解）廿八日、夜通し、雨が降り止まない。また今朝も降ッて居る。

廿九日は、船を出すことが出來て、まことに好い天氣で、麗々と晴れ〳〵して居るところを漕いで行く。今日までは、船の中で、毎日々々の心勞が甚しかッたために指の爪が延びて居たのも、氣が附かなかッたが、日を數へて見れば、もはや今日は子の日であッたから、緣喜で切らない。

睦月なれば、京の子の日のこと言ひ出でゝ、小松もがなといへど、海中なれば難しかし。或女の書きて出せる歌。

おぼつかな今日は子の日か海士ならば
海松をだに引かましものを。

とぞいへる。

（句解）むつき正月。京の子の事、京にては子の日のお祝が面白いだらうと、色々なことを想像したのである。○小松もがな、子の日には小松を山からこぎて來て福壽を祈るものであるから、丁度子の日に、小松でも欲いと願つて居る意。難しかし、かしは言語の終につけて、その意を強むるものであるから、詞で言へば、唯困難

であるといふまで。○おぼつかな。心の濟まないやうな、何か物足らない、心もとない心。○海松。みるといふ海藻で、形は松のやうに黑くて、葉がないもの。○引かまし。ましは未來のことを想像する時に用ゐむといふのと同じやうなもの。

（通解）正月であるから、都の子の日の賑しさも思ひ出されて、いろ〳〵と噂が出るものであるから、どうかして小松を曳くことは出來まいか、と思ふけれども、海の中であるから、どうすることも出來ない。ところが、或女が歌を詠んだと言つて出した歌は、

ほんとにけふは子の日であつて、小松も曳くことも出來なくて、儀式を除くやうで、心に濟まない海士であッたなら、せめて松といふ名が付いて居るから、海松でも引かうと思ふものに、海士でもないから、仕方がない。

といふ歌である。

海にて子の日の歌にては如何あらむ。或人の咏める歌、

けふなれど若菜もつまず春日野の
わが漕ぎわたる浦に無ければ。

かくいひつゝ漕ぎ行く。

（句解）けふなれど、けふは子の日なれど。○春日野。京都の春日野といふところはむかしより若菜の名所。

（通解）海の中で子の日といふ歌の題は、頗る六ケしい題であるのに、此歌はマア一寸出來たやうだが、他の人は、どう見るであらうか。しかるに或また別の人が咏んだ歌は、

けふは子の日であるけれど、いつもの儀式に供ゆる若菜をつむことも出來ないいつも摘む春日野が此あたり漕いで行く近邊の浦に無いから、（京に居たなら必ず今日は、春日野に出て、若菜摘をするのに、こんな海上であるから、子の日でありながら、何とも仕方がない。あゝ都が戀しいことである）

かういひ〳〵漕いで行く。

おもしろき所に船を寄せて、こゝや何處と問ひければ、土佐のとまりとぞいひける昔、土佐といひける所に住みける女、この船にまじりけり。それが言ひけらく、昔、暫し在りし所の名類にぞあなる。あはれといひて咏める歌、

年ごろを住みし所の名にしたへば

きよる波をもあはれとぞ見る

（句解）　たもしろき所、風景のおもしろいところ。○此處やいづこ、こゝはどこと、餘り風景の好い所であるから、尋ねたのである。○土佐泊、阿波國撫養港の奥にある。○昔土佐といひける所に住みける女、嘗て土佐とか言ッた所に住んで居た女といふことであるが、實は女でなくて貫之自身の事を、洒落れてわざと書いたので、この船に変れり、と書いて　あるのも、此船の中に、かやうな人が乘合ッて居るとわざと、洒落れたそれも同じ筆法なのである。○言ひけらく、言ひけるのを延ばしてらくと言つたので、意味は少しも違はない。○昔暫し在りし所の名類、むかし暫時居た土佐といふ國と、同じ似寄の名である、何んだかなつかしいと言ッて歌を咏んだ。○年ごろ年頃、年來。○きよる波、毎日打ち寄せて來る波でもなつかしい

（通解）　風景のよい所に船を寄せて、こゝは何處だらうと問うたれば、土佐の泊といふところであると言ッた。先頃土佐といふ國に居た女が、此船に乘り合ッて居たが、其女がいふには、むかし、暫し居たところの似寄の名である、ほんとになつか

しいと言ッて、咏んだ歌は、

幾年か久しい年頃住んで居たところの名を負んで居る泊の名あるからゆた〳〵と寄せ來る波も、何んだかなつかしいやうに見える。

三十日、雨風吹かず海賊は夜歩きせざるなりと聞きて、夜半ばかりに船を出して阿波の水門を渡る。夜永なれば西東も見えず、男女辛く神佛を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯の時ばかりに奴島といふ所を過ぎて、田無川といふところを渡る。からく急ぎて、和泉の灘といふ所に致りぬ。

（通解）　三十日、雨風も吹かない。海賊は夜は來ないと聞ひたから、夜半頃に船を出して、阿波の瀬戸を渡る夜永であれば、夜もなか〳〵明す、西も東も眞闇で分らなくて、心細いから、男も女も命辛々神佛を祈ッて、此瀬戸を渡ッた。午前五時頃、奴島といふ所を過ぎて、田無川といふところを經、一生懸命に急いで、和泉の海に入ッた。（奴島は淡路國にある島にて、土佐の泊から來ると、丁度所謂阿波の鳴戸を過ぎてから着くところである。それから行けば、紀淡海峽を經て、和泉と紀伊との國境にある田無川に着くのである。こゝに來ると、もはや内海であるから、海賊の恐れも

なく、皆海上であるから、何多少心細いところがあいこともあるまい)。

今日海に、波に似たるものなし、神佛のめぐみ、あはれぶに似たり。けふ、船に乘りし日より數ふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊物ならず。

(句解) あはれぶ。憐むといふにおなじ。○物ならず。物とも思はぬ、なんとも思はぬといふこと。

(通解) 今日は、お天氣、海の上が靜で、波らしいものもない。船に乘ッてから數へて見れば、三十日を餘ッて九日になッて居るが、今は、はや、和泉の國になッたから、必強くなッて、海賊も、恐ろしくも何うもなくなッた。

二月朔日朝の間雨降り、午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でゝ、漕ぎ行く。海のうへ、昨日の如くに、風浪見えず。

(句解) 朝の間。あさの間。○午の時ばかり。正午の頃。

(通解) 二月一日、朝間雨が降つたけれど、正午頃に止んだから、和泉の灘といふところから出帆して、漕ぎ出した。海上は、きのふのやうに、風浪も立たずに穩かである。

黒崎の松原を經て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに白く、鳥のいろは蘇枋にて、五色に今ひとといろぞ足らぬ。

(句解) 蘇枋。染料で、色は、紅染に似て、少しく暗いものである。○五色に今一色ぞ足らぬ。五色は青黄赤白黒であるが此處は、黒崎の黒、松の青、浪の白、貝の赤であつて今一つの黄が足らぬといふ意味である。

(通解) 黒崎の松原あたりを見て、舟は行くのであるが、黒崎といへば、黒い崎であるそうして、そこに生えて居る松の色は、眞青、磯打つ浪は、雪のやうに白く、濱邊にある貝の色は、蘇枋のやうで赤い。だから五色に今一色が足らぬのである

此の間に、今日は箱の浦といふ所より、綱手をひきて行く。かく行くあいたに、或人の咏める歌

玉くしげ箱のうらなみ立たぬ日は
海をかゝみとたれか見ざらむ

（句解）綱手、舟を引きて行くところの綱、曳舟の曳綱である。○玉くしげ、箱といふ詞の枕詞である。玉といふは賞めたる詞、くしげといふは、櫛箱であるから、結構な櫛箱といふ意である。

（通解）かういふうちに、今日は、箱の浦といふ所から、綱手をつけて曳船をして行つたかうやつて行くあひだに、或る人が詠んだ歌。

箱の浦の浦波が少しも立たず、平穏な日は、海をば鏡と、見ない人が誰があらうか、ありばせぬ。（箱の浦の枕詞の、玉くしげ、即ち結構な櫛かんざしといふ詞を、初に置きて、同じお假粧道具の鏡といふ詞を後に置いたところは、一寸面白い積りなのである）。

又船君のいはく、この月までありぬることゝて、歎きて苦しきに堪へずして、人もいふことゝて、心やりにいへる歌。

ひく船の綱手のながき春の日を
四十日五十日まで我は經にけり。

（句解）この月までなりぬる事とて、十二月二十一日に出てから、この二月までも

かゝつたと言つて○人もいふことゝて、他の人も詠むことだからと云つて。

（通解）また船のあるじがいふには、この二月まで、とうとうなつたと嘆いて退屈に堪へられなくて、人も詠むことだから、私も詠まうと云つて、氣慰みに一首詠んだ。

ひき船の綱手のやうな、長い〳〵春の日を、四十日も、五十日も、船の上で私は暮らして來た。

聞く人の思へるやう、なぞたゞごとなると、ひそかにいふべし。船君の辛くひねりいだして、よしと思へることを、えしもしひねとて、さゝめきてやみぬ。俄に風浪高ければ、止まりぬ。

（句解）なぞたゞごとなる、何うしてこのやうに平凡であるか。○辛くひねりいだして、エーヤットやう〳〵の事で考へ出して。○えしもしひねにしものしもは唯語勢を強むる詞、えはどうもとか、えうとかいふ意で、どうして誣ひて惡口を云はれやうかと譯するがよからう。○さゝめきてやみぬ。さゝめき合つて船君の歌の評は止めた。

(通解) この歌を聞いた人達の心持ちでは、何うしてこのやうな、平凡な面白くもない事を、歌つたのだらうかと、ひそかに言うであらうが、船君は、辛苦して漸くのことに、考へ出して、自身では、善ひ歌と思うて居るのであるのを、どうしても、つまらないものだと、言ひ立てることは出來ないから、唯内所でさゝやきあつたばかりで止めた。とかくいふうちに、俄に浪が荒立ッて來たから、碇をおろした。

二日、雨風やまず。日ひと日、夜もすがら、神佛をいのる。

三日、海の上、昨日のやうなれば、舟出さず、風の吹くことやまねば、岸の波立ちかへる

これにつけてよめる歌。

緒をよりてかひなきものは落ちつもる
涙の玉子ぬかぬなりけり

かくてけふも暮れぬ。

(句解) 岸の波たちかへる。岸邊に、沖から打ちよする荒波が、寄せてはかへし、寄せてはかへし、その波の寄せかへるのを見て、飯るといふ詞を羨ましく思ッたのである。○緒をよりて、思ふに、此折船中で、躰屈まぎれに、紙か、絹片かで、緒縄を縒ッて

居ッたのであらう。

(通解) 二日、雨風が止まない。日ンが一日、夜ンが夜通し、海上安全を神ほとけに祈つた。

三日、海上が、まだ、昨日のやうであるから、船を出さない。風が始終吹くものだからザブン〳〵と海岸へ、波が打ちよする、打ちよする波は、まだじう〳〵と引きかへす。これについて詠んだ歌は、

このやうに、いくら緒をよッても、よりがひのないことには、通常の玉ならともかく、船中の苦しさに、注いてほと〳〵と落ちる涙の玉だから、貫かうとしても仕方がない。

かうして、けふも暮れた。

四日、かちとり、今日風雲のけしき甚惡しといひて、船いださずなりぬ。しかれども、ひねもすに、浪風たゝず。この梶取は、日もえはからぬかたゐなりけり。

(句解) ひねもす、終日といふこと。○日もえはからぬかたゐ。日和も、よう見定めることが出來ない乞兒の馬鹿野郎かたゐは、貧は不具なものをいふのであるけれ

ど、また乞兒をもいふ。空模樣も見あやまつたから、立腹して罵つたのである。

（通解）四日、楫取は、けふは、空あひが、甚だ悪い、といつて、船を出さなくなつたけれど、一日中少しも浪風は立たない、實にこの楫取は、空模樣も、日和も見ることを知らない馬鹿野郎であつた。

此泊の濱には、くさ〳〵のうるはしき貝、石など多かり。かゝれば、たゞ、昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人の詠める。

よする波うちもよせなむわが戀ふる
人わすれ貝おりてひろはむ

といひつれば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる。

わすれ貝ひろひしもせじ白玉を
戀ふるをだにもかたみと思はむ。

となんいへる。女兒のためには、親幼くなりぬべし。

（句解）くさ〳〵、種々澤山。かゝれば、といふことにて、このやうに貝や石などが澤山多くあるから。昔の人、死にて此世に居ない、即ち土佐で死んだ女の兒のこと、此兒が居たなら、此港の貝や石を拾つて嬉しがることであらうと思ひ出したのである。うちもよせなむ、なんは願ひ望む意味の助動詞で、どうか打ち寄せて下さい。忘れがひ、貝の名、忘れといふ名の貝だから、それにかこつけて、我戀の人を忘れたいと言つたのである。堪へずして、悲しみに堪へずして、堪えきらずに。白玉、玉や貝などは、同じく人の珍重するものだから、これを人の子に譬へたのである。兒を玉にたとへたことは、昔からあることで、かの萬葉集といふ本にも、山上憶良といふ人の歌に、我中の生れ出でたる白玉の吾子古日と言つて居る。女子のためには、唯子の爲といつて、よいところであるが、こゝは女子であつたから、さう言つたのである。

（通解）この泊りの濱邊には、いろ〳〵のうつくしい貝や石などが、澤山にある。澤山あるにつけて、只管亡くなつた女兒を思ひて、船に殘つて居た人が詠んだ。

このやうに貝石などを、打ち寄するならば、どうか浪よ、忘貝をも打ちよせて下さい、さうすれば、わたしが戀ひ慕つて居る、亡兒を忘れうとして、其忘貝を拾ひたせうものに

と言つたれば、また或人は堪へられなくなつて、氣慰みに詠んだ歌は、

たとひ波が寄せても、わたしは、うの忘貝を拾うて、忘れやうとは、しますまい、むしろ、あの玉のやうであつた亡兒を戀ひ慕ふ情をでも、慰めて、後の形身と思つて殘して置きませう

百二十二

というた。燒野の雉子、夜の鶴で、亡兒のためには、親の心は、愚にかへるものである玉ならずもありけむと、人いはむやされども、死にし子、顏よかりしといふやうもあり、

（句解）玉ならずもありけむと、此歌で白玉といつたけれど、まさか、玉のやうにもなかつたと、皆笑うまいか、大かた笑ふであらう。

（通解）まさか玉ほど善くもなかつたであらう、と言う人もありませう。しかし、昔から死ぬる兒は、みめよし、と諺にもいふやうである。

猶おなじところに日を經ることを歎きて、ある女のよめるうた。

手をひでゝさむさも知らぬ泉にぞ
汲むとはなしに日ごろ經にける。

（句解）ひでゝ、手を水に入れる。つける。○寒さ、冷やかさ。○泉、地より湧き出づる水であるが、こゝでは、今泊つて居るところが、和泉の國であるから、即その國の名にかけたのである。○汲む、手ですくふこと。

（通解）やッぱり同じ所に、日をいつまでも、費して居ることを、嘆いて、詠んだは、

ほんとの泉であれば、手をつくれば、すぐ冷かさを感ずるものであるのに、手をつけても冷かさを感せぬ、名ばかりの和泉といふ國に、その泉を汲むことも出來ず、後に日を費した。

五日、けふ辛くして、和泉の灘より、小津のとまりを追ふ。松原めもはるゝなりかれこれくるしければ、詠めるうた、

ゆけどなほ行きやられぬはいもがうむ
をづの浦あるきしの松原。

（句解）小津、和泉國和泉郡の今の大津である。○めもはるばる、見る目も遙々といふ意で、見渡される限り遙々松原が遠くつゞけるのである。○いもがうむをづの、をといふ詞の枕詞、即ち妹が績む苧といふ意、女が績む苧の小津といつたのであ

百二十三

る。

（通解）待ちに待つたが、げふ、ヤットのことで、和泉の灘から、小津の泊を指して、漕ぎ出した。小津の泊は、見渡す限りズート松原ばかりである。いろ〳〵と、苦しいことがあつたから、詠んだ歌。

行げど〳〵、なほ行末はるかで、行き過ぎられぬのは、女が績む苧の、小津の浦の浦つゞきまであるところの長い松原である。

かくいひつゝくるほどに、船とく漕げ、日のよきにと催せば、揖取船子どもにいはく

御船より仰せたぶなりあさきたの
出でこぬさきに綱手はやひけ。

といふ。

（句解）催すせきたてる。○仰せたぶなる、たぶはたまふといふに同じ。○朝きた、朝に北の方より吹いてくる風。

（通解）かやうにいひながら、漕いでくるうちに、オイ、船を早く漕げ、この好い天氣のうちに、催促したれば、揖取、船子共がいふには、

御船から急いで漕げと仰せらるゝから、みなの衆、朝北の、吹いて來ないうちにその綱手の綱を早く曳け。

といふた。

この詞の歌のやうなるは、揖取のおのづからの詞なり。揖取は、うつたへに、われ歌のやうなること、いふとにもあらず。聞く人の、あやしく歌めきてもいひつるかなとて、書き出だせれば、げに三十文字あまりなりけり。

（句解）この詞、揖共のいつた詞。○うつたへ、ひとへに、一向にと同じき副詞、こゝは唯只管（ただすら）の意として解してよし。

（通解）この詞の歌のやうであるのは、揖取が自然に言ひ出したのであつて、何もマア、奇妙に歌らしくいうたものであると云つて、試に文字に書き出して見ればほんとに三十一文字になつた。

今日、浪な立ちそと、人々ひねもすに祈るしるしありて、風浪立たず。今し、かもめ群れ居てあそぶところあり、京の近づくよろこびのあまりに、ある童のよめる歌。

いのりくる風間と思ふをあやなくも
かもめさへたに浪と見ゆらむ

といひて、行く間に、石津といふところの松原、おもしろくて、濱邊とほし。

（句解）浪な立ちそ、浪立つな、立つてくれるな。○今し、しは唯語勢を強むるだけのもの意味は、今といふと違ひあい。○かざま、風の絶え間。○あやなくも、これは、わけもわからず、理も立たず、わかちもなくといふやうな意、わけもなく、やくたいにも。

（通解）今日は、浪が立たないやうにと、一日中、神佛に祈つた甲斐があつて、浪が立たなかつた。折しも、今、鷗が群れ集つて遊んで居る、おひ〳〵内海に入つて來たと見えて淺瀬に鷗どもが遊んで居るのを見ても、みな京が近くなつて來た童までも、歌ふ心になつて來て、詠んだ。

けふは浪が立つてくれるなと、終日祈つたしるしに、今日はめづらしくも、風が絶間になつたと思つて喜んで居るのに、あいにく、をりもをりとて、やくたいな鷗でさへも、白いから、浪が立つて居るのではないかと見ゆて、肝が冷える。

といつて行くあひだに、石津といふ所の松原が來た。

はる〳〵と打ちひらけく、面白く濱邊も遙に」

實に面白いところで、濱邊はる〳〵と打ちひらけて、見わたされるところである。

といひてゆく間に石津といふ所の松原おもしろくて、はまべとほし、またすみよしのわたりをすぎゆく或人のよめる

いま見てぞ身をばしりぬる住の江のまつよりさきにわれはへにける

（摘解）○おもしろくて、景色の奇麗なること○むたりは邊なり

（通解）と歌讀みながら行く間に和泉國石津といふ所の松原の影色が奇麗にして濱邊も廣ろく遠おい、そしてまた住吉の渡りを漕ぎつゝ行く中に或る人が詠みた歌の大意は

住吉の松は年經ぬるものと皆人々が云ひつるけれども今此處で見ると其の樣の年の經たるよりはさきに我が年の方が老ひ衰りたわい、との意である

こゝにむかしつ人のはゝひと日かたときもはすれねばよめる

すみのえに舟さしよせよわすれぐさしるしありやとつみてゆくべく

とあんうつたへにわすれんとにはあらでこひしきこゝろしばしやすめて、またもこふるちからにせんとなるべし

（摘解）むかしつ人のはゝ、このむかしつの「つ」の字は助辭にて單に昔しの人といふに同じ、即ち紀貫之の亡女の母と云ふ意にて即ち紀氏の夫人のこと○うつたへに、は偏の字をあて、俗に「とタスラ」又は「一向」なとの意なり

（通解）此處にてさきになくなりた娘の母即ち紀貫之主の夫人一日片時も其死したる女兒のことをわすれられぬから讀みた歌の大意は

其亡母の事を打忘れんために、わすれ草を摘みて行くからして、住の江に船を漕ぎ寄せてくれよ、もしやこのせつなきこゝろを忘れることができるかできぬかしらぬが兎に角この憂をはらしたいから

和名抄に、萱草を（和須禮久佐）とあり毛詩に、焉得諼草、言樹之背、其詩釋に萱草念人忘憂とあり諼草とは即ち萱草のことにて即ちてゝに云ふ忘れ草のことである

「となん」は推定の辭にてさだかならねども僅かに此の樣な歌讀みたがこれは、一向に其亡女のことを忘れようと言ふことではない其亡女を戀ひ慕ふせつなき

心をしばしの間やすめてまた慕ふことのちからづけにしようとの思ひであり たであろう

かくいひて、ながめつゝくるあひだに、ゆくりなく風ふきてこげども〳〵しりへしぞきにしぞきて、ほと〳〵しくうちはめつべし。かぢとりのいはく、このすみよしの明神は、れいの神ぞかし、ほしきものぞおはすらん、とはいまめくものか、さてぬさをたて、まつりたまへといふ、いふにしたがひてぬさたてまつる

（摘解）ゆくりなくは「ふと」思ひかけなくの意○しりへしぞきにしぞきは、後ろへ益々退りぞくこと○ほと〳〵しくは「ヨッポト」即ち殆んどとの意○うちはめつべしは打ち陷ねらるゝようであり た○れいの神ぞかしは荒神のこと○いまめくものか、いまめくは當世の慾ふかき人情めくものとの意○れいのは靈驗あるとの意○ぬさとは幣のこと

（通解）斯くの如くに言ひてながめながら渡り來る間に不意に風が吹き出して浪が荒れ立ち舟を如何程こぎても漕げばこぐほど後ろへ益々退りぞきて殆んど海の中におちいるようであり た船子共の言ふには、此處の住吉の明神は荒神

にて何時でもほしきものおはすときは風を起し浪を立て給ふと云ふ樣に靈驗ある神であるから今は何か欲しきものがおはすであろうと言ふたが、なるほど住吉明神も當世の慾ふかき人情めかれるのであろうか而して早く幣をたてまつれと、船子が言ふから、言ふに從ひて幣を奉まつりたかく奉れども、もはらかせやまで、いやふきに、いやたちに、かせなみのあやふければかぢとりまたいはくぬさには、御心のゆかねば御船もゆかぬなりなほうれし、と思ひたまふべきもの、たてまつりたまへといふまたいふにしたがひていかゝはせんとて、まなこもこそふたつあれたゝひとつあるかゝみをたてまつるとて海にうちはめつればくちたし、されば、うちつけに、海はゝゝみのごとなりぬれば、ある人のよめる歌

（摘解）ゝはら專の字をあつ俗に「トント」と云ふに當る○いやふきには、いやは彌々の意なり、ふきては風吹きてなり○御心のゆかねば神の御心また滿足し給はねばあり○まなこもこそ二つゝれ云々は人身中最も貴しとする眼にても二つこそあれ其かけがへもなき鏡を手向奉るとなり此は例の諧詞である○うちつけは卒爾なり俗に「スグ」にと云ふに當る

（通解）かようにして幣を奉りたけれども、とんと風がやまないで風いよ〳〵吹き波がいよ〳〵たちさはぎて風波が非常にて船が沈むほど危險であるから船子共は又曰ふには今奉りたる幣にては明神樣の御心が移つらぬから御船も進まぬのであろうからなほ神樣の氣にむいたものを奉まつりなさいといふから其いふに從つて如何にしたらばよかろうかとて眼こそ二つある只一つほかにない大切の鏡を奉りたところが卒然風も浪もやみて海上は恰かも鏡の如く平穩になりたから此有樣について或人の讀むだ歌

「ちはやふる神のこゝろをあるゝ海に、かゝゝみをいれてかつみつるかな」

いたく住の江のわすれぐさしのひめ松なぞいふ神にはあらずかし、目もうつらく、かゝゝみに神の心を、こそは見つれ、かぢとりのことばは、神の御心なりけり

（摘解）住の江のはすれ草きしのひめ松云々此はよく歌の引言にする詞である

が斯く輕々しく詠むやうなるやさしき神ではない眞に神應をそろしき神と云ふ意である○梶師は船子のこと

（通解）ちはやふる神の云々歌の大意は神の御心のある、此海へ鋭を打入れて神慮滿足し玉ふや否やと眺めて見たるなり。かつ見つるは鋭より出たる緑苔である箇樣に非常に住の江の忘れ草、峯のひめ松など云ふやさしき神樣ではない兎に角に神慮は御滿足せられたであろうかと眺めて神の御心を鋭にかけて見たしたが誠に楫取の言ふた辭は神の心と同一でありたわい

六日　みをつくしのもとよりいでゝ、難波の津につきて河尻にいるみな人々女をさなきものひたひに手をあてゝ、よろこぶことふたつなし、かの船ゐひのあはぢの島のおほい子みやこちかくなりぬといふをよろこびて船ぞこよりかしらをもたげさせてかくぞいへる

いつしかといぶせかりつるなにはがた
あしこぎわけてみふねきにけり

いとおもひのほかなる人のいへれば、人々あやしがるこれが中にこゝちなやむ船君、いたくめでゝ、ふなゐひしたまひしみかほには似ずもあるかなどいひける

（摘解）みをつくしは浮標の文字と同じ船舶の通行に便りする目標杭を云ふ○

江尻は淀河の流れ來りて海に注ぐ所なり○ひたひに手をあてゝは額に手をあてとは畏れたる時や喜びの時にする表容である○あはぢの島のおほい子は此は前に淡路の島のたうめといひし人にて紀氏に仕へたる老女である○おもひのほかは案外のこと○いたくめでゝは甚だ賞してなり

（通解）六日の日に浮標のそばから船を出して攝津國西成郡の難波の津といふ所ろに船をつけて淀河の川尻に入りた皆人々女子も老人も額に手をあてゝ喜こびうれしかること限りなし彼の船に醉ひて苦るしみて居たる淡路の老女も京の都か近くなりたることを喜こびて船庭より頭をにゆうともちあげて斯樣なことを言ふた

何時か難波の津に船か到着するか〳〵と待遠にして居たるに今や御船を漕ぎ寄せて其處に着けたわい

最も案外なる人の言ひ出したる辭であるから人々不思議かりて居た其中に氣分惡るかりた紀貫之自身もこの辭を非常に賞めこびてかねて船醉して難儀せられた顏には似ないでよく言ふたなーと言はれた

七日　けふは江尻に船いりたちて、澪ぎのぼる、川の水引てなやみわづらふ、船ののぼることいとかたし

（摘解）　澪ぎのぼるは淀川を船にて澪ぎ上るなり○川の水ひてなやみわづらふは淀川の水枯れ乾て船の通行難澁するといふこと

（通解）　七日今日は河尻に船を入れて船を澪ぎのぼりた川の水が枯れて困難にて船ののぼること殆んど難義でありた

かゝるあひだに船君の病者もとよりこち〳〵しき人にてかうやうのことさらにしらざりけりかゝれどもあはぢのたうめの歌にめで、みやとぼこりにをやあらんからくしてあやしき歌ひねりいだせりその歌

きときては川のほり江の水をあさみ
ふねもわが身もなづむけふかな

（摘解）　船君の病者は紀氏自身のことなり○こち〳〵しきは無骨の意にて歌よひことの無器用なるを云ふかうようのことは此の如き事なり即ち淡路の島のおほい子の歌を指す○みやこほとりにやあらんは京都へ近づきたりしを喜び

誇る意のあやしき歌ひねりいだせりは奇怪なる宜くもない歌を「ウメキ」出したといふ意○

（通解）　かようにしてあるあいだに病人ある紀貫之は元來無器用ある性質であるから到底淡路の老人のように歌などを讀むことは更らに知らない去れ共此人の歌ひし歌を喜こび賞むるにあまり又自分にも都へ近くなりたことを喜こび誇りておるのであるから、ようやくうめき出たした歌は

荒き浪路を經て漸やくにして此地にまで來たれりと思へば又た川の水が乾て舟の行き惱みはげしく加ふるに我身も病に罹りて苦痛するといふの意である

（注意）　きときてと重ねたるは意をおもくすることあり

これはやまひをすればよめるなるべしひとうたにことのあかねは今ひとつ
とくと思ふ船なやまずはわがためにの
水のこゝろのあさきなるべし

この歌は、みやこのちかくなりぬるよろこびにたへずして、いへるなるべし、あはぢのこの歌におとれり

ゐたくいはざらましものを、と、くやしがるうちに、よるになりてねにけり

（摘解）あはぢのごの歌はあはぢは淡路の島のおほい子のことなり○ごの歌とは御歌といふこと○ゐたくいはざらましものをとは、ゐたくは妬む意なりあはぢの歌におとりたる歌を詠みてねたましく殘念なるを云ふ○いはざらましものをは歌を詠まずして居りなばよかりしなんとの意

（通解）是歌はちようど其時に病氣をして居りたから簡樣な歌を讀みたのである誰人も歌にはあきぬものであるから今も一つこのような歌をよみた

京都へ行かんと思ふ船をかように川の水が乾て船行が難澁するはつまり水の心か深切心なく我等を思ひやりをせないからであるであろう

この歌は都の近かくなりたことを喜びてたまらずして歌ひたのであろう此歌は淡路の老人のよみた歌よりは劣りておる

あー殘念だ讀まねはよかつたと、くやしく思ひて殘念かりておる中に夜になりたからいねた

八日　なほ川のほとりになづみて、烏かひの御まきといふほとりにとゞまる、こよひ船君、れいのやきひ、おこりて、いたくなやむある人あざらかあるものもてきたりよねしてかへりごとす、おとこどもひそかにいふなり、いひほしてもつるとやかうやうのこと、ところ〳〵にあり、げふせちみすれはいをもちゐず

（摘解）なづみては停滯してゐること○烏かひの御まきとは攝津國烏養牧といふ所あり○れいのやまひは老衰したる人によくある持病のことをいふたのである○あらざかなるものは鮮魚を云ふ○よねしてかへりごとすは米を返禮にしたりといふこと○いひほしてもつるとやは飯粒にて鮮魚を釣るといふこと即ち鮮魚の返禮に米を贈りたから例の諧言もて云はれたのである○せちみは節忌なり○いをもちゐずは魚を食せずとなり

（通解）八日の日は猶川の水が少なきためこの川の邊に停まりて攝津の烏飼の御牧といふ所の近傍に止まりて居たが一寸の此の夜船君なる紀貫之主は例の持病が起りて、非常に難義でありた其時或る近所の人が鮮魚を持ちて見舞ひてくれたから船の中に何も返禮するものがないから米を返禮にやりた、そこで他の人等は窃かに言ふたであろう、ちようど飯粒で魚を釣るようだと然し此樣な

ことは此度の歸り道では所ろ〳〵で度々ありた、斯く鮮魚をもらひたけれど今日は生憎節忌日でおりたから此魚は用ゐなかつた

九日　きこゝろもとあきにあけぬから、舟をひきつゝのほれども、川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる、このあひたに、わだのとまりのあがれのところといふ所ありよねいをなどこへばおくりつ、かくて舟をひきのぼるに、なぎさのゐんといふ所を見つゝゆく、その院のむかしを思ひやりてみればたもしろかりける所なり

（摘解）ゐざりにゐざる、はゐざりの行くやうに舟が進まぬこと○わたのとまりは攝津の國にあり○あかれのところは人々船より上りて四方へ散り行く今の追分の如き所を云ふ

（通解）九日早く京都へ歸りたいと待ちかね急ぐから夜の明ぬうちより船を出したから如何程船をこぎ、上りても、川の中に水が少ないから、ちようど、いざりの行くがようにぼつ〳〵とのぼりた、れこれする中攝津國西成郡和田の泊より上陸地なる追分がありた、が人々米や魚などを欲しきものを贈り來たりたかようにして船を洩きて上るあいだに渚の院（河内國交野郡にあり昔文德天皇の

離宮である）と云ふ所を見つゝ上り行きた其渚院の昔しの歴史のゆわれを思ひて見ると、いと興味がありて面白き所である

惟喬親王の御ともに在原業平の中將の

「世の中にたえて、さくらのさかざらば、春のこゝろはのどけからまし」

といふ歌よめる所なりけり。いま興ある人、ところに似たる歌よめり

千世へたる松にはあれどいにしへの
こえのさむさはかはらざりけり、

またある人のよめる

君こひて世をふるやどの梅の花
むかしの香にぞなほにほひける、

といひてぞみやこのちかづくをよろこびつゝのぼる

（通解）惟喬親王の御供人なる在原業平の中將此世の中に絶へて少しも櫻の花の咲かぬものでありたならば春にみな浮き立つ人の精心も閑部なものであらうと歌はれた所である

この歌の文句結びの(まし)と云ふ字は推定の輕ろき辭である

そこで今船中の興味を感ずる人(即ち紀氏自身を指す)この所に似より線故ある

歌を讀みた

此歌の大意は

千世の久しきを經ぬる松であり ても、やはり松風の寒きことは昔も今も變りはせぬけれど渚の院は僅々たる年代の間に斯樣に荒れ殘れたりさても果なきことであるわいとなり

又或人の讀みた歌の大意は (紀氏自身のこと)

惟喬親王の君を戀ひ慕ひて年を經たる渚の院の梅の花の香は昔も今も變りて居ぬに、何故に渚の院ばかりは此樣に變りて荒れたのであろうよとのことである

斯ように歌を讀みて、京都の近つくことを喜こびながら上りた、

かくのぼる人々のうちに、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、いたりし國にてぞ、子うめるものどもありあへるみな人、ふねの泊る所に子をいだきつゝおり

のぼりす。これを見てむかしの子のはゝかなしきにたへずして、

なかりしもありつゝかへる人の子を
ありしもなくてくるぞかなしさ

といひてぞ。おきける、ちゝもこれをきゝて、いかゞあらんかうやうのこと、うたこのむとてあるにしもあらざるべし、もろこしもこゝも、思ふことたへぬときのわざとか、こよひ、宇土野といふ所にとまる

(摘解) いたれりし國は任所土佐國を云ふ○おりのぼりす、は船より下りて陸に上るとなり、○むかしの子の母、亡き子の母にて紀氏の夫人なり。

(通解) 斯く上る人々の中に京都より土佐の國に下りた時は誰人も小兒は無かりたのであるが任所なる土佐の國にて、小兒を生み育てた人も居りて其人をも見受けたが皆其人等は船の泊る所にては子兒を抱きながら上陸したり船に下り乘り込みたりしておる此有樣を見て昔し亡くなりた子の母即ち紀氏の夫人は、かなしみにたへづして、此歌をよみた

大意は

任所なる土佐國へ下る時には子のなかりし人にても、みな子供をまうけて歸京するに我は反つてありし子を亡ふて歸るか悲しきことなりと言ひて泣きて居た、父親なる紀氏自身もこれを聞きて如何に感じたであろうか

凡て此樣なことは、あながち歌を好むとて讀むものではない唐土でも日本でも詩歌は物好みに作るのではない、心に思ふことありて自然に發し來るわざであるとか云ふか實にそのとうりである今夜は攝津國島上郡の鵜殿と云ふ所に泊りた

十日　さはることとありてのぼらず京へ上らなかりた

（通解）少し故障がありて舟をやらず京へ上らなかりた

十一日　雨いさゝかふりてやみぬ、かくてさしのぼるに東のかたに、山のよこをれるを見て、人にとへば、八幡の宮といふ、これをきゝてよろこびて、人々をがみたてまつる山崎の橋みゆ、うれしきこと、かぎりなし、こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をとゞめて、とかくさだむることあり、この寺のきしのほとりに、柳おほくあり、ある人

この柳のかげの川のそこにうつるを見て、よめる歌

さゝれなみよするあやをば青柳の
　　かげのいとしてあるかとぞみる

（摘解）さしのぼるは船を棹さし上ること○よこをれるは山の重なりて横たはることと○とかくさだむることは、とやかくと京に入らん用意仕度を決定して置くこと、

（通解）十一日雨が少しばかり降りたが後にはやみたかようにして船に棹さしこき上ぼりて居たが東の方にあたりて山が重疊して横はりて居るのを見て、あれば何處かと問ひたら山城久世郡八幡の宮であると答へた、この答を聞きて喜びて船中の人は皆拜し奉りた、山崎の橋も見えて來たから喜しきを此上ない此處即ち山城乙訓郡山崎の橋の近傍相應寺（此寺は貞觀年中權僧正壹演の開基した寺である）の側へ暫時の間船を止めて、何や角やと上陸の用意身仕度をしたが扨この寺の岸の邊りに柳の木が澤山に生いて居たが或人この柳の枝の影が川の水底にうつれるを見てよみた歌の大意は小浪の此岸に寄する波紋を見れば

青柳の水に映ずる其影は、千筋の糸を以て織物を織るが如くに見ゆるとなり

十二日　やまざきにとまれり

十三日　なは山崎に

十四日　雨ふるけふ車京へとりにやる

（通解）十二日と十三日の雨日は山崎に泊まりた

十四日に出立するつもりでありたが雨がふりだしたから今日乘る車を京都へとりにやりた

十五日　けふ車ゐてきたれり、舟のむコかしさに、ふねより人の家にうつる、この人の家よろこべるやうにて、あるじしたり、このあるじの、またのあるじのよきをみるにうたてかもはゆ、いろ〳〵にかへりごとす家の人のいでいり、にくげならず、ゐやゝかなり

（摘解）車ゐてきたれり車を率ゐて來れることなり○舟のむつかしさには俗に「ムサクルシサ」といふに同じ○うたてかもはゆは饗應が甚だ手厚くして氣の毒に思ゆるとなり○ゐやゝかなり、は禮義うや〳〵しく正しきを云ふ

（通解）今日車を率ゐて來た長らくのあいだ船中に居て、むさくるしかりたが今日ようやく舟を放れて人家に入ることが出來た、この歸り來たりて人の家に入ると何れも家人に喜こべる有樣で種々と饗應してくれた此もてなしのよきこと又其饗應する主人饗應の手厚きを見るに付けて氣の毒に思ひた種々と返禮もしたかとにかくめづらしかりて喜び迎ふる人々が出たり入りたりする有樣は決して見苦くはない、禮義極めてうや〳〵しく正しきことでありた

十六日　けふのゆふつかた、京へのぼるついでに見れば山崎のたなゝる、小櫃の繪もまがりのはらのかたもかはらざりけり

うる人の心をぞしらぬとぞいふなる、かくて京へゆくに鳥坂にて、人あるじしたりかならずしもあるまじきわざなり、たちてゆきしときよりはかへる時ぞ人はとかくありける、これにもそれにもかへりごとす

（摘解）山崎のたなゝるは、山崎町の店といふこと○小櫃の繪、小びつは小供の翫弄にする器物なり其櫃に藤の花や、梅の花などの繪あるを云ふ○まがりのはらのかたも、まがりは和名抄に環餅とあり、はらのかたは、法螺貝の形したるをさす

今の卷煎餅の如き菓子をいふ、

（通解）今日の夕方京都へ上ぼる道の序でゝを見ると山崎町の店先きにならべてある小供の翫弄器物なる繪や法螺貝の如き形ちしたる菓子などの形ちありさまも昔しよりも變りて居らぬされどこれを賣り居る商人等の精神は昔しと變りて居るかどうかはしらぬけれども定めて昔しの如き質朴なるものではあるまい京都へ上り行く道にて山城國乙訓郡石塔寺の南なる島坂と云ふ所にて其所の或人等饗應をしてくれたこれは思ひがけぬことで必ず此樣な饗應をしてもらうわけはない筈でありた凡て出立して行く時よりは歸へる時てそは人々誰でも兎や角と深切にしてくれるものである此人にも其人にも返禮をした

夜になしてみやこにはいらんと思へばいそぎしもせぬほどに月いでぬ、桂川の月のあかきにぞわたる、人々のいはく、この川、あすか川にもあらねば、ふち瀬さらにかはらざりけり、といひてある人のよめる歌

ひさかたの月にぬひたる桂川

そこなるかげもかはらざりけり

又或人のいへる

あま雲のはるかなりつる桂川

そでをひてゝもわたりぬるかな

またある人のよめる

かつら川わが心にもかよはねど

かなじふかさになかるべらなり

京のうれしきあまりに歌もあまりぞふはかる夜ふけてくれば、所々も見えず、京にいりたちてうれし

（摘解）桂川、山城國葛野郡にあり○月のあかきは、月の明るきをいふ○あすか川は大和國にありてこの川はいと淺き川にて、いさゝか雨降りても直ちに水出て淵瀬の變る川なり○久かたの月に生ひたるは桂川といふ句の枕辭である○京にいりたちてうれし、は京に着きてあゝ嬉しく喜ばしきをいふ

（解通）夜になりて都に入ろうと思ひて居れば左樣急ぎも爲ない彼是する間に

月出でたり桂川を夜の月の明りて渡りた、人々皆云ふに、此桂川は飛鳥川のように淺さくないから昔も今も淵瀬の場所が更に變りて居ないと云ふて或人の讀める歌の大意は

久方の月の中に生いて居る桂川の、空と月とにうつる影は、昔とすこしも變らずに見ゆるが、京の人の心は、如何にぞや變りて居るであろうとの意

また或人の讀む歌の大意は

天雲の遙かなる如く土佐國より遠方に思ひし桂川も今は袖を浸すばかりに渡ることゝなりたわいと云ふ意

又或人の讀みた歌は

此桂川は我々の心が通じて居る次第でなけれども此川の流れの深きが如く我々が此川を戀ひ慕ふて居た心と同じように深く流れて居るわいとなり

兎に角京都へ歸り着きたることの嬉しく喜ばしきあまり此樣に歌も澤山讀みたつ(此のもの字は嘆息の意あり)段々と夜深けて來たから所々方角も見へずなりて京に到着して嬉しかりた

家にいたりて門にいるに、月あかければいとよくありさま見ゆきゝしよりもまさりて、いふかひなくぞ、こぼれやぶれたる、家をあづけたりつる人の心も、あれたるなりけり、あかがきこそあれ、ひとつ家のやうあれば、のぞみてあづかれるなり、されはたよりことに、ものもたえず得させたりこよひかゝることゝ、こわたかにものもいはせずいとつらく見ゆれど心ざしはせんとす

(摘解) いふかひなくぞ、詞にいはれぬ程になり○こわたかにものもいはせず、聲高かに物をも言はぬとなり○つらなくは無情または薄情の文字をあつめ不深切なることを云ふ○心ざしはせんとす、は返禮はせんと欲すとなり

(通解) 自分の宅に至りて門に入りたるに月の光りか明かいから最も能く其樣樣有樣が見へたがうはさを聞きて居たよりも勝さりて言ふに言はれぬ程打毀れ破れて居た家を預つけた人の精神も此有樣と同樣に薄情にも荒れたのであろう、中垣こそはあるけれど一家のような有樣であるから隣りより時々のぞき見てくれると云ふてあづかりたのである、さような次第であるから土佐の國から都へ便のある度毎に何與れとなく絶へず品物を、やりて居たのである、然るに

今夜歸りて見れば意外に此有樣である薄情なものであると聲高には物を言わぬけれど、いと無情にて不深切なることに見ゆるけれども返禮丈けはしようと思ふて居る

さて池めいて、くぼまりて、水づける所あり、ほとりに松もありき五とせ六とせのうちに、千とせやすぎにけん、かた枝はなくなりにけり、いまおひたるぞまじれる、おはかたみなあれにたれば、あはれとぞ人々いふ、思ひいでぬことなく、思ひこひしきがうちに、この家にて生れしをむなごのもろともにかはらねば、いかゝはかなしき、みな人もみな子いたきてのゝしる、かゝるうちに、なほかなしきにたへずして、ひそかにこゝろしれる人と、いへりける歌

うまれしもかへらぬものをわがやどに
　こまつのあるを見るぞかなしき

とそいへる、なほあかずやあらんまたかくなん

見し人をまつのちとせにみましかば
　とほくかなしきわかれせましや

わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさずとまれかくまれとくやりてん

（摘解）水づける所あり、は水のある所ありとなり○おほかたみなあれにたれば我屋敷中のもの大方荒れ廢れたれはとなり○のゝしる、は騷々敷言語すること○こゝろ知れる人は紀貫之氏の夫人をいふ○とくやりてん、は此土佐日記は我が思ひ出てのまゝを記せし徒文（いたづらぶみ）にて他人に見せがたきこと多くあるから疾く之を破り棄てんとなり「やり」は破りにて「てん」は棄てんと云ふ意を含む詞なり

（通解）扨て池の如くに窪りて水の溜りてある所かある其邊りに松の樹もありたが何しろ五年か十年か經たる中に千歲も過ぎたものゝように松の樹の片方の枝は切り降して無くなりて居る今頃生へたかと思はるゝものも交はりて居る大方屋敷の中は悉く荒れ切りて居るから私ばかりでなく他の人も皆な、あはれあさましき變化の有樣であるものというた、何事何物を見るにつけても昔の事を思ひ出たして嘆きの種とならぬものはないが中にも此家の中にて昔し出立前に出產女の子を土佐の國に連れ行きたのであるが此度自分共の歸宅する

時に共に連れ歸へることが出來なかつたから思ひ出すと如何の位い悲しきことであるか同行の船中の人々たちは皆子供を抱きてがや〳〵騒ぐ敷さはいで居たが、斯樣な有樣を見るか中にも猶悲しみに堪へないから、竊かに其自身の精神を知りて居る夫人と歌ふた歌の大意は

此家にて出生したる、女子の非に歸京せぬを、わが宿の庭に、昔しはなかりし小松の生ひたるを見るにつけ、いよ〳〵思ひ起して悲しいことである

と讀みた猶他き足らす讀みた歌の大意は

亡女子を、此庭に生ひ出し松の千年の齊の如くに長からんことを見るならばかく二度と逢われぬ悲しき離別はあるまじきをとの意でありた

何分にも女の子のことが忘れがたく口惜しきこと多くありたけれど中々に言ひ盡すことが出來ない兎もあれ角もあれ此日記は徒ら文であるから人に見られぬうちに疾く破り棄てよう　（完）

國文講義終

明治中學會編著

中學全書

言文一致

國文法講義 全

發行所　東京　明治中學會

國文法講義目次

緒言
總論
第一章　單語篇
品詞
第一節　名詞
第二節　代名詞
第三節　動詞
第一表　動詞の語尾活用法
第二表　形容詞の語尾活用法
第四節　形容詞
第三表　助動詞の活用法
第四表　動詞と助動詞との連續　其一
第五表　動詞と助動詞との連續　其二
第六表　動詞と助動詞との連續　其三
第七表　助動詞と助動詞との連續
第五節　助動詞
第八表　助動詞

第六節、副詞
第七節　接續詞
第九表　接續詞
第十表　動詞形容詞助動詞と天爾波の連續
第八節　感動詞
第九節　熟語、疊語
第十節　發語、續語
第二章　文章篇
第一節　主語、客語、說明語
第二節　修飾語、主部、客部、說明部
第三節　枕詞
第四節　聯構文
第五節　挿入文
第六節　倒置句
第七節　言掛、秀句
第八節　結法
第九節　呼應
第十節　解剖

國文法講義

緒言

何事でも實用といふことが必要であるが殊に讀書作文に對しては文法といふことが必要であつてその文法がまた實用を主としなければならぬのである、是迄に日本文法は無論のことだが外國の文法でも皆面白くないといふ觀念を抱いて見るものばかりで文法といへばホンの形式を機械的に敎へるものであつて外へは何の役にたゝぬと思つて居るものが多いこれは尤も至極の話で是迄の文法講義といふものがこの最も必要の文法を最も面白くないつまらないものにして仕舞つたのである、何故なれば文法といふものを口でこそ讀書作文に必要なるものであるといふけれども實際は讀書と作文とに全く離して單獨なる一つの興味のない形式をかき集めて得意がつて居たからである、文法といふものはそむなものではない讀書に必要であると同時に作文には最も深い關係をもつて居る學科であるから學問をしようと思ふものはたれも興味をもつて

見なければならぬ筈である

勿論文法といふものがあつてそれから文章といふものが出來た譯ではないが文章の自然に法則となつたものが文法といふ一つの纏まつた科目となつたのであるからこの文法が解れば文章を讀んでも解り易いし、文章を作るにも誤りといふものがなくなる、それであるから學生諸君が最も面白く有益のものだといふ觀念が起らなければならぬのである予が今こゝに講述するのも務めて讀者作文の上に關係をつけて離れしめないやうにして講義する積りである

元來すべて法則となつて居るものはなんでも小說かなにかを臥ながら見るのとは違つて少しは氣を付けて見なければ解らぬといふのは當然であるからいくら興味があるからといつて小說と思つては困るのであるそれ相當に見てくれなくてはならぬ

そこで予が講述の方法はまづこの實用といふことを始終念頭に置いて何にでもこれを應用することの出來るやうにすべてを根本からしつかりと了解させるのであるから少しは面倒と思ふかも知れぬが兎に角讀んで了つてから眞に

實用であるか矢張り坊間に有りふれた文法書であるかといふことを判斷して貰ひたいのである

實用を主として講述するにはどうするかといふに、まづすべての原則を摘み學けて之を解し之に屬して居るすべてのものをこゝで知つた智識で應用して獨力でも了解するといふ極く便利な手輕の方法であるそれには各品詞(後に詳しくいはう)の條の下で之に關するすべてのことを詳しく講義するのである、それで間々に文例を擧げてその品詞の用ひ法なども說明するし、また最後に文章編で作文の法則を詳しく例を擧げて解析して話すことゝする、これがこの講義全体の梗概である

是迄有りふれた文典に演習問題といふものがあるけれどもこれはたゞ一班を示すだけであるから學生にはさして効能がない、そこで予は演習問題は一一例を擧げてその解析の方法を示し、讀者諸君の答案を求むるのである、かうしたならば諸君も一々講習したことに就いてはしつかりと了解せらるゝであらう

大抵文法は音韻と單語と文章との三編に分けて講義するが音韻といふものは

別に專門の科をおして居るものであつて中學程度ではたいした必要もないから之を畧すことゝする、併し單語以下の講義に必要のあるものは之を總編の中に入れて講義して置く

總論

日本の文法を講義する前に一應心得て置かなくてはならぬものがある、それは音である、音といふのは聲の發したものであつていろ〳〵の種類がある、しかし日本固有の音であつて、日本文法を講義するのに必ず知つて居かければならぬ音は五十ある、そしてその音をあらはすのに一つの符號を用ふ、この符號を假名といふ、假名には大畧二樣あるのでその他に變体といつて隨分いろ〳〵とあるがそれは別に一々説明する必要がないから二樣の假名を擧げて示すと左の通りである、

平假名

阿列伊列宇列衣列於列

阿行あいうえお

加行かきくけこ

片假名

阿列伊列宇列衣列於列

阿行アイウエオ

加行カキクケコ

佐行さしすせそ　佐行サシスセソ

多行たちつてと　多行タチツテト

奈行なにぬねの　奈行ナニヌネノ

波行はひふへほ　波行ハヒフヘホ

末行まみむめも　末行マミムメモ

也行やいゆえよ　也行ヤイユエヨ

良行らりるれろ　良行ラリルレロ

和行わゐうゑを　和行ワヰウエヲ

この平假名は弘法大師空海の作つたもので片假名は吉備眞備が作つたものだといふ説があるけれどもそれはまだ定まつたといふ説でもないから斷言することは出來ない、甚だ怪しい疑はしい説である

この兩樣の假名と排列の順序とを諳記して置かないと後になつてこまるからよく〳〵復習して諳誦の出來るやうにして置くがよい今その記憶するのに極く容易い方法を話さう第一番に、アカサタナ、ハマヤラワと一番上の字を覺え次にイキ

シチニ、ヒミキリイ、と覺え、次に、ウクスツヌフムユルユ、と覺え、次にエケセテネ、ヘメエレエ、と覺え、次にオコソトノ、ホモヨロヲ、と覺え、これが横から讀んで自由自在であらう、これで覺ゑ切つたら今度はアイウエオ、カキクケコ、サシスセソ、タチツテトナニヌネノ、ハヒフヘホ、マミムメモ、ヤキユエヨ、ワイウエオと覺へこれで縱から讀んでどれでも直ぐに解るやうになる、

これで大抵五十音が解かつたのであらうからこれから一つこの横從の名稱を話さう、前にいつたアカサタナ、ハマヤラワといふ横から讀んだ十音を阿(ア)列の音といふのである列といふのはナラブといふことであるから横にならんで居るといふところから名をつけたのであるまた列といはないで段とも韻ともいふ、イキシチニヒミキリイ之を伊(イ)列の音といふ、この通りにアイウエオを横から讀んだ初めの音を冠らして阿列、伊列、宇列、衣列、於列と五つに分けるのである

次にはアイウエオといふ縱にある一行の音を阿行の音といふ、行は縱に並ぶといふ字であるからかう名をつけたのである、これもアカサタナハマヤラワの十字を冠らして阿行、加行、佐行、多行、奈行、波行、末行、也行、良行、和行といふのである、

上に述べたのによつて、後になつて阿列の音といつたらアカサタナハマヤラワの十音であつて、加行といつたらカキクケコの五音といふやうに、直ぐ解つてくれなければいかぬそれゆへ管々しいやうではあつたが一々說明して置いた譯である上に掲げた音の圖に就いて諸君は疑問を起して阿行にあるイ、ウ、エと也行にあるイ、エと和行にあるウと同じであるが何のために同じものを重ねたのであらうかと尋ねるであらうが、それは發音の上からは互に似寄つて居て判然區別することが六かしいのみならず古からこの字を通はして用つて來たのであらう、併し全く區別がないことはない、阿行のイ、ウ、エは喉から單純に出る音で單音といふが也行のイ、エ和行のウは熟音といつて阿行以下の九行ごとに各々發聲(後に詳しくいふ)と阿行の各段アイウエオの音と合して一つの音になつたものであるからその區別がある、また和行のキ、エ、ヲと阿行のイ、エ、オと少しも異がつた音が出ぬのに各別に文字があるのは、どういふ理由であるかといふであらう、しかしこれは音聲が變じて來たからであるが、古はもとより判然と區別があつたに違ひないのである、判然と違つて居るからして學も別にある譯であらう、

是迄いつて來たことで五十音圖に就いては最早疑はしい處もあるまいから次に五十音に就いて、音の種類に就いて必要のことだけ話して置かう、

音は、單音、母韻、發聲、熟音、半母音、鼻聲、促聲、濁音、半濁音、清音、拗音の十一種に分ける、

單音といふのは、喉から單一に出る音で阿行の五音(ア、イ、ウ、エ、オ)がそれである、

母韻といふのは、他音と合して一音を出す音であつて、阿行の五音がそれである、この五音は發聲と合して他の熟音を出すから、丁度母が父と合して子を產み出すやうであるといつて、母音と名をつけたのである、

發聲といふのは、阿行以下の加行、佐行、多行、奈行、波行、末行、也行、良行、和行の各音は、その一行々々にその五音を呼び發す一種の聲音がある、この聲音は、日本では文字に形はすことが出來ない、併しこの發聲といふものと母韻とが合して一つの音が出るといふことはたしかの事で、之を歐字で示すと解り易いので英語のコンソナント(Consonant)といふ音がこれに當る、普通はこのコンソナントを子音と譯して居るが寧ろ父音と譯すのがよからう、この發聲を歐文であらはし表に作つて見ようと

發聲＋母韻ノ合											
A ア	K	S.	.T	N.	H.	M.	Y.	B.	W.		
I イ	ka カ	sa サ	ta タ	na ナ	ha ハ	ma マ	ya ヤ	ra ラ	wa ワ	熟音	
U ウ	ki キ	shi シ	thi チ	ni ニ	hi ヒ	mi ミ	yi イ	ri リ	wi ヰ		
E エ	ku ク	su ス	tsu ツ	nu ヌ	hu フ	mu ム	yu ユ	ru ル	wu ウ		
O オ	ke ケ	se セ	te テ	ne ネ	he ヘ	me メ	ye エ	ra レ	we エ		
	ko コ	so ソ	to ト	no ノ	ho ホ	mo モ	yo ヨ	ro ロ	wo ヲ		

右の表にあるA、I、U、E、O、の五字は英字の母韻ヴォーオウェルといひ、K、S、T、N、H、M、Y、B、W、の九字はコンソナントでつまり日本の母韻と發聲とである、であるからこの發聲と母音とが合して一音を成すその音が聲音であつて我邦の阿行以下の各九行の音であることが解つたであらう、

熟音といふのは上にいつたり表にしたりしたので單音と發聲とが相成熟して始めて音となつたものをいふといふことが解つたであらう、

半母韻といふのは、母韻が二つ重なつて發するやうの音で拗音(後に詳しくいふ)の響(ひびき)となるものであるから熟音ではあるものゝ或ときは母音となるもので半ば母音の用をなすものであるからしてかう名をつけたのである

上にいつたので音の大別は解つたであらうがこの外に五十音に入らない聲がある、鼻聲と促聲とがそれである、

鼻聲といふのは、鼻から出て撥(はね)るやうの聲をいふので、ん、の一字ある、

促聲といふのは、口に促まるやうにして出る聲で、つといふ音であるが、つは多行の「つ」とは違つて促まつて出る音であるから右の肩に「ー」の印を附ける、

この鼻聲と促聲とは單獨で出ることがない、必ず他の音の下に附いて出るのである、例へば

鼻聲　ねんごろ(懇)　ぬきんづ(抽)　ぶんてん(文典)

促聲　もつとも(最)　うつたへ(訴)　まつたし(全)

といふやうの類である、この例は大槻氏の引例を用ひたのであるがまだ外にも澤山あるから之にあてはめて行けば分かる、

また五十音の外に一種の熟音がある、濁音と半濁音といふものである、これにも各行とも一種の發聲ありて母韻と合熟して出るものである、しかしこれには別に字はない、たゞ五十音中ノ假名に二點(゛)を右の肩に加へて半濁音をあらはすのである、しかしこれは、僅かの字數である(゜)を右の肩に加へて半濁音をあらはし、圓點(゜)を右の方の肩に加へて濁音をあらはし、圓點から下に擧げて示さう

濁音二十

加行　ガ　ギ　グ　ゲ　ゴ　　多行　ダ　ヂ　ヅ　デ　ド

佐行　ザ　ジ　ズ　ゼ　ゾ　　波行　バ　ビ　ブ　ベ　ボ

半濁音五

波行　パ　ピ　プ　ペ　ポ

清音といふのは五十音すべてがそれであるから「゛」や「゜」の加へてないのはみなこの清音である

拗音といふのは、矢張り一つの熟音であるがこれも別にあらはす文字がないから假名を二字連ね用ひて記すのである、この音にも清音と濁音と半濁音とがある、そしてこの發音は矢張り熟音であるから發聲と母韻とがある、しかしこの母韻は前にもいつた半母韻が來るのである、之を表にして示せば

加行	清音	きゃ	きゅ	きょ	左行	清音 しゃ	しゅ　しょ
	濁音	ぎゃ	ぎゅ	ぎょ		濁音 じゃ	じゅ　じょ
多行	清音	ちゃ	ちゅ	ちょ	奈行	にゃ	にゅ　にょ
	濁音	ぢゃ	ぢゅ	ぢょ	末行	みゃ	みゅ　みょ
波行	清音	ひゃ	ひゅ	ひょ	良行	りゃ	りゅ　りょ
	濁音	びゃ	びゅ	びょ			
	半濁音	ぴゃ	ぴゅ	ぴょ			

のやうなものである、他は推して知ることが出來やう。

尙ほこの外に轉呼音、連聲、通音、通韻、音便などいふものもあるがこれは後日にあつてもよいことであるから、今いはずともよからう

尙ほ言語や何かに就いて話さうと思つたがあまり長くもなるし別段たいした必要もないからこゝで總論をとめて置く

第一章　單語篇

單語といふのは單一なる言葉といふ意味で、たゞ、或る一つの意味を持つた言葉である、その單語に就いて話すからこれを單語篇といふのである、

品詞

品詞といふのは、單語の意味により用ひ法によつていろ〳〵になるその種類を類別するのでその類別された單語がそれ〴〵の品詞である、この品詞には九つある、名詞、代名詞、形容詞、動詞、助動詞、副詞、助詞、接續詞、感動詞、といふものである、してこの名詞とか感動詞とかいふものを品詞といつてその區別、種類を研究するのがこの一章の主眼であるからこれから順を逐つて講義することとしよう

第一節　名詞

名詞は事物の名として用ひられたる詞なり。

この定義に就いて考へると或る事又は物につけた名をあらはす詞が名詞といい

ふものである

今之を詳しくいへば何事でも何物でもその事と物との種類には關係なく、その事の名またはその物の名に用ひられた詞が名詞といふものである、

日本と支那との間に戰起りたり

といふ文章があるとしたならば、日本、支那といふこの二つの詞はこの廣い世界の中にある或二つの國であるといふことは誰れでも知つて居るだらう、サアこの國といふものは何であらうか事であらうか物であらうか、これはいはずともも或一つの物であるといふことはだれも否定すまい、して見ればこの日本といふ詞と支那といふ詞とはともに國といふ物の名として用ひられた名であるから名詞であるといふことが分かる、して戰爭といふのは何であらうか、日本と支那との間に行はれた一つの事であらうまさかに之を物だともいふものはあるまい、さらば戰爭といふのは或事の名として用ひられた詞であつて名詞であるといふことが分る、であるからこゝに示した文章の中には名詞が三つある、日本、支那、戰爭といふ事物の名として用ひられた詞がそれである、

是迄の文法書には、名詞とは事物の名稱として用ふる詞なりといつてあるが、それは少し誤り易い恐れがある何故なれば事物の名稱として用ふる詞であるといつたならば何か名詞といつて別段の詞があるやうであるが實際は別に定まつた詞といふものはないたゝその用ひ法一つで名詞となるのであるから事物の名として用ひられた時に限り名詞となるのであるからだ例へていつたならば、前の文にある戰爭といふ詞も戰ひたりとかなんとかいつたら名詞とはあらないで動詞となるではないか、であるから名として用ひられた時に名詞となるので、あつて名として用ふる詞ではない、併しまた名として用ふる語であるといつても差支ないのもあるが予がいつたやうに事物の名として用ひられた詞だといつた方が穩かであらうと考へる、

例題

人は萬物の靈なり、

馬は遠路を走り、牛は重荷を負ふ、

過を改むるに吝なるべからず、

義經は兵を率ゐて鵯越に向ひたり、

楠正成は無二の忠臣なり、

犬は忠實なる動物なり、

猫は鼠を捕へ、犬は門を守る、

この例題七つの内から名詞を探して之に符をつけて答案とするのである、符はその名詞と思ふ詞の右の旁に[||]の印をつけて置けばよい、

名詞を分ちて二とす、(一)固有名詞、(二)普通名詞、

名詞とは、すべて事物の名稱として用ひられたる詞であるから、形の有る物も、形の無いものも、苟くも事物の名である以上は、其れを形はす詞は名詞である、されば名詞に無形名詞といふのも、有形名詞といふのもある、併しこれは八釜敷區別する必要はないのである、一目見さへすれば、有形であるか、無形であるかは、直ぐに判斷することが出來るのである、故にたゞ用ひ方によりて異つて來る區別を知りさへすればよい、無形と有形との區別は、其の詞によりて表はされたものゝ如何によりて區別せらるゝものであるが、今こゝに擧げた二つの區別は、詞に異

つたことの有ると無いとに拘はらないで、用ひ方によりて異なつて來るのである、例へて見れば、山とか川とかいふ有形のものは、山又は川といふ詞で表はされたもの陸の高いもの、水の流れて居るものであつて、怒とか喜とかいふ無形のものは、怒又は喜といふ詞で表はされて居るが、もとより山とか川とかいふものとは混じられる心配はない、其のもの自身が、まるで異つて居るのである、併し固有名詞と普通名詞との區別はそんな實体からの相異があい、それゆへ混じ易い場合があるから、特に說明しなければならないのである、そこで名詞といふ品詞の中には二種ある、即ち(一)を固有名詞といふ、

固有名詞とは、人名、地名、其他すべて一事一物にのみ限りて用ひられたる名稱あり、前にもいつた通り、普通名詞と固有名詞とは、其のものゝ區別でないから、特別の區劃が判然とはして居ない、固有名詞と同じの普通名詞もあるのであつて、隨分紛らはしいからして、この區別をたてる必要がある、さらば固有名詞といふのはどんなものであるかといふに、人の名であるとか、土地の名であるとか、其の他、或、物それ限りに用ひられて、他には用ふることの出來ない詞である、例へていへば

義經とか義仲とか、武藏とか、周防とか、人の名又は土地の名は、義經それ自身の外に用ふることが出來ない、武藏も、武藏その國より外には用ふることが出來ないつまり其の人か國かの固有に屬するものであるから之を固有名詞といふのである、又年號とかいふものもその通りであるから、讀者讀君は推して知ることが出來るであらう、ところが或人のいふには、義經といふ名は成程源九郎判官であるといふことは分るが、この名は何も九郎判官にばかり限つたものではあるまい、誰がつけてもよからう、して見れば普通名詞ではないかと、しかしこれは一を知つて二を知らないものゝいふことで、義經といふ名がいくらあるとしても、人の名といふものは、それを名乘る人だけであつて、他の太郎や、次郎が、義經とはいはないつければ付けられるが、それをつけた人だけであるから、之を普通名詞とはいへない、義經といふ名がだれもかれもつけてあるもので、義經といへば、人間すべてが名乘るといふのでない、特別に名乘つた人より外はいはないのである其他すべて推して知ることが出來であらう、次に普通名詞はどうであるか、

普通名詞とは、固有名詞にあらざる一切の名詞にして、同種類の事物に通じて、稱す

ることを得る名詞なり、

固有名詞は、一事一物に限りて稱する名詞であるが、普通名詞は、一事一物と限らず、何事にも何物にも、同種類の中に共通なる名詞をいふのである、馬といへば、アラビヤ馬も、仙臺產の馬も、みな含むことが出來るやうに、同種類の中で共通なる名詞である、

そこで固有名詞と普通名詞との區別は解かつたであらうが、これを區別するのに一つ困難な事がある、それは英語などでは、固有名詞は頭文字（キヤピタル・レツター）を用ひて、普通名詞と區別するから一目で解るが、日本にはそんなことがない、故によく〳〵前後の關係を知らないと、大に間違を來たすことがある、

例題

左の文中にある名詞を指示し、併せて固有名詞と普通名詞とを區別せよ、

(一)家康は信玄と三方ヶ原に戰ひたり、

(二)淸水君はまだ馬に乘ることを知らないかしら、

(三)鹿の角を蜂がさすのを見た、

(四)平知盛は桓武天皇九代の後裔なり、

(五)春は花咲きて賑はし、

(六)冬の景色は一層人を窓からしむ、

(七)帝國議會は明治二十三年初めて開かれたり、

(八)鴉に反哺の禮あり、

(九)僕昨日梅花を龜井戸に觀たり、

(十)猫は鼠を捕へ、犬は門を守る、

次に名詞を見別くるために、極めて手短のことがある、それは、何でもかでも、形があつても、形がなくても、事とか、物とか、人が想像からでも考へられるものは、みな名詞たる辭を以て之を形はすのである、何人も名詞の定義を知て居れば、大抵は見別くることが出來るけれども、多くは名詞の下には、が、の、に、を、と、へ、より、まで等の豆爾乎波が來るのであるから、之を見て直ぐに合點することが出來るのである、

(例)山は高く、水は深し、の山と水とは勿論有形名詞であることは、諸君も直ぐに合點するであらう、そして此例で、はといふ豆爾乎波が下に接て居ることも知

るであらう、ところが、漢文の讀法から來た中には、名詞の次に豆爾乎波を略したのが多い、

(例)ある時、正信、上野介に語りしは、これ正信といへる名詞の下に何の豆爾乎波もないしかしこれは略したいけで、意味は豆爾乎波をつけて見なければならないのである、

動詞が名詞に用ひらるゝことあり、是は前に名詞の定義を述べたときいつた通り用ひ方でいろ〳〵になるのであるから、當然のことであるが、一應いつて置かう、戰ふ、喜ぶ、怒る、が戰喜、怒となるが如きものである、

形容詞が名詞となることもある、善し、強し、が、善さ、強さとあるが如きものである、

又名詞が略されて、他の詞のみにて名詞に用ふることがある、長きを取りて短きを補へといふが如きは、長きと短きとの下には、名詞が來るべきである、しかるを、たゞ長き、短きで名詞を略したのであるから、是等の法則を知らうと思ふならば、自然に練習するより外はない、外に法則といつて定まつたこともないから、昔の人の書いたものなどを、多く讀むほかに、よい方法もあるまい、詳しいことは、作文法の條で話

すこと、する、

又漢語を初として、外國から來た詞は、みな名詞にばかり用ふるのである、

以上で名詞がどんなものであるかといふことが、解つたであらうから、是から代名詞の事を話さう、

第二節　代名詞

代名詞は、人、事、物等の名に、代へて、いふ、語なり、

代名詞といふものは、どんなものであるかといふに、名詞の代りに用ふるのである、人や事や物の名は名詞であるから、その代に用ふる詞といへば、名詞の代りに用ふる語であるといふ意である、さらば太郎とか五郎とかいふ人の名や、硯とか机とかいふ物の名などを、一々太郎とか五郎とかいはずに、他の之に代へらるゝ詞を用ひて、其の詞で、太郎であるとか、五郎であるとかいふのを表はすことが出來るのである、其の代りの詞、之れが即ち代名詞といふものである、ただかう云つたばかりでは、解り難いであらうから、こゝに一つの例を擧げて話さう、

(例一)　明鏡もその、裏を照さず、

(例二)　智者も吾が、身を知ることは暗し、

(例三)　其の、申しゝ事も其の、人をも、汝が、聞きて何の、益かあると答へきとど、

(例四)　これは金剛石なり、

(例五)　こゝに二人の兄弟あり、

(例六)　一人のものはこちに向ひ、一人のものはあちに向ひて立てり、

(例七)　我の、汝とゝもに彼を訪はんこと、誰れか之を妨ぐるものぞ、

(例八)　これとそれとを合せてあれに比べよ、

例、一、に擧げたるその、は、明鏡を指していつたものであるから、明鏡といふことの代りに用ひたものである、してこの明鏡といふのは、一つの物であるから、即ち物の名の代りに用ひられたのであつて、代名詞である、

例、二、の我が、は、智者を指していつたのであるから、智者なるものゝ代りに用ひたものである、

例、三、にある、二つの其の、は、いつた事を表はしたものであるから、事の名の代りに

用ひたものである、また汝とは、對手の名をいふ代りに言ふ詞であるから、即ち人の名に代へて用いた代名詞である、何といふのは、博く指していつて、これと定めた事でない、しかし益といふことの定まらない名の代りに用いられたのである、から、矢張代名詞の一つである、

例四のこれは、目前にある物を指していふ詞で、何々の物はといふ名を略したので矢張事物を表はす代名詞である、

例五のこゝは、場處を示したので、一体ならばどこそこにといつて、其の場處の名をいふべきであるのに、その詞を略してたゞてゝといつたのであるから、代名詞である、

例六のこち、とあち、とは、ともに方向を示したので、東の方とか、西の方とかいふべきを略して、たゞこち、あちといつたので、代名詞であることは知れたことである

例七の我といふのは話して居るものが、自分の名をいふ代りに用ひ(汝は前の例三にある通り)彼は自分と對手との外の人の名をいふ代りに用ひ、誰は以外のものを一般に廣く指していつたので、ともにみな代名詞である、

例八これは例四の通り、それ、これよりはやゝ隔れた處にあるものを其の名をいはないで、其の代りに用ふる代名詞である、あれは、また一層隔れたものを呼ぶのであるがみな代名詞であることは、知れたことである、

此の通りに代名詞といふものは、名詞の代りに用ゐられたる詞であるから、文章上では、多くは同一の名詞がつゞいて出るときに、之を略して用ふるのである、

ところで名詞の代りに用ひられるものであるから其の体裁も名詞と同一でなくてはならない、そこで名詞が事物の名稱であるから、事物の名稱の代りに用ひらるゝものが代名詞である、されば事物といふ内には、人もあるし事柄も物品も場處も方向もあらう、その人、事物、地位、方向などの名を一一にいはないで、其の名の代りに用ふる代名詞であるから、自然に其の代用されるものゝ種類によつて區別をたつるのである、

代名詞を分ちて二とす、(一)人代名詞　(二)指示代名詞

人、事、物、地位、方向の名の代りに用ひらるゝ代名であるから、其の代りに用ひられたもの、即ち人の名の代りであるか、又は地位の名の代りであるかによつて區別

する、からこの二つの區別が出來るのである、

人代名詞とは人の名を呼ぶ代りに用ひる語なり

人代名詞といふのは、人の名をいふ代りに用ゐた代名詞であつて、太郎とか、五郎とか、義經とか頼朝とかいふ代りに、我とか汝とか彼とかいふものを稱して、人代名詞といふのである、しかるに文章も談話も、對手なくては成立つものでない、文章も讀者があるから書き、談話も聞者があるからいふのであらから、勢談話するものが、自身で自分のことを名を呼ばないでいひ、又人に對して其の人の名をいはないで、其の代に用ふる詞がある、それでこの人代名詞にもまたそれ〴〵の區別が出來る

人代名詞を分ちて四とする、これは文章談話の中に就いてそれ〴〵の位地の相違から起るのである、

(一)自稱　談話する人が自身で自分の名をいふ代りに、其の名をいはないで、他の詞を用ゐるのを、自稱といふのである、例へば、「我花を見たり」といふ我の如きものである、

(二)對稱　談話するものが、其の話しかくる人、即ち對手の名をいはないで、其の人の名の代りに用ふる詞である、對して居る人を稱する代名詞であるから對稱といふのである、例へていへば、「汝何をかなす」といふ、汝の如きものをいふのである

(三)他稱　談話するものと、對手との間に話し出す人とか、または自分と隔つた人の名をいふ代りに用ひる代名詞であつて、つまり第三者を呼ぶ代名詞である、例へていへば、「彼と汝といづれか大なる」といふ彼の如きものをいふのである、

(四)不定稱　對稱にても他稱にても、其の名を知らない人とか、又はそれと別に定めない人の名をいふ代りに用ひるのを不定稱といふのである、即ち確定しない稱呼といふ意である、例へていへば、「汝は誰なるか」、「誰を是なりと定めん」、「我誰を愛すべき」といへる誰の如きものである、又廣くいつて、いづれとも定めず、名を指さないで衆くの人をいふこともある、「誰れか我が大志を知るものぞ」、「我を圖らんもの誰かある」の誰の如きはそれである、

以上の解釋で、大抵人代名詞のことは解つたであらう、そこで、今迄いつたことを極めて簡單にかき摘んで、四種の人代名詞を表にして示せば次のやうになる、

自稱	對稱	他稱	不定稱
あ、あれ わ、われ（我）	な、なれ（汝） なむぢ	か、かれ あ、あれ（彼）	た、たれ（誰） （だ、だれ）

この表の中で、自稱のあれと他稱のあれとは、語が同じであるが、語調が違ふのである、文章上で之を見分けるには、前後の意味で容易く見分けることが出來る、又普通に用ふ人代名詞はこの表にある通りであるけれともこの他に、また〳〵文章上に用ひて居る語は隨分多い、みなその時代〳〵の相違と、雅語俗語の區別と、また對手の尊卑によつて違ふのであるから、自然に用ひ分けなくてはならない、故に次のやうに少しばかり擧げて示すことゝしやう、

自稱　麿、やつがれ、おのれ、それがし、余、身、自分、私、拙者、我身、身共、此方、手前、內、こち、愚老、貧道、下官、わらは、

等である、この中でも麿などは貴人の用ひたもので、貧道は僧侶が用ひ、下官は官吏が用ひ、わらはは女の用ふる詞であることは、今も異りはないのである、

對稱　いまし、みまし、上、わぬし、わどの、御身、御事、御邊、君、御前、殿、貴殿、貴所、貴公、貴樣、其許、おまへ、あなた、そなた、吾、御料、吾御前、御手前、そち、そこ、ぬし、

等である、してまたこの中でも、いまし、みましは、古き語であつて、吾御料（わどりよ）と吾御前（わどさき）は女の用ひる詞である、

他稱　あやつ、かやつ、そやつ、彼

等である、

不定稱　それ、それがし、なにがし、どなた、

等である、しかしてまた漢文から來たもので、いろ〳〵に用ひてあるのがある、

自稱　朕（これは天子が自身で已（おの）といふときに用ゐるのであつて今我邦の勅語にも、朕とつかつて居らるゝ、支那では極（こく）古い時代には天子とは限らず、だれでも我といふときに用ゐて居た、それを秦の始皇帝の時に天子自己の語としたのである）、寡人、孤（この二つは諸侯が自身で我といふとき謙遜していつた語である）、臣（君に對して下のものゝいふ詞）拙生、小生、不佞、僕、弟（これ等は同輩ぐらいのものにいふ詞）

對稱　陛下、上（この二つは天子に對して、尊びいふ詞）

殿下（これは皇族の王、太子、親王、攝政、關白などにいふ詞）

閣下（又は閣下ともいつて官位の高い人にいふ詞、卿、公、兄、吾子、足下等は、同輩ぐらいのものをさしていふ語であるが、卿とか公とかいふのはいくらか尊き人同士の間で用ひるのである、

此の通りにいろ〳〵尊卑上下の別によつて用ひ方が多いから、文章を作るときなどには、よく〳〵念を入れて愼まなければならない、もし間違つたならば、隨分大した失敬をすることゝなるであらう、又滑稽のことも起る、

他稱　「あやつ」「こやつ」「そやつ」などの辭にてこれは第三人稱ともいひて自分と話す相手方の外に、尙他の或る定まりたる人の名を言ふかわりに用ゐる辭である

不定稱　「それ」「それがし」「なにがし」「どなた」

これも第三人稱であるけれども他稱の「あやつ」とか「こやつ」とかの辭は慥かに誰と定まりたる人を示して互に意思の通じ合うものであるけれども不定稱は未だ何人と定まらざるときに用ゆる語であるから其人が一定せぬとき又は知れざるときに用ゐる語である

指示代名詞　指示代名詞とは事、物、地位、方向、等を指し示すにいふ代名詞である是も亦近稱中稱遠稱不定稱と四種類に分かれてをる

近稱は最も近きに云ふ「これ」「こゝ」「こなた」の如くである中稱は稍や離れたときに云ふ「それ」「そこ」「そなた」の如く遠稱は遠きに云ふ「あれ」「あしこ」「あなた」の如くでありて

不定稱とは其處の名の知れぬとき又は何處と定まらぬときに云ふ語でありて「いづれ」「いづこ」等の如くである又博く諸々の事物、諸々の處をいふこともある「いづくにかあるべき」「いづれも同じ」等の如し

左に表にて示めす

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ	そ、それ	あ、あれ か、かれ	いづれ、なに

地位	方向	
こ、ここ	こ、こなた	こ、こち
そ、そこ	そ、そなた	そ、そち
か、あしこ あそこ かしこ	か、あなた かなた	か、あち
いづこ、いづく	いづかた	いづち

數詞　數詞も名詞の一種にて事物の數をいふ語である其用法、位置、文中にありて正に名詞と同じことである

ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつゝ、むつ、とを、はたち、みそぢ、よそぢ、いそぢ、むそぢ、なゝつ、やつ、こゝのつ、なゝそぢ、やそぢ、こゝのそぢ、

等の語をいふ又是等の語の末尾にあるつ、ち、を去てゝ他の名詞に冠らせて用いることもある

一夜　二路　三筋　四時　五月　六言　七草　八回　九返　十度　二十年

三十文字　四十年

等の如く又(五…い)(十…そ)(五十…いそ)(百もゝ)(千ち)(萬…よろづ)等であるが是等は多くは熟語に用ゐられ且用法も甚だ少ない

動詞

動詞とは事物の有意の動作又は無意の作用を云ふ此動詞なる語は名詞を体言と云ふに對して一名用言、とも、作用言、とも云ふ

例外として稀れに現在の有様を指して動詞の中に加へるのである

例へば「此に人あり」「志其父に似る」の「あり」と「似る」の語は「人」と「志」との現在の有様を云ふのであるけれど此の如き辭は動詞の中に含めてあるから讀者諸子は能く記憶して置かねばならぬ、

凡ての動詞を其動作の性質より區別して自動と他動との二種に分つ

注意　この文典を研究するには此動詞より充分注意して一字一句をも漏らさぬように記憶して置かねば號を逐ふて進むに從かひ了解することが困難であるから諸子は其心して讀まれよ

凡ての動詞は其動作の性質に由りて自動詞と他動詞との二種に區別する。

「自動」　動詞の動作の獨り自ら働らく性質のものを自動詞と云ふ　例へば

「花飛ぶ」「鳥鳴く」の如し是等は其意味が此まゝにてわかる

されど同じく自動詞でありても其動作の係るべき標準がなくては其意味の全く知れないものがある

例へば「鏡は壁に懸る」「顔は前に向ふ」の如きての懸るとか向ふとか言ふ如き辭は唯「鏡は懸る」「顔は向ふ」とのみ言ひては其意味が未だ通じない必ず何處にか懸る」又は「何方へ向ふ」と言はねばならない則ち「壁にかかる」とか「前へ向ふ」とか言ふて始めて完全の語となるであらう如斯場合には必ずての「壁とか」「前とか」の如きめあての語がいるのであるがこのやうに、めあてがありて始めて意味の通づるときには「に、と、へ、より、から」等の「てには」を付するものである。

右の例の中で「飛ぶ、鳴く、」の如きめあてがなくして意味の通ずる辭を無對自動と名づけ懸る、向ふの如きめあてがなくては意味の通せない辭を有体自動と名づけ總稱して單に自動詞と云てある自動詞とは自動性の動詞といふ略語である

「他動」　他動とは動詞の動作か自分より他の物に向つて働らき又は他より自分に向つて働らきかゝり或は他の事物を處分する性質あるものを云ふ

例へば「蠶は絲を吐く」の如き唯「蠶は吐く」とのみにては其意更に通じない其蠶が處分するところの絲と云ふ辭が加はつて始めて其意の通ずるものである斯の如き場合に此の絲なる辭を他動の動作の目的といふのである

（注意）此目的物の加はるときには必らず「を」といふ字を付するものである最も「絲吐く蠶」といふ樣に綴るときは「を」といふ字を略することが出來る此理由は後に文章篇に於て詳しく說く

又、目的物の外に尙其他動の働らき係るべき標準が必要なる場合がある例へば「朱を藍に雜ふ」といふ辭の如き唯「朱を雜ふ」とのみにては其意更に通じない則ち「藍」といふ標準の文字を加へて始めて其意味が完全するのである

（注意）前例の目的物のときには蠶なるものが絲なるものを處分したるものであるけれど後の標準の場合は或る朱なる一物を取り來りて藍なるものへ雜へたるものであるから最初より二種類のものが別々に現存したるものでありて決

して處分したるものではない故に右二例の辭は自づから其性質を異にするのである

而して前の如き場合を「單對の他動」と名つけ後の場合を復對の他動と名つけられてをる(大槻氏文典)兎に角他動詞とは是等のものを總稱して云ふ名稱である

以上の例を左に比較して多く

無對自動　花飛ぶ
單對他動　蠶は糸を吐く

有對自動　顏前へ向ふ
復對他動　朱を藍に雜ふ

斯の例言を比較して篤と其意義を熟考せよ

又同し語でも其用ひ方に因りては自動詞ともなり又他動詞ともなるものがある

例へば

自　風吹く　戸開く　自ら愼む
他　風を吹く　戸を開く　身を愼む

のように自動詞の他動詞に變するときには常に「を」といふ字の加はるものである

又他動詞にて「勤むる業」といふ如く体言即ち名詞に連なるか或は「讀み物」とか「教へ草」とかいふ樣に名詞法に用ゐられたるときは自ら他動の働らきを失ふものである

語根語尾活用

動詞は其動作の意を種々に變化させるものでありて一々之れが例示をなして說明するけれど茲に一言注意しておくのは凡て西洋各國の語は決して日本語の如く語尾の活用といふものがない夫れに反して我國語は此語尾が種々樣々に活用して又其意味をも種々に變化させる妙用あるものにて、しかも一定の方法に依り吾人は知らず識らずの間に各自の思想を言ひ顯はしつゝあるものである此規則は何人か定めたるやといふ其根據とするものはなけれど實に不可思議と云ふて善からふ所謂神定めの法則があるのである

例へば

行　ゆく　ゆき　ゆけ
立　たつ　たち　たて

の如く右の例により「ゆ」「た」等のように語の一定して動かぬ部分を語根といひ「く」「つ」

ぎ、ち、け、て、等の變化する部分を語尾といひ其變化する作用をはたらき即ち動詞の活用と稱ふるのである

又一音に止まれる動詞は語尾がないけれども其語の全体を變化せしめて活用するのである例へば

得（え）、ね　來（こ）、き　爲（す）、せ、し

の如きである

動詞活用法は此の表を熟讀すればわかる

第一表　動詞ノ語尾活用……法

	連體法 Verbal adjective.	中止法 Participle, Present	連用法 Compound form.	第一終止法 Indicative Mood.	第二終止法	第三終止法 Infinitive Mood.	不定法 Gerund.	名詞法	命令法 Imperative mood.
第一活用	ゆーく	ゆーき	ゆーか	ゆーけ	ゆーく	ゆーけ	ゆーき	ゆーか	ゆーけ
	おーす	おーし	おーさ	おーせ	おーす	おーせ	おーし	おーさ	おーせ
	わかーつ	わかーち	わかーた	わかーて	わかーつ	わかーて	わかーち	わかーた	わかーて
	とーぶ	とーび	とーば	とーべ	とーぶ	とーべ	とーび	とーば	とーべ
	よーむ	よーみ	よーま	よーめ	よーむ	よーめ	よーみ	よーま	よーめ
	さーる	さーり	さーら	さーれ	さーる	さーれ	さーり	さーら	さーれ
第二活用	いーく	いーき	いーき	いーけ	いーく	いーけ	いーき	いーき	いーけ
	おーつ	おーち	おーち	おーせ	おーつ	おーせ	おーち	おーち	おーせ
	しーふ	しーひ	しーび	しーへ	しーふ	しーへ	しーひ	しーび	しーへ
	うらーむ	うらーみ	うらーみ	うらーめ	うらーむ	うらーめ	うらーみ	うらーみ	うらーめ
	むくーゆ	むくーひ	むくーい	むくーえ	むくーゆ	むくーえ	むくーひ	むくーい	むくーえ
	こーる	こーり	こーり	こーれ	こーる	こーれ	こーり	こーり	こーれ
第三活用	いーくれ	いーきよ	いーきよ	いーけよ	いーくれ	いーけよ	いーきよ	いーきよ	いーけよ
	おーつれ	おーちよ	おーちよ	おーせよ	おーつれ	おーせよ	おーちよ	おーちよ	おーせよ
	しーふれ	しーひよ	しーひよ	しーへよ	しーふれ	しーへよ	しーひよ	しーひよ	しーへよ
	うらーむれ	うらーみよ	うらーみよ	うらーめよ	うらーむれ	うらーめよ	うらーみよ	うらーみよ	うらーめよ
	むくーゆれ	むくーひよ	むくーひよ	むくーえよ	むくーゆれ	むくーえよ	むくーひよ	むくーひよ	むくーえよ
	こーるれ	こーりよ	こーりよ	こーれよ	こーるれ	こーれよ	こーりよ	こーりよ	こーれよ
第四活用	ゆーか	ゆーき	ゆーか	ゆーけ	ゆーか	ゆーけ	ゆーき	ゆーか	ゆーけ
	おーさ	おーし	おーさ	おーせ	おーさ	おーせ	おーし	おーさ	おーせ
	わかーた	わかーち	わかーた	わかーて	わかーた	わかーて	わかーち	わかーた	わかーて
	とーば	とーび	とーば	とーべ	とーば	とーべ	とーび	とーば	とーべ
	よーま	よーみ	よーま	よーめ	よーま	よーめ	よーみ	よーま	よーめ
	さーら	さーり	さーら	さーれ	さーら	さーれ	さーり	さーら	さーれ
第五活用	いーき	いーき	いーき	いーけ	いーき	いーけ	いーき	いーき	いーけ
	おーち	おーち	おーち	おーせ	おーち	おーせ	おーち	おーち	おーせ
	しーび	しーひ	しーび	しーへ	しーび	しーへ	しーひ	しーび	しーへ
	うらーみ	うらーみ	うらーみ	うらーめ	うらーみ	うらーめ	うらーみ	うらーみ	うらーめ
	むくーい	むくーひ	むくーい	むくーえ	むくーい	むくーえ	むくーひ	むくーい	むくーえ
	こーり	こーり	こーり	こーれ	こーり	こーれ	こーり	こーり	こーれ
第六活用	いーけ	いーけよ	いーけよ	いーけよ	いーけ	いーけよ	いーけよ	いーけよ	いーけよ
	おーせ	おーせよ	おーせよ	おーせよ	おーせ	おーせよ	おーせよ	おーせよ	おーせよ
	わかーて	わかーてよ	わかーてよ	わかーてよ	わかーて	わかーてよ	わかーてよ	わかーてよ	わかーてよ
	とーべ	とーべよ	とーべよ	とーべよ	とーべ	とーべよ	とーべよ	とーべよ	とーべよ
	よーめ	よーめよ	よーめよ	よーめよ	よーめ	よーめよ	よーめよ	よーめよ	よーめよ
	さーれ	さーれよ	さーれよ	さーれよ	さーれ	さーれよ	さーれよ	さーれよ	さーれよ

普通活用

	四段活用	上二段活用	下二段活用
第一活用	(一)(行)ゆーく (二)(押)おーす (三)(分)わかーつ (四)(飛)とーぶ (五)(讀)よーむ (六)(去)さーる	(一)(生)いーく (二)(落)おーつ (三)(强)しーふ (四)(恨)うらーむ (五)(報)むくーゆ (六)(戀)こーる	(一)(得)う (二)(受)うーく (三)(任)まかーす (四)(立)たーつ (五)(雜)かーぬ (六)(歷)ふ (七)(勤)つとーむ (八)(覺)おぼーゆ (九)(恐)おそーる (十)(植)うーうゆ
第二活用	ゆーく おーす わかーつ とーぶ よーむ さーる	いーくる おーつる しーふる うらーむる むくーゆる こーるる	うる うーくる まかーする たーつる かーぬる ふる つとーむる おぼーゆる おそーる うーうる
第三活用	ゆーけ おーせ わかーて とーべ よーめ さーれ	いーくれ おーつれ しーふれ うらーむれ むくーゆれ こーるれ	うれ うーくれ まかーすれ たーつれ かーぬれ ふれ つとーむれ おぼーゆれ おそーるれ うーられ
第四活用	ゆーか おーさ わかーた とーば よーま さーら	いーき おーち しーび うらーみ むくーい こーり	え うーけ まかーせ たーて かーね へ つとーめ おぼーえ おそーれ うーる
第五活用	ゆーき おーし わかーち とーび よーみ さーり	いーき おーち しーひ うらーみ むくーひ こーり	え うーけ まかーせ たーて かーね へ つとーめ おぼーえ おそーれ うーる
第六活用	ゆーけ おーせ わかーて とーべ よーめ さーれ	いーけよ おーちよ しーひよ うらーみよ むくーひよ こーりよ	えよ うーけよ まかーせよ たーてよ かーねよ へよ つとーめよ おぼーえよ おそーれよ うーるよ

別格活用

	上一段活用	下一段活用	加行	佐行	奈行	良行
	(一)(鑄)いる (二)(若)きる (三)(似)にる (四)(乾)ひる (五)(見)みる (六)(居)ゐる	(蹶)ける	(來)く	(爲)す (坐)おはす	(往)いぬ (死)しぬ	(有)あり (居)をり (侍)はべり (在)いますかり (いまづかり)
	いる きる にる ひる みる ゐる	ける	くる	する おはする	いぬる しぬる	あるる をる はべる いますかる
	いれ きれ にれ ひれ みれ ゐれ	けれ	くれ	すれ おはすれ	いぬれ しぬれ	あれ をれ はべれ いまそかれ
	い き に ひ み ゐ	け	こ	せ おはせ	いな しな	あら をら はべら いまそから
	い き に ひ み ゐ	け	き	し おはし	いに しに	あり をり はべり いまそかり
	いよ きよ によ ひよ みよ ゐよ	けよ	こよ	せよ おはせよ	いね しね	あれ をれ はべれ いまそかれ

此ノ表ハ、從來ノ用言活用圖トハ、名稱順序、其ニ異ナル所アリ、又舊圖ニハ、各活用ニ連續スベキ助動詞、豆爾乎波等ヲ一々、各欄内ニ分載セルヲ、此ノ表ニハ除ケリ、

○第一表說明

○表中、普通活用の各種中に、又、各、數種あるとき、(一)(二)(三)等の標にて知るべし、而して、其各種の處に擧げたる動詞は、其同種中の一語を採りて、例として擧げたるもの、と知るべし。例へば、四段活用の(一)の「ゆく」(行)は其語尾「く、く、け、か、き、け」となる、是れと同じく「おどろく」(驚)はく(吐)きく(聞)かく(書)ふく(吹)等、枚擧すべからず、是等の語尾、皆「く、く、け、か、き、け」となる。又、(二)の「おす」(押)と同じきは「うつす」(移)いだす(出)かへす」(返)「けす」(消)など皆是れにて、其に、其語尾の活用は「す、す、せ、さ、し、せ」なり。以下、上二段、下二段、上一段活用等に亘りて、皆、此の通りなりと知るべし。(但し、下一段は、一語のみなり、)

○別格活用は、あらゆる動詞の中に就きて、僅に九語あるのみならば、表中には、その、ある限りを擧げたり。されば普通活用の方の、各種中に就きて、一語づゝ抽きて擧げたるとは、異なる所あり、と知るべし、

○表中、各活用の中に、往々、同形のものゝ、重出せるあり。然れども、是等も、形は、同じけれども、其意義は、異なるものなり、其異なる故は、同じ段の、他類の活用に照して見ば其形を異にするものあるにて知るべく、且、他の助動詞、豆爾乎波、等に連續する通則

に至りても、各異なる所あるなり、尙本文中の助動詞、其他の條に說くべし、

○表の第二の段に、連體法と第二終止法と、の二法を併せ、又、第五の段に、中止法と、連用法と、名詞法との三法を併せて當てたるは、表を省略したるに因る、正しくは、表に更に、三段を增して、全表を九段として、每段に一法づゝ當つべきなり、然れども、今は表の面の、袤大とならざらむを欲し、又、語尾の諸活用を諳記せむに、長くならざらむを欲して、節に從ひて、略きて、二三法を、同段に當つることとしたり、且、其活用の形、普通、別格の九類に亘りて、連體法、第二終止法、共に、各、相同じくもあればなり、

○各動詞の語尾の活用を其語尾のみを採りて、左の如く稱呼すべし、且、各活法を、此の稱呼に據りて、諳誦し居れば、其規則を記憶し易し、

加行四段、く、く、け、か、き、け、
佐行四段、す、す、せ、さ、し、せ、
多行四段、つ、つ、て、た、ち、て、
波行四段、ふ、ふ、へ、は、ひ、へ、
末行四段、む、む、め、ま、み、め、
ノ活用

普通活用

良行四段、る、る、れ、ら、り、れ、
加行上二段、く、くる、くれ、き、き、きよ、
多行上二段、つ、つる、つれ、ち、ち、ちよ、
波行上二段、ふ、ふる、ふれ、ひ、ひ、ひよ、
末行上二段、む、むる、むれ、み、みよ、
也行上二段、ゆ、ゆる、ゆれ、い、いよ、
良行上二段、る、るる、れ、り、りよ、
ノ活用、

阿行上二段、う、うる、うれ、え、えよ、
加行下二段、く、くる、くれ、け、けよ、
佐行下二段、す、する、すれ、せ、せよ、
多行下二段、つ、つる、つれ、て、てよ、
奈行下二段、ぬ、ぬる、ぬれ、ね、ねよ、
波行下二段、ふ、ふる、ふれ、へ、へよ、
末行下二段、む、むる、むれ、め、めよ、
也行下二段、ゆ、ゆる、ゆれ、え、えよ、
良行下二段、う、うる、うれ、ゑ、ゑよ、
ノ活用、

阿行上一段、いる、いる、いれ、い、いよ、
加行上一段、きる、きる、きれ、き、きよ、

奈行上一段、に、に、に、に、に、に、に、に、に、に、ノ活用
波行上一段、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ノ活用
末行上一段、み、み、み、み、み、み、み、み、み、み、ノ活用
和行下一段、ね、ね、ね、ね、ね、ね、ね、ね、ね、ね、ノ活用
加行下一段、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、ノ活用

別格
加行、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、ノ活用
佐行、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、ノ活用
奈行、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ノ活用
良行、り、る、れ、ら、れ、れ、れ、れ、れ、れ、ノ活用

附記　表の如く動詞は五十音の各段によりて活用するものでありて諸學者は之れを區別して四段活用上二段下二段上一段下一段及び正格活用變格活用の名稱を付しておるこれは殆んど一定して居る辭ばにて他の語を用ゐたるものがない去れ共實際は不都合なる名稱にて他の用語のある限りは此用語を廢せねばならぬ何故なれば彼の變格活用の變格なる文字を見よ變と言ふ字は正に對する語でありて其意義は正反の反の字と同意義である即ち他を正といひてこれを反なり

變なりといへば則ち反則なことでなければならぬ然るに諸學者の變格活用といふものは反則を意味するものではない正格活用といふ表の部類以外の活用法といふことを意味しておるのであるして見れば變格も矢張正格の活用であるのである節樣な次第であるから變格活用といふことは極めて語弊がありて初學者は兎角悟り難いに相違ない依て余は諸大家が一定の語を用ひて居るに拘はらず正變なる文字を捨て普通活用別格活用なる名稱を付したのである

又段活の點も上二段下二段、上一段、下一段、といふは極めて不完全なる名稱である故に余は是れ等の語を廢し更に他の語を用ゐんと欲するなれども是れは左の講義に依つて明瞭するであろうから此儘にしておくなれども諸君は決して此等の名稱に重きを置かぬがよい

段活例（普通活用）

四段活用
- 音
- 段……ア
- 段……イ
- 段……ウ
- 段……エ
- 段……オ

上二段活用
- 段……ア
- 段……イ
- 段……ウ

下二段活用
- 段……エ
- 段……オ

上一段活用
- 段……ア
- 段……イ
- 段……ウ

下一段活用
- 段……エ
- 段……オ

又動詞の活用を種々に使用するに七樣に分かれるこれを活用法といふ、この七法を說くに先きだち先づ活用を七法に配當して說こう諸君は余が以下の說明を讀むときには常に右に示せる表を離さず對照せねばわからぬから面倒でも常に眼を離してはならぬ

普通活用　別格活用　あらゆる動詞の語尾の活用の狀態種々なれども其狀の異同を類別するときは九類となない

普通活用

第一　四段活用　六種　　第二　上二段活用　六種

第三　下二段活用　十種　　第四　上一段活用　六種

第五　下一段活用　一種

別格活用

第一　加行　一種　第二　位行　二種

第三　奈行　一種　第四　良行　一種

四段活用　普通法用の第一を四段活用といふ此種に屬するものは第一表に示せるように六種に限る此類の各種の動詞は表に據りて其語尾の活用せる部分のみを排列すれば「く、く、け、か、き、け」「す、す、せ、さ、し、せ」「つ、つ、て、た、ち、て」「ふ、ふ、へ、は、ひ、へ」となりて其活用の語路口調相似て居るから同類としたのである(以下倣之)

うして其活用の音の七法の配當に因りて重複して居る文字を取除くときは「く、け、か、き、け」「す、せ、さ、し、」「つ、て、た、ち、」「ふ、へ、は、ひ、」となるから之れを五十音中の各行に照らして見ると皆其上より四段までの音の中にて活用するから之を四段活用と名けたのである

動詞の中では此の活用に屬するものが最も多いのである而して又加行の音にて活用するを加行四段活用といひ佐行の音にて活用するを佐行四段活用といふのである他は推して知るべし

上二段活用　普通活用の第二を上二段活用別名中二段活用といふ此類の活用も第一表に擧げたる如く亦六種ある其語尾の活用の狀は「く、くる、くれ、き、きよ」「つ、つる、つれ、ち、ちよ」「ふ、ふる、ふれ、ひ、ひよ」なと皆其口調を同じくしてをるそして其活用の中から「る、れ、よ」の音を除くときは「く、き」「つ、ち」「ふ、ひ」などゝなりて之を五十音圖の

各行に照せは次なる下二段に對して圖中の上方の二段の音にて活用するから之れを上二段活用と名づけてある此段の活用の動詞は極めて少ない

下二段活用　第三の活用を下二段活用といふて十種ある其活用の狀は上半にありては「う、うる、うれ」「く、くる、くれ」「す、する、すれ」「つ、つる、つれ」などにて前の上二段活用に似ておる、けれど下半の「え、え、え」「よ、け、け、け、け、よ」「せ、せ、せ、せよ」「て、て、て、てよ」などのところがありて上二段活用とは異なるそして是れも「る、れ、よ」を除くと「う、え」「く、け」「す、せ」「つ、て」となるから五十音の各行の下方の二段の音のみにて活用するそこで下二段活用と稱へるのである

上一段活用　此の類の活用は六種に限る此活用は下半は「い、い、いよ」「き、き、きよ」「ひ、ひ、ひよ」などにて上二段活用に似て居るけれども上半は「いる、いる、いれ」「きる、きる、きれ」「ひる、ひる、ひれ」などとは異なるから是れも「る、れ、よ」を除くと「い、」「き、」「ひ、」となるから五十音圖上方の一段の音のみにて活用する因りて次の下一段活用に對して上一段活用と稱へる

此活用は助動詞の「らむ、べし、らし、」などの辭に接することがある又巨彌波の「とも」といふ語に接する異例がある是れは後に至りて詳說するら茲には畧しておく

下一段活用　此の類の活用は文章語の中にては「ける(蹴)」といふ一語に限る其下半は「け、け、けよ」下二段活用に似て居るけれども上半は「ける、ける、けれ」等となりてちがひがあるから是も「る、れ、よ」の語を去るときは五十音のけの一段であるから下一段活用と名けたのである

別格活用

加行　別格活用の第一は唯一種にて則ち「く(來)」といふ動詞一語のみである其活用は「く、くる、くれ、こ、き、こよ」となりて其狀稍上二段活用のいく(生)の字に似ておるけれども下半の「き、きよ」とならずして「こ、き、こよ」となるから異なりておるのである是も「る、れ、よ」を除けば加行の音が「き、く、こ」にて活用しておるから別格といふのである

この活用には異例がある即ち「き、し、しか」と活用する過去の助動詞に「來し」とも「來しとも」連らなる禁止する副詞に通例ならば「な來そ」と連るのである然るに「な來そ」と連なる是は助動詞、副詞の條にて委しく說く

何故別格といふか、五十音の段にて「を」段の音「こ」に活用しておるからである是れは

は他の動詞にはない只此一語のみであるから別格といふのである

佐行　第二も唯一種にて「す」(爲)と、おはす(御座)との二語のみである此活用の狀は「する、すれ、せ、し、せよ」となりて下二段活用のまかす(任)に似ておるけれど、下半の「せ、し、せよ」となりて「せ、せ、せ、せよ」とならぬことの違ひである此活用も「る、れ、よ」を除けば、佐行の音の「し、す、せ、」と活用するから別格である

此活用も異例がある過去助動詞の「き、し、しか」に「爲き」「爲し」「爲しか」と分れて連らなる又禁止の副詞に「な爲そ」と用ゐずして「な爲ぜ」と用ゐることがある

但し「す」(爲)は名詞にも添ひて熟語となることが多くある例へば「つみす」罪「くみす」與「こゝろす」志の類の如くである

(注意)「解す」「復す」類「なとも皆此活用であるから解せず、復せず、なと用ゐるべきを往々「解さず」「復さず」「敬さんとす」なと用ひるものあり大ひなる誤りである

奈行　第三の活用も唯一種にて「いぬ」(往)「しぬ」(死)の二語あるのみである此活用は「ぬ、ぬる、ぬれ、な、に、ね、」となるから上半は、上二段、下二段等の活用に似て居るけれど下半の口調は四段活用に似て居るから別格と名けたのである

此活用を誤りて四段活用の如く用ゐることあり注意せよ第二活用にて死ぬる時など用ゐるべきとき第一活用にて死ぬ時と誤用し死ね、と云ふ辭は命令の外に用るられぬを死ぬればを誤用して死ねばなど用ゐることがある

良行　此活用も唯一種にて「あり(有)」「をり(居)」「はべり(侍)」「いまそかり」「又いますかり」(在)等の四語に附ける其語尾の活用は「り、る、れ、ら、り、れ、」となりて居るから、其重被して居る音を除けば「り、る、れ、ら」と活用して良行四段活用の「さる」(去)と云ふ語に似て居るけれど其第一活用に於て「さる」(去)はるの音であるけれと此活用は「り」の音である

或は此活用に屬する二語を採りて直ちに「あり」「をり」の活用とも云ふのである

又彼の助動詞の中にある「なり」「せり」「けり」「めり、」等は其第一活用の如くりの音にて終るものは共に此活用と同じことである

此活用も異例あり助動詞のらむ、めり、なり、べし、まじ、らし等は他の動詞に較ぶるときは第一活用に連るべき筈なれば此活用のみは第二活用に連るのである

以上別格に活用は四類でありて各一種を合せて九語となるあらゆる動詞の中にて格別に活用するものは僅に此の九語のみである

凡そ我國の動詞は其第一活用即ち本体の字の段の音であるが通則にて之れに外づるゝは唯良行變格の伊の段の音であるところの(り)に終るものあるのみである又あらゆる動詞の語尾は凡て五十音圖に照して同じ行の音にて活用して他の行の音には活用せないのが通則である

であるから「みゆ」(見)「おばゆ」(覺)「むくゆ」(報)「おゆ」(老)等は「みえ」「おばえ」「むくえ」「おえ」を也行の中の「ゆ、え、」或は「ゆい」にて活用するのである然るにこれを「みへ」「おばへ」「むくひ」「おひ、」などと用ゆるは誤りである又波行の音は「へ、ひ、」跨りては活用せず

凡て動詞の活用を熟知せむとせば前の動詞活用表(第一表)の説明の末に示せるが如く其動詞の語尾活用のみを採りて之れを反覆熟誦せよ然るときは何れの動詞にも其活用が他の行に跨れるはないといふことを曉り得らるべし此の法で推すときはみゆ(見)の語尾はゆであるから其活用は也行の音であると認めて直ちに「ゆゆる、ゆれ、え、え、えよ、」なることを知るを得るが如く凡ての誤謬に陷ねることがない例外として茲に他の行の音と混じて、活用するものを擧ぐるは形容詞の「よし」「よき」「よけれ」「よく(善)」「あし」「あしき」「あしけれ」「あしく」(惡)と打消の助動詞の「ず、ぬ、ね、」と

過去の助動詞のきししかとのみである

法　語尾の活用に因りて動詞の語氣に種々の態度を生すこれを法といふ其法以下の七種に分かる

一 第一　終止法(終止言、裁斷言、斷止言、直接法、別名)……仝
　 第二　終止法(連體言)……仝
　 第三　終止法(已然言、已然段)……仝
二　連體法(連體言、續詞段)……仝
三　不定法(將然言、未然言)……仝
四　中止法(連用言)……仝
五　連用法(連用言、續言段)……仝
六　名詞法(假體言)……仝
七　命令法(希求言)……仝

今左に普通活用中の四類より各、一語づゝ出して、右の七樣の法を説き明すべし其他の活用は準へて知れ

○終止法　此法は動作を單純に言ひて文章の終止とする法でありて第一活用を用ゐるこれが動詞の本体である

例へば

書を讀む、事を勤む、花落つ、月を見る、

等の如く尋常文章を結ぶときは凡て第一活用を用ゐるのである

されど若し動詞の上に、豆爾乎波のぞ、なむ、や、か、の文字の加はりたるときは第二活用を用ゐて結ぶのであるこれを第二の終止法といふ

例へば

書をぞ讀む、事をなむ勤むる、花や落つる、何をか見るの如く

又豆爾乎波のこその字が加はりたるときは第三活用を用ゐるのが通則である例へば

書こそ讀め、花こそ落つれ、月をこそ見れ

右の三種の終止法の事は尚後の文章篇の結法の條に於て委しく說く

○連體法　此法は他の名詞(体言)の上に連りて其名詞の性質狀態等を形容するの

法でありて第二活用を用ゐる(連体)とは名詞に連なると云ふ意である例へば

我が讀む書、花の落つる時、月を見る人、

上二段、下二段、佐行、等の活用にては此法を誤りて事を任す時義を唱ふ人妻戀ふ鹿欺き恨む心など記すこと往々あり是等は必ず第二活用にて(る)の字を加ふべし又名詞に連なるには第二活用にて事足れるに、學校は學藝を敎ふるの所にして又は容易に行はれざるの事なるべし等と用ゐるは贅語である是等は漢文に敎學藝之所など反點をつけて之と云ふ字をも漏さぬように訓じたるより起る誤りである されど國文には斯かるのといふ語は全く不用でありて漢文にても元來敎學藝之所といふ意であるして見れば敎ふるざるは連体法にて直ちに所、事、といふ名詞に連らねばならない

此法は又獨立に用ゐて

讀む書、勤むる人、落つる花、見る月、

等に綴ることがある此法は其下にあるところの名詞を含みて直ちに名詞の如くに用ゐることがある例へば

讀む(事)と、書く(事)とを學ぶ　人の勤むる(狀)に倣ふ

等の類である

○不定法　動詞の第四活用を用ゐて他の助動詞豆爾乎波、等に連續せしむるが爲めの一法でありて其用法一定せず故に不定法といふ例へば

「讀ましむ」「勤めず」「落ちむ」「見らる」など連り或は「讀まば」「勤めば」など連る此法は此處にては詳說せず

○中止法　此法は文の中間にて中止し即ち其意を暫し言ひ止め置きて、末にある他の動詞の法に照應して、其法の意に從ふものである第五活用を用ゐる例へば

書を讀み、字を記す、　事を勤め、功を成す、

花、落ち、鳥、鳴く、　月を見、故郷を懷ふ、

等の如くであるがこれを句毎に分けて言はゞ「書を讀む」又「字を記す」「事を勤む」又「功を成す」等となりて各自に終止とすべきものであるを暫しこの「讀む。」「勤む。」を「讀み。」「勤め。」と言ひ止め置きて末の句なる「記す」「成す」等の動詞に照應して終止の意を終はらしむるのである

此の法は數語を連らねて用ゐることあり又數語を隔てゝ前の句と終りの句とに照應することもあるが斯かる場合には凡て末の照應すべき語の意に從はねばならぬ

假令ば

學を務め、業を習ひ、公益を廣め、世務を開く、

身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げたる人、

等の如く學を務め、業を習ひ、公益を廣め、の句は皆な末の世務を開くといふ句に照應せられ、身を立て、道を行ひ、等の句は亦末段の名を後世に揚げたる人といふ句に照應してそして其末句の中に含蓄せらるゝものである

又

松も引き、若葉も摘ます、なりぬるを、いつしか櫻はやも咲かなむ　(後選集)

身を捨てゝ、憂きをも知らぬ、旅だにも、山路に深く、思ひこそ入れ、

のように凡て前の句は末尾の句に照應含蓄せらるゝものでなくてはならぬ

○連用法　此の法は他の動詞則ち用言に連なりて一箇の熟語となるの法であり

て第五活用を用ゐる連用とは他の用言に連らなると云ふ意である例へば「讀む」と「果つ」と云ふ辭を連らぬるときは「讀む果つ」とはならで「讀み果つ」となるが如くである例へば

「讀み果つ」「勤め行ふ」「落ち入る」「見返る」

の如く又稀には形容詞とも連なることもある

讀み好し、勤め難し、落ち易し、見苦し、等の如し

去れども斯く形容詞と相連らなりて熟語となるものは慣用に限りあるものである

讀み久し、落ち早し、等の語は決して連らならぬものである又此の連用法も其中間に他の語を挾さみて連らぬることもある假令ば

戀ひやわたらむ、吹きな散らしそ」等の如し

但し佐行別格のす(爲)と、良行別格のあり(有)との二ケの辭は連用法を承けない例へば「釣りす」「狩りす」「喜びあり」「隔てあり」、などに連なるものは名詞法にして、「釣りをす」「狩りをす」「喜びのある」「隔てのある」等の意となるのである

故に斯かる場合に連用法の積りにて互に心を隔てあり十分に、事務を任せありなどに用ゐるは非なり此時には「隔ててあり」「任せてあり」のようにと云ふ字を加へねばならぬ

○名詞法　是れは動詞の變して名詞となるの法にて第五活用を用ゐる例へば

讀みを覺ゆ　勤めを怠る　花見に行く

等の如く元來讀む、勤む、見る、などは動詞であるけれども讀み、勤め、花見、などのように用ゐるときは名詞となるのである

又連用上名詞となることがある「讀書」「見聞」等の如し凡て一音の動詞は多くは連用を以て名詞と成るものである「心得」「往來」「晴着」「虚似」等の如くこれ等は連用にて直ちに名詞となるのである

○命令法　此法は他に動作を命じ又は請ひ願ふの意を言ひ表はす法にて第六活用を用ゐる例へば

書を讀め、業を勤めよ、月を見よ、

等の如し此の法は四段活用、奈行別格、良行別格、活用語の外は皆な句の末尾によ。

といふ音のあるものである

但し四段活用に「讀めよ」奈行別格に「死ねよ」良行別格に「あれよ」など用ゐるとあるは感動詞のよである斯の場合には「よ」はなくとも既に命令の意味は十分である

又「讀みね」「勤めね」などのねは半過去の助動詞なるぬの命令法と同じである

（注意）口語にて命令の辭に「こゝへ來い」「受けい」「止めい」など云ふ古法を存して韻を引くものがあるこれは命令のよをいに轉じたるものであろふ

凡そ動詞の活用と法とは殊に十分に研究熟知して置くべし然るときは後の形容詞助動詞等は又を迎へて解くことを得らるゝ

第二表　形容詞ノ語尾活用法

	語根	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用
		第一終止法	第二終止法 連體法	第三終止法	中止法 副詞法
志幾活用	（善）よ	よ－し	よ－き	よ－けれ	よ－く
志志幾活用	（惡）あし	あ－し	あ－しき	あ－しけれ	あ－しく

舊圖ニハ「よく」ト「あしく」トヲ、各二段ニ重出セシメタレド、今ハ併セタリ、說明別記ニヲ

形容詞

定義　形容詞（又形狀言）とは事物の狀態、性質、情意等を形容していふ語なり

例へば「山、高し」、「海、深し」の二語にて說明せば「高し」「深し」は狀態を形容し「是れ、善し」、「彼れ、惡し」の「善し」、「惡し」は性質を形容し「逢ふは、嬉し」「別るゝは、悲し」の「嬉し」「悲し」は情意を形容したものである

○活用　形容詞も動詞の如くに語尾に活用ある法もあるが其活用の有樣が動詞と大に異なりて二種類に分かれる

第一　志幾活用（一種）

第二　志志幾活用（一種）

○志幾活用　此の活用は第二表に示してあるように唯一種のみにて其語尾のみを唱ふれば「し、き、けれ、く」と活用するそれ故其始めの「し、き」と云ふ語を取りて「しき」活用と名づけたのである

此の活用を從來諸學者は「く、し、き」活用と云ふて居る、ろは表の第四の段を第一に置きて其始めの三活用を採りて名づけたのである

凡そ「善し」「高し」「遠し」等は皆な此の活用に屬するのである口語にはこの「し」の發聲を默して「い」と言ひ「善い」「遠い」「高い」などいふのである

初學の者は此の活用の中にある「けれ」を後の過去助動詞の「けり」の活用の部の「けれ」と同じように混同し誤用して「嬉しけれ」を「嬉しけり」など言ふものがあるが注意して誤まつてはならぬ

○志志幾活用　此の活用も表に示してある如くに唯一種にて其語尾は「し、しき、しけれ、しく」と活用すこれも亦其初めの二活用を採りて「し、しき」活用と名づける志幾活用の語根を疊み用ゆるときは率ね變じて志志幾活用となる、例へば「遠し」「輕し」「強し」の志幾活用が重さなりて「遠々し」「輕々し」「強々し」等となるときは、志志幾活用となるのである

故に此の第一活用は表にも示せるが如く「惡し」「嬉し」などになるべきを往々「惡しゝ」「嬉しゝ」などと誤り用ゐるものがあるが此活用には「しゝ」と云ふ活用はな

いから注意せよ

但し「戀ひぢ暮し」「雨の降る日を」などのときに用ゐたる「しゝ」は動詞の語尾の「し」が助動詞となりて居るのであるから紛ぎれてはならぬ

○法　形容詞の法は動詞の法と相似て稍や異なれる處あり動詞中の不定法、連用法、名詞法、命令法がなくして別に副詞法なるものがある

(一)終止法　(二)連體法　(三)中止法（連用言）　(四)副詞法（連用言）

左に形容詞の四樣の法則を大略に說こうその中にて動詞の法と同一なるものは相準へて知れ

○終止法この法は文章の末を結ぶ法でありて凡べて第一活用を用ゐる、これが形容詞の本體である例へば

心善し、　名惡し、

此よし、あし、等を第一の終止法といふのであるが

若し又此善し、惡し、等終止の辭の上方に豆爾乎波の「そ」「なん」「や」「か」又は「こそ」等の語

があるときには第二活用又は第三活用を用ゐて第二終止法第三終止法とすることは動詞のときの例の通りである例へば

心ぞ善き、　心おむ善き、　心や善き、　心が善き、

名ぞ惡しき、　名なむ惡しき、　名や惡しき　名が惡しき

心こぞ善けれ

名こそ惡しけれ

此の三種の終止法の事は尙ほ後章の文章篇にて委しく說くべし

○連體法　この法は他の名詞(體言)の上に連なる法にて第二活用を用ゐる

心の善き人、　名の惡しき者、

と云ふが如し人又は者の如き名詞に連らなる法であるから連体法と云ふのである

口說(くちやすま)には「き」の發聲を獻して善い人、惡しい者など云ふ

或は獨立にも用ゐて

善き心、　惡しき名

等にも用ゐられ

又下にあるべき名詞を言はす其儘語中に含めて直ちに名詞のように用ゐること

もある例へは

善き(物)を取る、　惡しき(物)を捨つ、

と云ふが如くこの物と云ふ語は言はずして其意を含ましむるのである

○中止法　文章の中間にて中止して、末の語の法に照應すること動詞の中止法と同じ(但し第四活用を用ゐる)假令は

性質善く品行修まる　心惡しく行ひ卑(いや)し

の章にて句毎に別つときは性質美し、品行修まる、心惡し、行ひ卑し、とも又は「品行修まり性質善し、行ひ卑しく、心惡し」ともいふことを得るのである

中止法は數語を相互ひに連續せしめ又は數語を隔てゝ他の種々の語に照應せしむることもあるがこれは動詞の中止法と同じことである例へば

(一)心善く(善し)行ひ、正しく、(正し)功も高し

(二)文(たく)高く(高き)骨逞しき人、

(三)幅廣く(ければ)丈長ければ

等の如く相互ひに照應する爲め中止して他の句に接續するものである

○副詞法　此法は形容詞が變じて副詞となるものである假令ば

善く改まる、　惡しく變る　全く無し、

甚しく寒し

(口語にては「く」の發聲を默して「う」とし「善う改まる」「惡う變はる」「宜しうござる」なと云ふと同じである)

右の如く善く、惡しく、全く、甚しく等の語は元來形容詞なれども此時には副詞となりて居るのである

副詞法は良行別格活用の動詞の「あり」と云ふ語に連りて「善くあり」「惡しくある」「甚くあらは」「無くあれ」など用ゐらるゝとき、この「く」と「あ」との二字が約まりて「よかり」「あしかる」「よからむ」「なかれ」などゝなることが常でありて其語尾の活用は粗ほ「あり」と同じことである

又其「善からむ」「無からむ」などの語が更に約まりて「善けむ」「無けむ」等となることもある

又「善からば」「無からば」「戀しからば」「遠けれども」「善けれど」などに古くは「善かば」「無けば」「戀しけば」「遠けれと」「善けど」なとに約めて用ゐたることあり

○語根　「志幾活用」にては、其第一活用の「し」を去てたるものを語根とし「志々幾活用」にては其第一活用を直ちに其儘語根と見るのでありてその語根に接尾語の「み」「け」「さ」などを添ふときは變して名詞となるのである假令ば

○高み　深み　重け　惡げ　善さ　遠さ　樂しげ　悲しさ

等の如し

元來形容詞の語根は他語と合して熟語となるものなれとも形容詞の中にて斯く熟語に用ゐられぬものもある左に其用例の若干を示しておく

志幾活用　古語　長歌　高山　遠野　高光る

永延く　薄暗し　遠々し

志志幾活用　惡し　樣　等し　並　同じ年　嬉し涙

又形容詞の語根を終止法の如くに用ゐることもある例へば

「あな尊」く「あな畏」人に語るな「たぼつかな」うるまの島の人なれや、我が言の葉を知らずかほなる」等の如し

又語根を名詞に用ゐることもある例令は

「鼻高」「背高」「髪長」「夜寒」「端近」「筆太」等これ等は皆名詞であるが殊に人名に多いひ

又語根に「の」を添へて面白の春の夜」ある難有の御心」味氣無の世」など用ゐること

もある後に天再乎波の「の」の條にて詳說する

第三表　助動詞ノ活用……法

連體法

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用	
第一終止法	(1)る	るる	るれ	れ	れ	れよ	押サる、「打タれ、」(被押、打、ナド、
第二終止法	(2)らーる	らーるる	らーれ	らーれ	らーれ	らーれよ	受ケらる、「立テらる、」(被受所立、ナド、
第三終止法	(3)る	るる	るれ	れ	れ		押サる、「打タれ、」(得押之得打之)ナド、
不定法	(4)らーる	らーるる	らーれ	らーれ	らーれ		受ケらる、「立テられ、」(得受之得立之)ナド
中止法	5ず	する	すれ	せ	せ	せよ	押サす、「死ナせ、」(使押、令死)ナド、
命令法	(6)さーす	さーする	さーすれ	さーせ	さーせ	さーせよ	受ケさす、「立テさせ、」(使受、令立)ナド、
	(7)しーむ	しーむる	しーむれ	しーめ	しーめ	しーめよ	押サしむ、「受ケしめ、」(使押、令受)ナド、
使役相	(8)なーり	なーる	なーれ	なーら	なーり		押スなり、「受クルなり、」(押也、受也)ナド、
	(9)たーり	たーる	たーれ	たーら	たーり	たーれ	父たり、「子たり、」(赫々たる、(爲父、爲子、赫々)ナド、
指定							押サず、「受ケぬ、」(不押、不受)ナド、
打過	(10)ず	ぬ	ね	ず	ず		押シつ、「受ケて、」(押了、受了)ナド、
	(11)つ	つる	つれ	て	て	てよ	押シぬ、「受ケなむ、」「受ケにけり、」「押畢、受畢、」ナド、
過去	(12)ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	に	ね	押シたり、「受ケたる、」ナド、
	(13)たーり	たーる	たーれ	たーら	たーり		罪せり、「勉強せり、」「委シクせり、」ナド、
	(14)せーり	せーる	せーれ	せーら	せーり		押シけり、「受ケける、」ナド、
	(15)けーり	けーる	けーれ	けーら	けーり		

未來	(16)む	む	め		押サむ、受ケめ、(將押、將受)ナド、
	(17)けーむ	けーむ	けーめ		押シけむ、受ケけめ、ナド、
推量	(18)らーむ	らーむ	らーめ		押スらむ、受クらめ、ナド、
	(19)めーり	めーる	めーれ	めーり	押スめり、受クめる、ナド、
詠歎	(20)なーり	なーる	なーれ		押スなり、受クなる、ナド、

● 印ノ「たり、」「せり、」ハ動詞ノ下ニハ、連ラズ、

連體法　中止法

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	
指定	(21)べーし	べーき	べーけれ	べーく	押スべし、受クべき、(可押、可受)ナド、
比況	(22)ごとーし	ごとーき		ごとーく	押スごとし、山ノごとく、(如押、如山)ナド、
打消	(23)まーじ	まーじき	まーじけれ	まーじく	押スまじ、受クまじく、ナド、
	(24)じ	じ	じ		押サじ、受ケじ、(不押、不受)ナド、

一終止法　二終止法　三終止法　副詞法

過去	(25)き	し	しか		押シき、受ケし、ナド、
推量	(26)まーし	まーし	まーしか		押サまし、受ケまし、ナド、
	(27)らし	らし	らし		押スらし、受クらし、ナド、

● 印の「じ」に、第二終止法の用例なく「らし」に、連體法の用例なし、

○第三表の説明

○表中の活用、幷に、法の名目等の事、其他、大體、第一表、第二表、に同じと知るべし

○助動詞には、連用法、名詞法、を成さぬが多ければ、表中には省けり、稀にあるは本文中に説いておく、

○欄内の空なるは、其活用の缺けたるなり、

○表に掲げたる外に、助動詞に似たるものは、

○てーむ、(てーめ、)「行きてむ、受けてむ、」など用ゐる「てむ」なり。是れは、半過去の助動詞の「つ」の第四活用なる「て」に、未來の助動詞の「む」を連ねたるものなり、(「め」は、「む」の活用なり、)これを、一の助動詞と立つるは、重復なり、

○てーき、(てーし、)「行きてき、受けてし、」など用ゐる「てき」あり。これも、前項なる「て」に、過去の

助動詞の「き」を連ねたるにて、一語ではない。(「し」は「き」の活用なり。)

○なーむ。(なーめ。)「行きなむ、受けなむ、などの「なむ」なり。是れも、半過去ノ助動詞の「ぬ」の第四活用なる「な」と、未來の助動詞の「む」と連りたるにて、一語ではない。

○にーき。(にーし。)「行きにき、受けにき、などの「にき」なり。是れも、半過去の助動詞の「ぬ」の第五活用なる「に」と、過去の助動詞の「き」とを連用したるにて、一語でない。

○せーむ。(せーめ。)「勉強せむ、周旋せむ」などの「せむ」なり。是れは「爲(ス)」といふ動詞の第四活用の「爲」に、未來のむを連用したるものにて、一の助動詞ではない、以上、五項の事、すべて、第六表、第七表に就きて見るべし。

○けむ。善けむ、無けむ、可けむ、など、形容詞の語根に連れるが如きけむである。

○かり。善かり、惡しかり、などのかりなり。是れは。善くあり、惡しくあり、を約めていふのである。

以上、二項は、形容詞の副詞法の條に委しくとく。

○あり。明なり、靜なり、などのなりである。是れは、明に、靜にと、ありとを、約めていふものである、副詞の條に委し。

○ざり。行かざり、受けざる、などのざりである。是れは行かずあり、受けずある、を約めていふものなり、打消のずの條に說く。

○あらし。たらし。ならし。の類。是等は、ある、らし、たる、らし、なる、らし、を約めていふものなれど、相別ちて解せよ。

○てふ。ちふ。とふ。といふを約めていふものにて、歌詞あり、散文には用ゐず、これも、各自に別ちて、解すべきものである。

○又、春めく、學者ぶる、嬉しがる、議論がまし、男らし、行きたし、などのめく、ぶる、がる、がまし、らし、たし、等は、接尾語として、單語篇の末に掲げてたく。

第四表　勤詞ト助動詞トノ連續、其一。

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用
四段	(行)ゆく (押)おす (分)わかつ	ゆく たす わかつ	ゆけ たせ わかて	ゆか おさ わかた	ゆき おし わかち

活用				
上二段活用	(飛)とぶ	(去)よむ	(去)さる	
	(生)いく	(強)しふ	(恨)うらむ	(熟)むくゆ	(恐)こる	
下二段活用	(得)う	(受)うく	(任)まかす	(立)たつ	(来)かぬ	(歴)ふ	(助)つとむ	(覺)たぼゆ	(感)たそる	(植)うら	
	(絞)いる	(着)きる	(以)にる	(乾)ひる	(見)みる	(居)ゐる	(蹴)ける	
上一段活用	(飛)とぶ	(去)よむ	(去)さる	
	(生)いくる	(強)しふる	(恨)うらむる	(熟)むくゆる	(恐)こる	
下一段活用	(得)うる	(受)うくる	(任)まかする	(立)たつる	(来)かぬる	(歴)ふる	(助)つとむる	(覺)たぼゆる	(感)たそる	(植)うらる	
	(絞)いる	(着)きる	(以)にる	(乾)ひる	(見)みる	(居)ゐる	(蹴)ける	
加行	(飛)とび	(去)よみ	(去)さり	
	(生)いき	(強)しひ	(恨)うらみ	(熟)むくい	(恐)こり	
	(得)え	(受)け	(任)まかせ	(立)たて	(来)かへ	(歴)ふ	(助)つとめ	(覺)たぼえ	(感)たそれ	(植)うゑ	
	(絞)い	(着)き	(以)に	(乾)ひ	(見)み	(居)ゐ	(蹴)け	
佐行	(飛)とび	(去)よみ	(去)さり	
	(生)いき	(強)しひ	(恨)うらみ	(熟)むくい	(恐)こり	
	(得)え	(受)け	(任)まかせ	(立)たて	(来)かね	(歴)ふ	(助)つとめ	(覺)たぼえ	(感)たそれ	(植)うゑ	
	(絞)い	(着)き	(以)に	(乾)ひ	(見)み	(居)ゐ	(蹴)け	

活用				
上二段活用	(飛)とぶ	(去)よむ	(去)さる	
	(生)いく	(強)しふ	(恨)うらむ	(熟)むくゆ	(恐)こる	
下二段活用	(得)う	(受)うく	(任)まかす	(立)たつ	(来)かぬ	(歴)ふ	(助)つとむ	(覺)たぼゆ	(感)たそる	(植)うら	
	(絞)いる	(着)きる	(以)にる	(乾)ひる	(見)みる	(居)ゐる	(蹴)ける	
上一段活用	(飛)とぶ	(去)よむ	(去)さる	
	(生)いくる	(強)しふる	(恨)うらむる	(熟)むくゆる	(恐)こる	
下一段活用	(得)うる	(受)うくる	(任)まかする	(立)たつる	(来)かぬる	(歴)ふる	(助)つとむる	(覺)たぼゆる	(感)たそる	(植)うらる	
	(絞)いる	(着)きる	(以)にる	(乾)ひる	(見)みる	(居)ゐる	(蹴)ける	
加行	(飛)とび	(去)よみ	(去)さり	
	(生)いき	(強)しひ	(恨)うらみ	(熟)むくい	(恐)こり	
	(得)え	(受)け	(任)まかせ	(立)たて	(来)かへ	(歴)ふ	(助)つとめ	(覺)たぼえ	(感)たそれ	(植)うゑ	
	(絞)い	(着)き	(以)に	(乾)ひ	(見)み	(居)ゐ	(蹴)け	
佐行	(飛)とび	(去)よみ	(去)さり	
	(生)いき	(強)しひ	(恨)うらみ	(熟)むくい	(恐)こり	
	(得)え	(受)け	(任)まかせ	(立)たて	(来)かね	(歴)ふ	(助)つとめ	(覺)たぼえ	(感)たそれ	(植)うゑ	
	(絞)い	(着)き	(以)に	(乾)ひ	(見)み	(居)ゐ	(蹴)け	

別格	良行	奈行	佐行	加行
	(有)あり	(往)いぬ	(爲)す	(來)く
	(居)をり	(死)しぬ	(在)おはす	
	(侍)はべり			
	(在)いまそかり			
	ある	いぬる	する	くる
	をる	しぬる	おはする	
	はべる			
	いまそかる			
	なり		なり	
	ごとし		ごとし	
	●らむ			
	●めり			
	●なり			
	●べし			
	●まじ			
	●らし			
	あれ	いぬれ	すれ	くれ
	なれ	しぬれ	おはすれ	
	はべれ			
	いまそかれ			
	せ	いな	せ	こ
	たはせ	しな	たはせ	
	ず(ぬ、ね)		ず(ぬ、ね)	
	む(め)		む(め)	
	じ		じ	
	まし		まし	
	●し、しか		●し、しか	
	あら	いに	し	き
	をら	しに	おはし	
	はべら			
	いまそから			
	つ(て)	つ(て)	つ(て)	つ(て)
	ぬ(な、に、ね)	ぬ(な、に、ね)	ぬ(な、に、ね)	め(な、に、ね)
	たり	たり	たり	なり
	けり	●つ	けり	けり
	けむ	けり	けむ	けむ
	き(し、しか)	けむ	●き	●し、しか
		き(し、しか)		

○第三表には、助動詞二十七あるに、此の表には、十八(第一段に、六、第二段に、二、第四段に、四、第五段に、六)なるは、動詞につかぬ「たり、せり、」の二を除き、所相、勢相、使役相、に屬する七を、第五表に讓りたればなり。○過去、未來、に屬する助動詞は、第六表にも掲げてあり。○「なり」の下に、* 印ノつきたるは、第三表の(20)の詠歎の「なり」なり、印のなきは、(8)の指定の「なり」なり。○• 印あるものは普通活用の連續と、異あるものなり。

○第四表の説明。

○表中の各欄内の上部にあるは、動詞にて下部にあるは、助働詞なり。

○表中の諸動詞、及び、其諸活用は、全く、第一表のものに同じ。

○此の表の上にては、動詞の法(終止法、連體法、命令法、等)の事をば、一切言はずして、只某の助動詞は、某の動詞の第何活用に連續す、とのみ説く。

○動詞の第三活用には、連續すべき助動詞なければ、贅物なれど、活用の、中間にて脱せむは、體裁がよくないからである、但し、第六活用は、全く不用なれば、省く。

○動詞と、助動詞と、連續するやうは、例へば、第一段の欄内にて、「ゆく、らむ、」「ゆく、めり、」「ゆく、なり、」或は、「おす、らむ、」「おす、めり、」「おす、なり、」など、何れの動詞、助動詞、をも、互に相連續せしめて、解すべし、餘皆、此の如し。

○助動詞の下に、「す、(ぬ、ね)、む、(め)、つ、(て)、」「ぬ、(な、に、ね)、「き、(し、しか)、など、括弧中に記せるは、其活用なり。但し、此の表中には、其活用の、惑ひ易く思はるゝもののみを出せり、其餘なるは、すべて、其助動詞の第一活用をのみ擧げたれば、第三表の第一の段に照し求めて、其各活用を知るべし。

○すべて、動詞と、助動詞と、の連續の通則は普通活用の方の、各欄内に記したるをだに覺え得れば足れり、別格活用の方も、押しなべて、これと、同樣なりと先づは心得べし。而して、別格活用の方にて、希有の異例ある所には、特に、• 印をしたれば、心を付くべし。

然して、其異例は、唯、左の四なり。

第一、加行別格の第四、第五、の欄内に於て、「し、しか」は、何れにも連續して、「き」は、何れにも連續せぬ事。

第二、佐行別格の第四、第五、の欄内に於て、「き、し、か、」の、別れて連續する事。

第三、奈行別格の第五の欄内に於て、「ぬ、な、に、ね」は、全く連續せぬ事。